

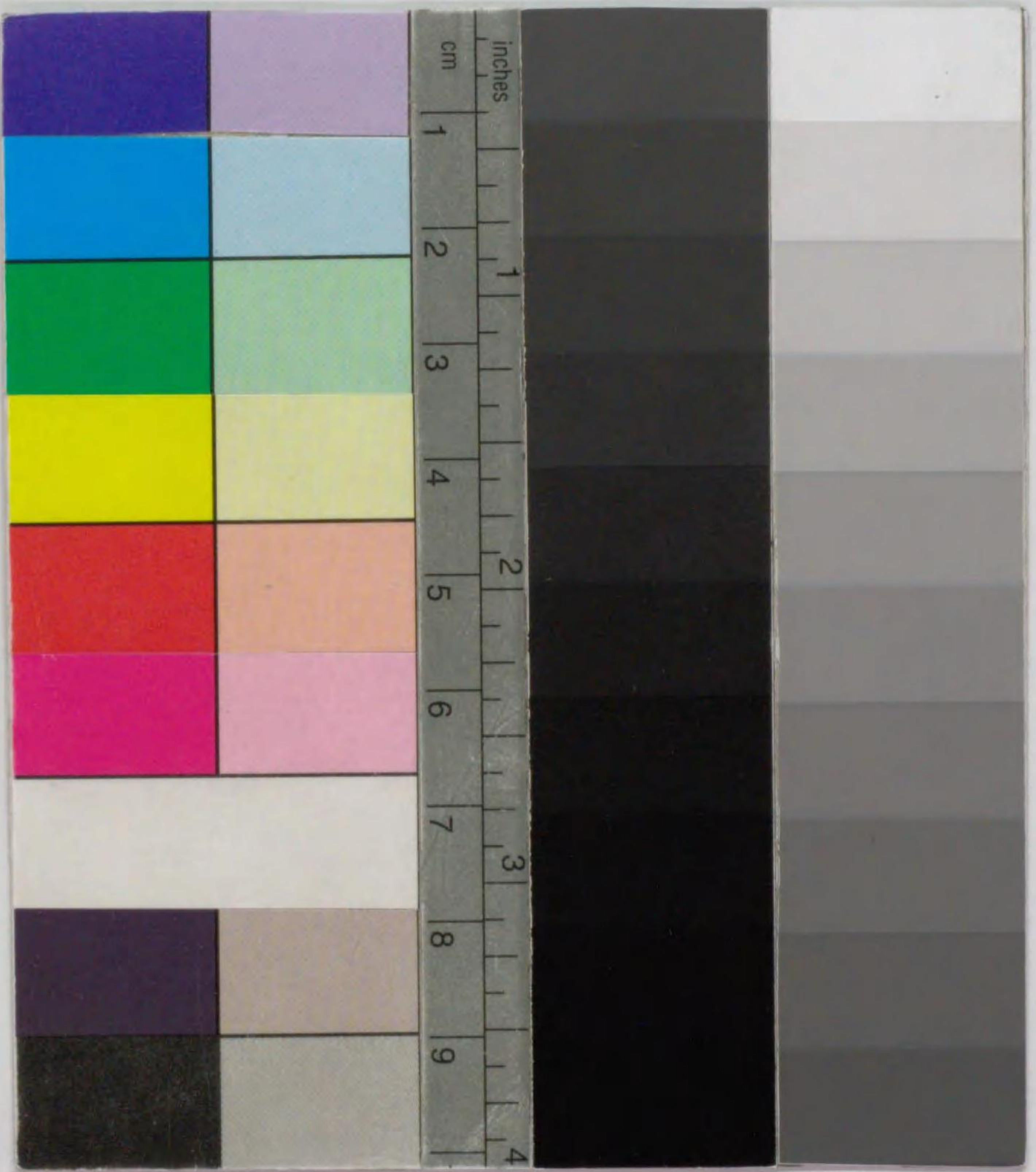
569

569-61

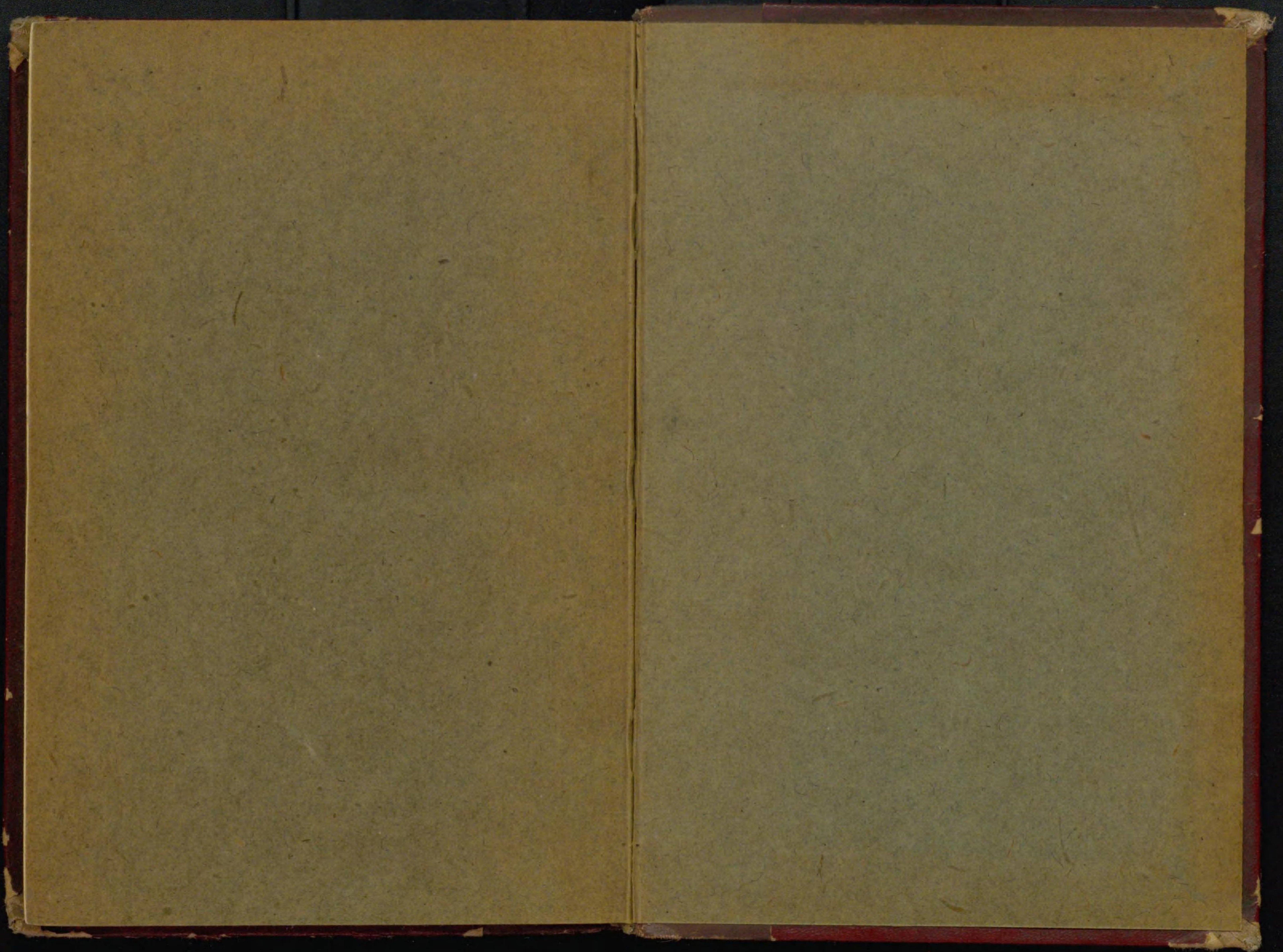


1200501517098

口  
複  
写









世界大衆文學全集

獅子狩人の  
他二篇

秦 豊 吉







す召思とだ何……はのたれは現に先鼻の雄英大我、角り曲るあと、やれあもし時  
(照参百八三一)。すで王子獅丸ち満に嚴威、よすで子獅……



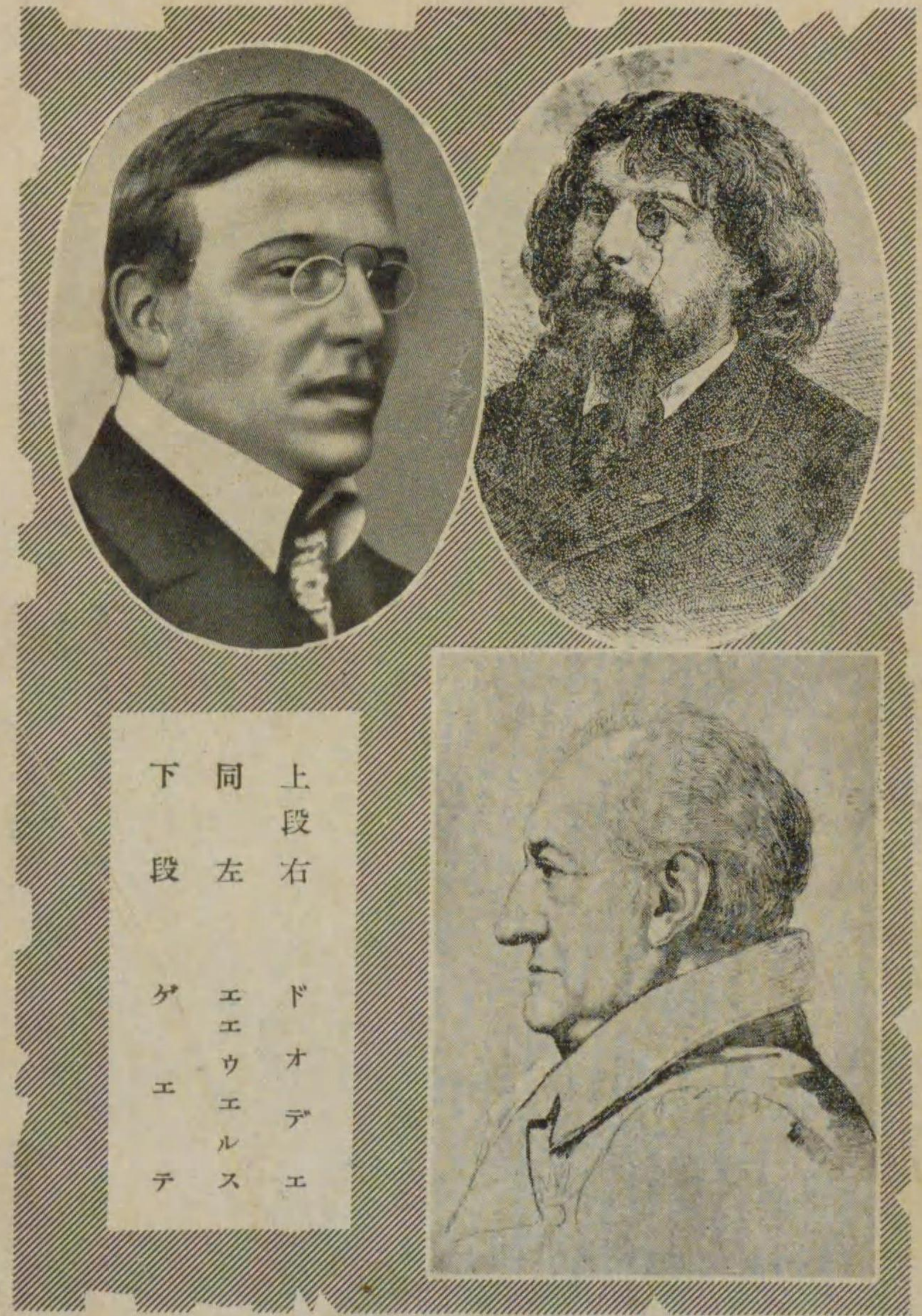
569-61

序

ゲーテとドオデエとエウエルスと、少し不思議な取り合せです。然しゲーテは千八百三十二年に死んで、それから間もなく、ドオデエが千八百四十年に生まれました。このドオデエが千八百九十八年に死ぬと、それより少し前の千八百七十一年にエウエルスが生れて、この人は今も達者に、獨逸文壇の雄を唱へてゐます。尤もこの三人の内、ドオデエだけが佛蘭西人です。

そこでこの三人は、十九世紀の獨逸文學史上に、入れ交り立ち交り現れてきた文豪ですが、趣は三人とも違つてゐます。ゲーテは、誰も知る通り類稀なる天才です。「ヘルマンとドロテア」は、その夥しい作品中でも、純情真に愛すべき叙事詩で、佛蘭西境の人情敦厚な獨逸人に現れた、親と子の愛、青年と少女の愛、隣人の愛は、獨逸國民詩として不朽の人間の心を傳へるでせう。シルレルは、この作を、ゲーテの藝術の絶頂と名付けました。戀愛文學として、今日もなほ若い人の愛讀して止まないところですが、

ところが、アルフォンス・ドオデエの「獅子狩の人」は、また何といふ變り方です。原名を「タラスコンのタルタラン」と言ひますが、タラスコンは南佛蘭西の地方で、快活



上段右 ドオデエ  
同左 エウエルス  
下段 ゲエテ

十二 タラスコンの快活



皮肉、のんきさ、法螺吹き等の愛すべき氣質を持った人達のゐるところです。タルタランは、この地方で、年金で暮してゐる、極めてのんきな暇人で、これがおだてられて、亞弗利加へ獅子狩に出かける。ところが射つた獅子が、實は盲で、飼はれてゐる獅子を射つといふ、ちつとも冒険にならない冒険家で、この大冒険の一伍一什を書いたのが、この小説です。冒険小説といひたいが、さう言へない滑稽小説です。笑はずにはゐられない、をかきな小説です。

そこで、もう一篇の「ブラアグの大学生」は、どんな小説かといふと、戀愛文學でもなく、滑稽文學でもない、傳奇小説、怪奇小説です。作者ハンス・ハイント・エウエルスは、現代獨逸文壇でも異才と稱せられる不思議な作家で、この小説は既に映畫となつて、二度も日本に来てゐますから、内容は御承知の方が多いでせう。エウエルスも、怪奇的な點に於て、或は獨逸のボオといへるかも知れません。然し實は、もつとロマンチックな點で、讀者は魅惑し去られることが多いのです。

戀愛小説、滑稽小説、怪奇小説、かう違つたものを並べてみたくて、こんな妙な取り合せが出来ました。三篇が三篇とも、まるで違つた小説です。どれからでもお読み下さい。

昭和六年八月

譯者

目次

獅子狩の人

一の卷

タラスコンにて

一、パンヤの木のお庭 ..... 八

二、タラスコンといふいゝ町は、どんな町か  
帽子を狙ふ鐵砲打 ..... 二二

三、いにや。いにや。いにや。 ..... 二七

タラスコンといふいゝ町は、どんな町か、續き

四、奴 等 ..... 三三

五、俱樂部へお出かけのタルタランさん ..... 三七

六、タルタランさんの二重人格 ..... 三三

七、上海に於ける歐羅巴人 ..... 三四

大きい仕事

韃 鞑 人

タラスコンさんは誰吐きだらうか

十二、タラスコンよりの消息によれば

二九



昼 氣 樓

八、ミテエヌ猛獸園 ..... 三六  
 アトラス山の獅子が、タラスコンに現れた  
 いても恐ろしき、莊嚴なる會見  
 九、不思議なるかな、昼氣樓の仕業 ..... 四四  
 十、出發を前にして ..... 四九  
 十一、鐵砲で來い、刀で來い ..... 眞綿に針は卑怯だぞ ..... 五二  
 十二、パンヤの木がある小さいお宅で取交された話 ..... 五五  
 十三、御 出 發 ..... 五九  
 十四、マルセイユ港 ..... 六四  
 出帆だ。出帆だ

二の卷

「どろこ」人の住める國

一、船 路 ..... 七〇  
 土耳其帽の位置が變ること五度  
 三日目の晩  
 おた、おた、お助けえ

二、武器を執れえ。武器を執れえ ..... 七四  
 三、セルブンテスよ、靈あらば聽け ..... 七六  
 御 上 陸

「どろこ」人は何處にゐる  
 「どろこ」人なんか、てんでゐない  
 幻滅の悲哀

四、いよく狩にお出かけだ ..... 八三  
 五、どをん、どをん ..... 八七  
 六、牝が遣つて來た ..... 九二  
 惡 戰 苦 闘

「兎の逢曳き軒」

七、乗合馬車と、モオル女と、素馨の花を繋いだ念珠との話 ..... 九五  
 八、アトラス山の獅子よ、安らかに眠れかし ..... 九九  
 九、モンテネグルのグレコリイ公爵 ..... 一〇三  
 十、おんみが父上の名を教へ給はれかし、然らば  
 小生もこの花の名を申上ぐべく候 ..... 一〇九  
 十一、シヂ・タルトリ・ベン・タルトリ ..... 一一五  
 十二、タラスコンよりの消息によれば ..... 一二九



三の巻

獅子の住める國 ..... 一六

一、流罪になつた乗合馬車 ..... 一六

二、ちびの紳士が土地の幅利き ..... 一三

三、獅子の修道院 ..... 一七

四、隊 伍 堂 々 ..... 一四

五、夾竹桃の株に夜の見張 ..... 一五

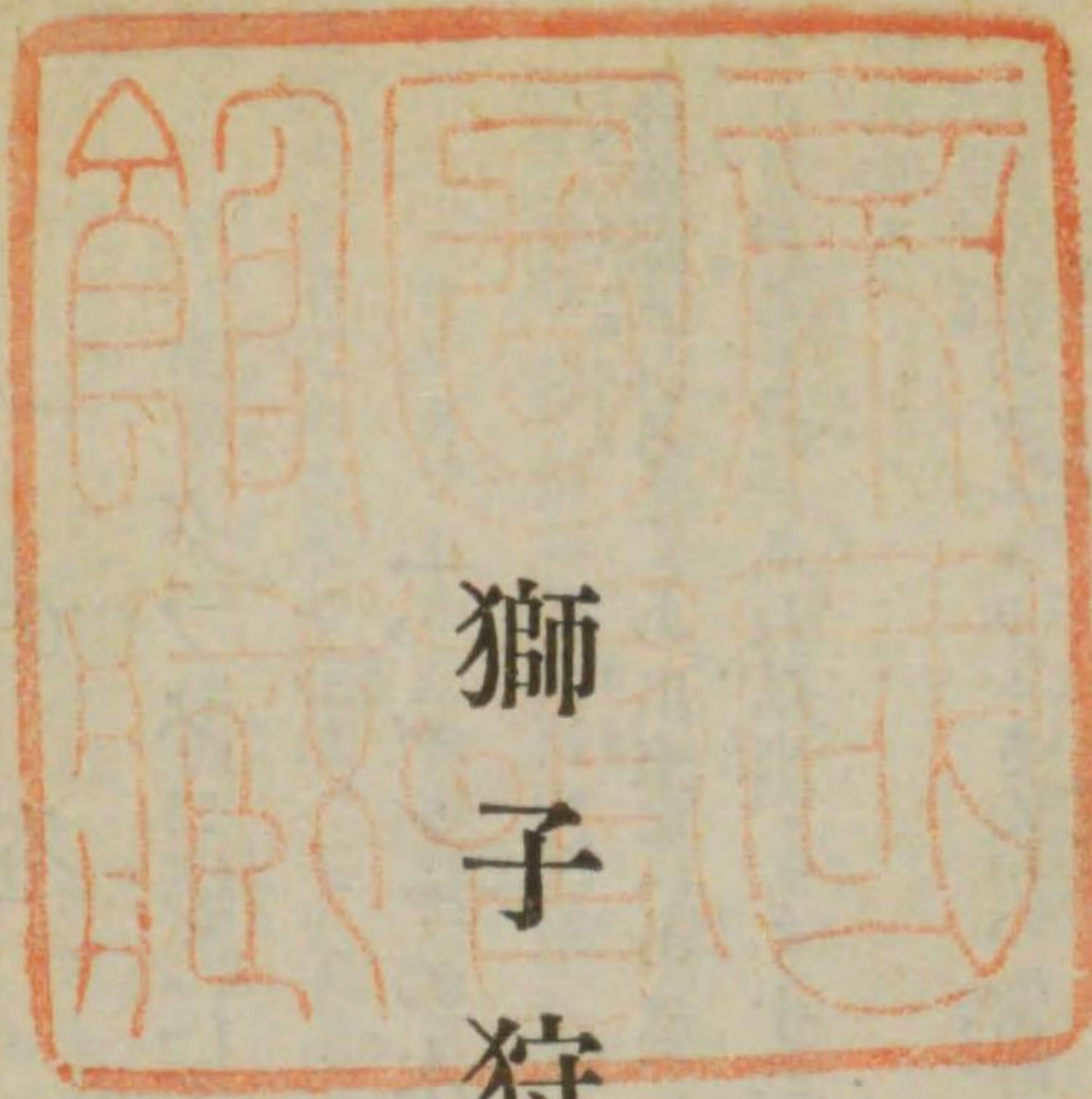
六、到 頭 ..... 一五

七、弱り目に祟り目 ..... 一六

八、タラスコン。タラスコン ..... 一六

プラアグの大學生 ..... 一七

ヘルマンとドロテア ..... 三七



獅子狩の人



# 獅子狩の人

## 一の巻

### タラスコンにて

#### 一、パンヤの木のお庭

金輪際忘れることの出来ないのは、僕が初めて、タラスコンのタルタランさんのお宅へ参上した、あの日のことだ。あれ以来、もう十二年か十五年にもなるが、昨日のことより、もつとはつきり、思ひ出せる。

大膽不敵のタルタランさんが、當時のお住ひといふのは、タラスコンの町のつい突つきで、アギニオン街道の左側、その三軒目であつた。氣の利いた、小さい別荘風のお家で、タラスコンの町にはよく見掛ける體裁だが、前の方に庭を控へ、後にバルコニーがついて、羽目板は眞白に、鐵戸は綠色

といふやつで、御門前の階段には、汚い小僧が大勢あつて、石蹴りなんぞの遊びをしたり、商賣道具の靴磨きの箱を枕に、難有いお天道様の光を浴びて、ぐうぐう晝寝をしてゐたりする。

外から見たのでは、このタルタランさんのお家も、そんじよそこの家と同様、別に變つたところはない。

このお家の前に立つて、まさかこのなかに大英雄がいらつしやらうとは、誰一人思はなかつたが、一足踏み込んで見ると、これは又どうしたといふのだらう……

地下室の窖から屋根裏の部屋に至るまで、家中全體が英雄の相を帯びて、庭さへさうであつた。あゝ、タルタランさんのお庭。こんな庭は、歐羅巴中に二つとなかつた。どつちを向いても、佛蘭

西國內ざらにある木や花は、てんで見えない。外國産の珍しい植物ばかり。護謨の木、瓢箪、草綿、椰子の木、椨果の木、芭蕉、棕櫚、パンヤの木、仙人掌、無花果の木の風變りのやつ、など、いふ有様で、タラスコンの町とは一萬哩も離れた、中央亞弗利加の山奥へでも行つたやうだ。言ふまでもないが、かういふ植物は、すべて、自然の大ききさではなかつた。例をとると、椰子の木は砂糖大根ぐらゐしかなく、木の巨人といふ意味の、アルボス・ギガンテスとも呼ばれる、百尺にも達すべきパンヤの木は、木犀草の鉢にちよこなんと植わつてゐた。

これでも結構。タラスコンのことにすれば、これで大したものだから、日曜のたんび、町の連中が



タルタランさんのバンヤの木を拜見に遣つて来て、すつかり感心して歸つたものだ。

讀者諸君よ、まあ想像して下さい。僕があの日、こんなとてつもない庭を通りながら、どんな妙な氣持になつたか……

大英雄の居間に案内されると、其處でまた、一層妙な氣持になつた。

この居間は、町の名物になつてゐたが、庭のどんづまりにある階下の部屋で、硝子戸越しに、あのバンヤの木が見えた。

大きな部屋の、あつちの壁も、こつちの壁も、鐵砲と刀で、上から下まで一杯だ。世界各国の武器を網羅して、騎銃がある、旋條銃がある、喇叭銃がある。コルシカの短刀もあれば、西班牙カタロオニヤの短刀もある。劍の付いたピストルがあるし、七首もある。馬來人の短劍がある。カリビヤ土人の鐵がある。石の鐵もあるし、槍のやうな棒もある。棍棒がある。ホツテントットの鐵棒がある。墨西哥の投繩も、なにもかも、無いものなしに揃つてゐた。

其處へ烈しい日光が射込んで、劍の刃や銃床をびか／＼に照らしたから、思はず僕はぞつとして、鳥肌になつたものだ……すぐに、多少は恐くなくなつたので、何故かしらと思つて見廻すと、土耳其の武器庫のやうなこの部屋が、一絲亂れず片附いて、塵つば一つも見えないからであつた。どれもこれも、きちんと並べ、手入が届いて、刷毛が掛けてある上に、一々貼札がしてあるから、藥屋の店

へ入つたやうだ。お行儀よく間隔を置いて、貼つてある札が、讀んでみると大變だ。

「毒を塗れる鐵。觸るべからず」

とか、

「彈丸を籠めてあり。注意」

なぞといふ始末。

かういふ風に、一々親切に斷つてあるが、この注意書がなかつた日には、僕は、きつと部屋に入る元氣がなかつたらう。

部屋の真中に、圓テエブルがあつた。その上に載つかつてゐたのは、ラムの罌、土耳其の煙草入、クック大佐の旅行記、クウバアやギユスタヴ・エイマアルの小説本、熊狩、鷹狩、象狩などの回想録其他いろ／＼……それから、テエブルのこちら側に坐つてゐたのは、四十は越したらしいが、四十五にはなるまいと思はれる年配の男で、脊が低く、肥つてゐて、ぶんぐりむつくりの緒ら顔が、シヤツ一枚に、フランネルのズボン下といふ扮装。短い剛さうな髭をびいと立て、火が燃えるやうな眼をしてゐた。片つばの手に本を持ち、もう片つばの手は、鐵の蓋の付いた、うんとでかいバイブを握つて、それを無暗に振廻してゐた。おそらく、とても物凄い首狩の話でも、讀んでゐたものだらう。下唇をぐいと突き出し、恐しい形相になつてゐたから、一體なら、見るからに田舎紳士の顔附で、僅



ばかりの年金をあてに、タラスコンの町で暢氣な暮しをするらしいこの人が、野蠻人のやうに荒々しく見えた。とはいふものゝ、この荒々しさは、好人物らしいところが多分に混つて、さういへば、この家全體も、矢張りそんな調子が見えた。この男こそ、タルタランさんだ。タラスコンのタルタランさん。大膽不敵の、えらい人物の、ならぶ者なき、タラスコンのタルタランさんであつた。

## 二、タラスコンといふいゝ町は、どんな町か

### 帽子を狙ふ鐵砲打

今僕がお話をする當時では、タラスコンのタルタランさんは、未だ、今日のやうなタルタランさんでなかつた。佛蘭西南部で誰知らぬ者もない、偉大なる、タラスコンのタルタランさんには成つてゐなかつた。それほどではなかつたが、しかも當時既に、タラスコンの町の王様であつた。

そこでどうして、王様になつたか、この次第をお話しよう。

先づ第一に知つて置いて頂きたいのは、この地方の連中が、一人残らず、鐵砲打だといふことで、身分のある人も、ない人も、みんな揃つて狩をする。狩といふと、タラスコンの町中が、それはく

熱狂し切つたものだが、抑々、事の起りといへば、神話の時代に遡り、タラスコンといふ名前の悪龍が、この町の沼地にとぐるを巻いてゐたところ、その昔のタラスコンの連中が寄つてたかつて、總攻撃をしたのに始まる。しかし、これは御承知の如く、何分にも、昔々の大昔のことであつた。

さて、話は戻つて、いつも日曜の朝になると、タラスコンの連中は、甲斐々々しい武裝に身を堅め、町の外へ出掛けて行つた。背中に袋、肩に鐵砲、犬は吠える、鼈は逃げる、喇叭が鳴つて、角笛が響くといふ景氣、素晴らしい壯觀ではあつたが……

肝腎要の狩の獲物が、何處にもてんであなかつた。どなたも御想像が付くやうに、鳥や獸がいくら莫迦でも、流石に長い間、度々の経験を重ねると、どうもこいつは危いぞ、と氣が付かざるを得ない。

タラスコンの五里四方、どこの洞穴にも獸はあないし、どこの巢を覗いても、鳥はお留守のからつぽであつた。黒鶉、鶉は申すに及ばず、どんなちびの小兎も、どんなちつぽけな小鳥一羽も、何處にも見えなかつた。

鳥や獸の身になれば、タラスコン附近の小さい丘は可愛らしい恰好で、桃金娘、ラヴンド、迷迭香の花で匂ひに匂つて、絶好の遊び場所ではあるし、ロオヌ河の岸の段々畑に、鈴生になつてゐる葡萄と來たら、香りが高く、甘味が滴るやうで、とても食欲を唆つたものだが……困つたことには、直ぐ



の後に、タラスコンといふ厄介物が控へてゐた。だから、このタラスコン附近は、鳥仲間でも、獸仲間でも、危険區域で通つてゐた上、渡り鳥の連中であつて、旅程を書込む地圖へもつて行つて、大きな十文字を書いたものだし、鴨の一群が、ロオヌ河三角洲の島を指してくだる途中、タラスコンのお寺の塔が見えだすと、先頭に立つ古強者の鴨先生が、大きな聲でかう嘸鳴つた。  
「タラスコンだぞう……あれがタラスコンだぞう」

そこで一群は、きゆつと方向轉換したものだ。

煎じ詰めて言はうなら、獲物はまるであなかつた。ところが、たつた一匹、手に負へない年寄の兎があつて、こいつだけは別物で、どうした天の奇蹟によつてか、さしものタラスコン諸氏の大虐殺から助かつてゐた。外の土地へ逃げればいゝのに、頑固爺の兎と見えて、一生この土地に暮すんぢや、といふ決心を曲げなかつた。タラスコンでは誰知らぬ者もない奴で、「電光石火」と譯名まで付いてゐた。こいつの巢は、ボンバルさんの地所にある。といふことだけは分つてゐたので、次手に一寸傍道の話になるが、こいつがこの地所に巢をくつてゐるのが理由で、地所の値段は二倍、三倍に騰貴した。住家だけは、かういふ風にちやんと突止めてあつたが、美事仕留めた人は、一人もない。

このお話の當時になると、爺兎を仕留めんものをと夢中の人は、ほんの二三人になつてしまつた。ほかの人は、到底取れないものと諦めてゐて、もう可なり前から、この「電光石火」を神様かなん

そのやうな扱ひにした。一種の迷信といふべきだが、一體タラスコンの人達は、ひどく迷信深い方ではない。燕を見ると、見付け次第、焼肉シチュウにして平らげる連中で、極く偏見のない、さつぱりしたものであつたが、この兎に関しては、少々御幣擔ぎにならざるを得なかつた。

讀者諸君は仰有るだらう。

「では、どうするんだ。タラスコンには、獲物が、そんなにゐないのに、日曜のたんび、町中が鐵砲打になつて出かけて、一體何をやるんだ」

其處ですよ。一體何をしたかといふと……いやはや、どうも。

鐵砲打の御連中は、先づ、廣い野原へ行く。町から二三里も離れた時、五六人宛が組になつて、井戸の蔭やら、屋敷跡の古い土塀の蔭やら、橄欖の木蔭なんぞに、長々と横になる。おもむろに袋から取出すのは、蒸焼肉のでかい片、生の玉葱、ソオセイジ、アンチヨギイといふ御馳走で、随分長い時間を掛けて、これをむしやく遣りながら、ロオヌ地方のうまい葡萄酒を聞き召すのだから、陽氣な笑ひ聲も立てようし、調子外れの歌も遣らかした。

腹が重くなる程、飲んだり食つたりした擧句、さて、やうやつと腰を上げ、犬を呼んで、鐵砲を構へて、いよく狩といふ段取になるが、一風變つた狩の仕方、鐵砲打諸氏は、各々自分の帽子を取つて、カ一杯、空中高く投げ飛ばす。その空中にある間に、どかんと打留めるといふ寸法だが、その



日その日の相談づくで、五發、六發、或ひは二發、ぶつ放した。

帽子に當つた彈丸の数が一番多い人を以て、その日の狩の王様にした。晩方になると、タラスコンさして凱旋する。襪樓々々の帽子を、鐵砲の先に引つ掛けて、口々に褒めそやされ、犬にわん／＼吠えられながら……

改めて言ふまでもないが、この町では、鳥打帽の賣行が、非常なものであつた。抜目のない帽子屋は、いきなりから穴が明いたり、破けたりしてゐる帽子を、盛に賣出したが、こいつの用途は、どうせ碌でもないことにきまつてゐたから、賣には出ても、買つた人は、藥屋のベジユケさんぐらゐるなもので、名譽を重んずる人は誰も買はなかつた。

帽子打の鐵砲打では、タラスコンのタルタランさんに及ぶ者がなかつた。毎日曜日の朝早く、この人は新しい帽子で家を出た。毎日曜日の夕方になると、襪樓を過つて歸つて來た。パンヤの木がある小さなお家に行つて見ると、この光榮ある勝利の印が、屋根裏の物置に一杯あつた。かういふ譯だから、この人を、タラスコンの町中が大先生、大名人と崇めたし、それに又、この人と來たら、狩獵一切に通曉し、近くは帽子打の妙技から、遠くは緬甸の虎狩にいたるまで、あらゆる種類の狩獵に關する、論文便覽の類を悉く讀破してゐたので、實際と理論の兩方面の權威たるこの人を、銃獵の神様と祭り上げ、大小競技會の審判長にした。

毎日、三時と四時の間に、鐵砲屋のコストカルドさんの店へ行つて見ると、帽子打の御連中が大勢突つ立つて、がや／＼言ひ争つてゐる真中に、肥つた男が、えらさうな顔をして、パイプを啣へ、緑革の肱掛椅子に、ゆつたり構へ込んでゐた。これが即ち、タラスコンのタルタランさん、ネムロドの神技と、ソロモンの叡智を兼ね備へたるこの人が、帽子を檢べて、審判をするところであつた。

### 三、いにや。いにや。いにや

タラスコンといふいゝ町はどんな町か、その續き

タラスコンの町のがつちりした人々が、夢中になつて悦ぶことは、狩のほかにも、もう一つあつた。それは、戀愛歌を歌ふことで、この田舎町の連中の、これに對する肩の入れ方は、こいつがまた、どうして大したものであつた。ほかの土地では、誰も歌はなくなつて、古い／＼紙の黄色くなつたやつに、漸く書きとめられて残つてゐるやうな、愛情に關する古風な歌が、タラスコンでは、新しく、若若しく、盛に持て囃されてゐた。しかも、タラスコンの町中、何處へ行つても、必ずさうで、どんな家族も、その家族特有の歌があつて、あれは何處の家の歌、これは此處の家の歌、といふ風に、町



中がちゃんとして承知してゐる。たとへば、藥屋のベジユケさんの家の歌は、

汝こそはわが愛するもの  
青白き星よ

で始まるし、鐵砲屋のコストカルドさんの家の歌は、

いざ行かん、野末の小屋に

で始まるし、登記所のお役人さんの家の歌は、

われ若し肉眼に見えざるものとならば  
人われを見ることあらじ

で始まる滑稽な小曲であつた。

かういつた風の歌が、タラスコンの町中、どの家にもあつた。一週間に二三回、各々の家に集まつて、それごとく歌ひつこをした。時に妙なことがあつて、歌ふのは必ず、自分の家の歌ときまつてゐた。物堅いタラスコンの人達は、長年うたつた歌であるが、取換へようとはしなかつた。この歌は、子々孫々一家に傳はるので、一指も觸れてはならぬ、神聖なものになつてゐた。よその家の歌を、借りたり、貸したりは絶対にしない。ベジユケさんの歌を、コストカルドさんの家の人が歌ふこともなければ、コストカルドさんの歌を、ベジユケさんの家の連中が歌ふこともない。四十年來といふものきまり切つて同じ歌を歌つたのだから、お互ひに覚え込みさうなものだ、と思ふお方があるかも知れない。ところが、覺えない。誰も彼も、自分の家の歌だけ、後生大事に守つてゐて、人のものなんぞ羨ましいとも思はなかつた。

この戀愛歌に就いても、町一番の名人は、帽子打と同様、タルタランさんであつた。どういふ點で町一番になつたかといふと、このタラスコンのタルタランさんは、自分の家の歌がなく、何處の家の歌でも、みんな歌つたものだ。

みんな、何處の家のでも。  
ところがさて、この人に歌を歌はせるのは、悪魔でなければ出来ない藝當の、むづかしい中にもむづかしいことであつた。方々の客間を廻つて歩いて、色々にもてなされてから、家に歸つてくると、



このタラスコンの英雄は、狩獵の本に讀み耽るとか、俱樂部へ出かけて、一晚遊ぶとか、そんなことの方が大好で、ニイム市から取寄せたピアノの前に立つて、タラスコン産の二本の蠟燭の間で、氣取つた恰好をするなんぞは、あんまり好きなことではなかつた。音樂の才を誇るのは、英雄にふさはしからぬ、下らんことだと思つてゐた……けれども、藥屋のベジユケさんのところで音樂會がある時は、偶然入つて来たやうに顔を出して、さん／＼人に勧めさしてから、それではとばかり、「悪魔ロベエルーの素晴らしい二重唱を、ベジユケさんのお母あさんと二人で、遣りだすことにきまつてゐた。この二重唱を聴かない者は、音樂を談ずる資格がない、とまで言はれて、僕はといふと、無論拜聴に及んだ。たとへ僕が百まで生きて、よぼ／＼の爺にならうとも、えらいタルタランさんのその時の様子だけは、なんとしても忘れることが出来ない。先づタルタランさんは、重々しい足取で、ピアノに近付く。ぐんと腕を突いてから、口を尖んがらから、店頭硝子瓶の青い照り返しを浴びながら、その人の好ささうな顔附を、悪魔ロベエルの猛惡な、意地惡な顔にしよう、と、一生懸命骨を折る。タルタランさんがかういふ恰好になると、部屋中の人はぞつとして顫へ、何か、どえらいことが、今にも起りさうな氣がした……それから、一瞬間、水を打つたやうに靜まり返ると、ベジユケさんのお母さんが、ピアノの伴奏を自分で遣りながら、歌ひはじめる。

ロベエル。おんみを愛する  
わが眞實、受け容れ給へ  
畏れをのゝくわが姿（繰返し）  
具さにみそなはせ給へ  
おんみの幸を祈るなる  
われを憐み給へかし

これまで歌ふと、小さい聲で、

「あなたの番ですよ、タルタランさん」

と言つた。すると、タラスコンのタルタランさんは、腕を突きだし、拳を握り、小鼻をぶる／＼顫はせながら、ピアノの腹の中へ響き通れとばかり、雷のやうな恐ろしい聲で、三度嗚鳴つた。

否……否……否……

といふのだが、生粹の南部地方訛りで、

いにや……いにや……いにや……

と遣つ付ける。そこで、ベジユケさんのお母あさんは、もう一度、同じことを歌ふ。



おんみの幸を祈るなる  
われを憐み給へかし

タルタランさんは、一層馬力を掛けて、

いにや……いにや……いにや……

と遣つて、これつ切りで終るのだから、大して長いものではない。けれども、聲といひ、身振りといひ、悪魔の生寫しといふ工合だから、薬屋さんの家中に居合はせた人で、怖毛を振はない人は、い、とても美事な出来栄であつた。だから、もう一度、もう一度とせがまれて、タルタランさんはなこの「いにや……いにや」を、四五回も遣り直すのが常であつた。

すつかり終ると、タルタランさんは額の汗を拭つて、女の方々に頬笑を送り、男の人達に眼で挨拶して、意氣揚々と暇を告げた。倶楽部へ出かけて、さもくなんでもないやうな調子に、

「ベジユケさんのところでね、悪魔ロベエルの二重唱を歌つて來ましたよ」  
と言つたものだ。

歌つた、歌つた、と御當人が思ひ込んであるのだから、問題ではないが……

#### 四、奴 等

かういふ風に様々の才能が優れてゐたから、タラスコンのタラタランさんは町の大立物になつた。

その上、この人の取得といふのは、どういふものか、奇妙に人に好かれたことだ。

タラスコンの町の軍人連中は、タルタランさんの肩を持つた。一番の親玉は、ブラギダ隊長さんと呼ばれる、退役の主計大尉、これがタルタランさんを評して、

「ラバンだ」

と言つた。ラバンとは、勇敢な男といふ意味だが、本來は兎といふ言葉だ。主計を勤めて、さんざ被服のことを扱つた隊長さんが、毛に關係のある兎の、その兎に關係のある評をしたのだから、この批評は十分信用が置けるだらう。

裁判所の連中も、タルタランさんに最良した。ラドゼエズさんといふ、もう御年配の所長さんは、裁判の席上で、二度も三度も、タルタランさんのことを、

「一個の男子ぢや」

と言つた。



最後に、一般町民もタルタラン最良であつた。なにしろ、肩幅が廣く、歩き方は堂々として、物音にびくともしない喇叭手の乗馬といふ恰好で、大英雄だといふ評判が何處からともなく立つた上に、御門の前に並ぶ、靴磨きの小僧どもには、愛想よく頭を叩いたり、錢を遣つたりしたものだから、この町の立派な御領主様、客間の王様、といふやうに、えらい尊敬を受けたものだ。日曜の夕方、鐵砲歸りのタルタランさんが、鐵砲の先に帽子を突つ掛け、綿入りの麻のチヨッキを、革紐でぎゆつと締めて、河岸のあたりに差しかゝると、ロオヌ河の人足は、揃つてべこくお辭儀した。お互ひに眼配せして、タルタランさんの腕に丸々と盛れ上がる二頭膊筋を、じろく見ながら、小さい聲で、感嘆の言葉を洩らし合つた。

「腕つぶしの強いつたら、ねえぞ。……筋肉が二重だぞ。筋鐵入りだ」  
二重の筋肉。

「かういふことは、タラスコンの町でなければ、誰も信じる人はない。」

さて、かう何もかも揃つて、才能は色々澤山あるし、町民の人氣を一身に集め、退役主計大尉のブラギダさん、譯名をえらい隊長さんといふ人には、ひどく敬はれるし、何不足ないタルタランさんでありながら、御自分では幸福だと思はなかつた。この小つぼけな町の生活が、いやでくたまらなく、息が詰まるやうに感じた。タラスコンの名物男は、タラスコンに退屈してゐたのだ。

大體の話が、この人のやうな英雄的な性格になると、冒険と熱狂を好み、戦闘や、大草原の疾駆や、大掛りの狩獵や、沙漠の砂や、旋毛風や、颶風などに慣れてゐるから、毎日曜日は帽子打ち、あとの時間は、鐵砲屋コノトキヤルドさんの店で審判をする、といふのでは、いくら何でも……

氣の毒な境遇に陥つた大英雄。これが續いたなら、肺病にでも罹つてお陀佛になるのが落だらう。せめてものことには眼界を廣めて、俱樂部を忘れ、小つぼけな市の立つ町を忘れようと思つてタルタランさんは、パンヤの木その他、亞弗利加植物をそこら中一杯に植ゑた。武器といふ武器をどしどし集め、馬來人の短劍の上へ、馬來人の短劍を積み重ねた。不死身のドン・キホオテのやうに、激しい空想の力を借りて、いとふべく隣むべき現實から逃れようと、冒険物語を無暗矢鱈に讀み耽つた。

ところが、それがみな……

冒険の渴望を醫すどころか、いやが上にも煽り立てた。ずらつと並んだ武器を見ると、興奮の餘り、しよつちう怒り付けたい氣持になつた。祕藏の旋條銃や鏃や投繩は、口々に「戦へ、戦へ」と叫び掛けた。パンヤの木の枝をわたる風は、大旅行へ誘つた。よくないことをしきりに勧めた。搗て、加へて、ギユスタヴ・エイマアルの物語と、フェミモオア・クウバアの小説は……

蒸暑い夏の午後、タルタランさんは劍の真中にたゞ一人、毎日本を讀んでゐたが、急に眞赤な顔で立ち上つたり、本をびつしやり投付けて、壁に掛かつた武器の一つを、矢庭に擱んだりすることが、



度々あつた。

可哀さうにこの人は、タラスコンの自分の家にあることを忘れ、ナイトキャップを被り、ズボン下のまゝであることを忘れた。讀んだ事柄を實際の行爲に移して、斧や鐵棒なんかを振廻しながら、持前のでかい聲を張上げて、

「奴等が今來ようものなら」

と嘯鳴つた。

奴等とは。奴等とは、誰だらう。

タルタランさん自身にも分らなかつた。はつきり誰とは言へなかつたが……

奴等とは、攻撃するものすべてだ。ありとあらゆる、戦ふもの、殺すもの、掴み掛かるもの、頭蓋骨を剥きだしにするもの、嘯鳴るもの、吼えるものだ。

奴等とは、不幸な白人が、磔にされた柱の周圍を踊り狂ふシウウインヂヤンの土人共であつた。

血だらけの舌で體中を舐めずり、體をぶらん／＼揺すつて歩く、ロッキイ山脈に住む灰色の熊であり、或ひは又、沙漠のトゥアレグ人、馬來の海賊、アブルツツエ山の山賊でもあつた。

奴等とは、これらすべての總稱であり、戦ひと、旅行と、冒險と光榮とを含むものであつた。

ところが、残念なことには、大膽不敵のタラスコンのタルタランさんが、いくら奴等と呼ばれて

も、いくら奴等の悪口を言つても……奴等はてんで姿を現さなかつた。

尤も、無理もない話だ。奴等にしたら、タラスコンに來た所で別に仕事のある譯でもないから……決して遣つて來ない奴等だがタルタランさんは始終待構へてゐた——特に俱樂部へ行く夜道には。

## 五、俱樂部へお出かけのタルタランさん

エルサレムの神殿を守る騎士が、異教徒の包圍攻撃に向つて突出の準備を整へた時でも、虎と呼ばれる支那の勇士が戦争の身支度をした時でも、太古の土人が戰場に出た時でも、とてもく及ばない物々しい武裝で、頭の前から足の爪先まで、すつかり身を固めて、タラスコンのタルタランさんが俱樂部へ出かけるのは、夜の九時、軍隊の歸營喇叭が鳴つて一時間してからであつた。

「戦闘用意」

といふ水兵の言草のやうなことは、これを見た人の、誰の口からも出る叫びだらう。

タルタランさんは、左に握るは、切尖鋭い棍棒で、右の手に仕込杖を持つた。左のポケットに棍棒を突つ込み、右のポケットに小さいピストルを忍ばせた。胸には、上着とフランネルのシャツの間に、馬來の短劍がある。



といふ工合だが、毒を塗つた鉄だけは、一度も持つて出なかつた。この武器は、餘りに卑怯なものだから……

いよく出發を前にして、ひつそりと暗い居間で、タルタランさんは一寸練習した。足を踏ん張つて身構へ、壁にぐつさり刃を突き刺し、筋肉を慣らした。それから、合鍵を藏つて、庭を横切つた。堂々として、急がず、慌てず。時に、心に思へらく、

——英國人の流儀に、英國人のやうに、これこそ、本當の勇氣といふものだ。——

庭の突き當りで、重い鐵の扉を開いた。その開くのがだしぬけで、猛烈な勢で突つ放したから、扉は扉にどかあんとぶつかつた。……扉のうしろに、若しも奴等が隠れてゐたものなら、五體滅茶滅茶になつたらう……生憎と、奴等はうしろに隠れてゐなかつた。

扉を明けると、タルタランさんは通へ出た。右に左に目を配つた。扉に鍵をしつかり、二重に掛けて、さていよく、お出かけになつた。

アギニオン街道には、猫の子一匹も通らない。何處の門も締つて、何處の窓にも燈火は見えない。どつちを見ても、眞黒だ。處々に街燈が、ロオヌの川霧に包まれて、瞬いてゐる……

威風堂々と、虚心平氣に、タラスコンのタルタランさんは、夜の中を行つた。靴の踵は規則正しい間を置いて鳴り、仕込杖の先つぼの鐵は、敷石に當つて火花を出した。……大通でも、横町でも、路

次でも、必ず道の真中を歩いた。これこそ安全第一の歩き方で、何か危険なものが向うから來たにしても、ちやんと見通しが利いたし、それに又、晩になると、タラスコンの町の横町では、窓からよくいろんな物が落ちて來るが、こいつに當らない用心にもなる。かういふ風に、すべてに氣を付けたタルタランさんだが、臆病だから、と、てんから決めて下すつては、迷惑千萬……そんな譯では決してなく、タルタランさんは、たゞ、用心に用心を重ねてゐたのだ。

臆病ではなかつた、といふことの何よりの證據は、俱樂部へ行くのに廣場を通る近道をしなないで、一番遠い廻り道の、一番眞暗い道の、町の軒竝を通つて行つた。きたない、小さい横町がごしやごしやあつて、その先にはロオヌ河が不吉な色に光つてゐた。この危い道の曲り角で、奴等が暗闇からぬつと出て、背中へ躍り懸かればい、が、と、タルタランさんはしよつちう希望してゐたが、奴等がこんな眞似をした日には、どんな目に遭はされたらうか、僕が諸君に申上げるまでもあるまい。

さて、しかし、何たる運命の皮肉ぞや、タラスコンのタルタランさんは、ほんの一度も、たつた一度も、悪い奴等に出會したことがない。悪い犬の一匹にも、酔つ拂ひの一人にも、ついぞお目に掛かつたことがない。

ところが、時々、物の間違ひで、警戒することがあつた。聲音がして、忍びやかな聲が聞える……「そら、來たぞ」と、タルタランさんは口の中で言つて、びたつと其處へ棒立ちになる。暗をすかし



て、氣配を窺ふ。亞米利加印度人の遣り方に従ひ、腹這ひになつて、耳を地面に當てる。……聲音は近付いた。聲がはつきりとなつた。……奴等は、すぐ其處へ來た。眼は血走り、胸は大息をついて、豹のやうに身を縮めたタルタランさんが、あはや、戦ひの叫びを擧げ、跳び起きようとする途端……暗闇の中から、タラスコン訛りの優しい聲が、靜かな調子で呼びかけた。

「やれ、まあ。タルタランさんですかい。……ぢやあ、まあ、左様なら、タルタランさんや」  
残念、無念。これは藥屋のベジユケさんが一家揃つて、コストカルドさんの家へ、自分の家の歌を歌ひに行つた、その歸りであつた。——「おやすみ、おやすみ」と、タルタランさんは不平がましく言つたものだが、感違ひが癢に觸つて、腹の中は煮えくり返つた。やがて、獐猛な顔をして、仕込杖を振り擧げて、暗の中へ突進した。

俱樂部の横町に到着すると、大膽不敵のタルタランさんは、いきなり玄關へは行かないで、其處等中を歩き廻つて、暫くの間、奴等を待つた。……到頭待ち切れなくなつて、奴等は現れないと見極めを付けてから、もう一度、暗の中を、輕蔑の眼付で眺め、怒りに顫へた聲で呟いた。

「來やがらん。……來やがらん。……てんで、來やがらん」  
そこで、このえらい人は俱樂部の中に入つて、ブラギダ大尉とトランプのベジイク遊びをするのであつた。

### 六、タルタランさんの二重人格

こんなに冒險が大好きで、胸がどき／＼するやうな大事件を欲しがつて、こんなに旅行がしたくつて、唐天竺の果までも突つ走つてみたい、タラスコンのタルタランさんが、今までに一遍も、タラスコンの町を離れなかつたのは、これはさて、どういふ譯だらう。

まつたく不思議だ。大膽不敵のこの人は、四十五になる今日まで、たゞの一晚も町の外へ寢泊りしたことがない。一體この邊のプロヴンス人は、一人前の若者になると、誰も一度はマルセイユ見物に行つたものだが、タルタランさんはこれをしなかつた。ポオケエルの町に行つたことがあるか、どうか、こいつさへも怪しいが、ポオケエルはタラスコンから大して遠くはない。橋を一つ、ひよいと越せばいゝ。生憎、この橋は、度々風で潰された。とても長い、とても脆い橋で、ロオヌ河は丁度この橋のところ、川幅がうんとあつたから……お察しの通り、タラスコンのタルタランさんは、堅い大地をしよつちう踏んであることが、どちらかといふと好であつた。

こゝでは是非共諸君に申し上げたいのは、この大英雄が非常に違つた二つの性質を持つてゐたことだ。「わが一身に二人の人住めるが如し」とは、教會の長老の誰か言つた言葉だが、これが丁度、タル



タランさんに當て嵌つた。魂からいふと、ドン・キホオテで、矢張り同じやうな騎士的熱情、英雄的理想、冒険と偉業に對する渴望などを持つてゐたが、體の方は、ちよいと模様が變つてゐた。あの西班牙の貴族は、骨と皮ばかりに瘦せて、體といふも名だけの話であつたから、物質に支配されること寔に酷く、二十日間ぶつ通しに、鎧を脱がない藝當も出來たし、二十四時間に米一握りを食つて、平氣な顔をしてゐたが……

これに反して、タルタランさんの體は、正しく一個の立派な體で、とても肥つて、とても重たく、暑さ寒さ、痛さ痒さに、ひどく感じて、とても愚痴つばい。ブルヂョアらしい旺盛な食欲で、家の中では、色々我儘の言ひ通し。便々たる腹と、短い脚で、不死身のサンチヨ・バンサとそつくりの體附であつた。

ドン・キホオテにして、サンチヨ・バンサを兼ねたり。この二人が、一つの體に住んでゐたから、この寄合世帯がうまく行かう筈はない。喧嘩口論、掴み合ひ……

この二人のタルタランさん、タルタラン・キホオテ君と、タルタラン・サンチヨ君との對話を、希臘詩人ルキアンや、十七世紀の作家サンテヴルモンあたりに書かせたら、さぞ面白いものが出來るだらうが、タルタラン・キホオテ君は、ギユスタヴ・エイマアルの物語に興奮して、「出かけるぞ、おれは」

と呶鳴つた。

タルタラン・サンチヨ君は、儂麻質斯の持病の外は、何にも考へないで、

「わしは出かけないぞ」と言つた。

タルタラン・キホオテ (大いに興奮して) タルタランよ、榮光を以て體を覆へ。

タルタラン・サンチヨ (ひどく落着いて) 體中をフランネルで包むんだよ、タルタラン。

タルタラン・キホオテ (益々興奮して) あ、二連發の素晴らしい旋條銃。あ、懐劍、投繩、ア

メリカン・インヂアンの革沓。

タルタラン・サンチヨ (いやが上にも落着き拂つて) い、もんだなあ、毛絲を編んだこのチヨツキは。どうだ、この膝當の温かいこと。素敵だなあ、耳當の付いた帽子は。

タルタラン・キホオテ (我を忘れて) 斧を寄越せ。誰かゐないか。斧を。

タルタラン・サンチヨ (鐘を鳴らして、女中を呼んで) ジヤネットや、いつものチヨコレエトを。やがてジヤネットが現れて、ふうく湯氣の立つ、香の高いやつを、満々と注いだチヨコレエト一杯に、茴香を添へた炙肉一皿を付けて、持つてくる。すると、タルタラン・サンチヨ君の笑ひが爆發して、タルタラン・キホオテの叫びなんぞ、何處かへ吹き飛ばした。



かういふ次第により、タラスコンのタルタランさんは、未だ曾て、一步たりとも、タラスコンの町から踏み出さなかつた。

## 七、上海に於ける歐羅巴人

### 大きい仕事

#### 韃靼人

タラスコンのタラスコンさんは嘘吐きだらうか

#### 蜃氣樓

ところが、たつた一度、タルタランさんは、もう少しのところ、大した大旅行に出かけようとしたことがある。

タラスコン生れの三人兄弟、ガルシオ・カミュといふ兄弟が、上海へ行つて、商會を開いてゐたが、この兄弟からタルタランさんに手紙が来て、矢張り支那にある支店の一つを、監督しては下さらんか、と申込んで来た。これは素敵だ。働き甲斐のあるものだ。素晴らしい勤め口だ。大勢の店員を

監督し、露西亞、波斯、亞細亞、土耳其古と取引をして、それに又、大きい仕事があつた。

タルタランさんの口から、大きい仕事と言へば、どんな大きなものか、諸君は大抵御想像が付くだらう。

ガルシオ・カミュ兄弟商會は、盛な取引のほか、度々韃靼人のお見舞を受けた。そら来たといふ時は、急いで大戸を締めちまふ。店員一同武器を執つて、領事の旗を高く掲げて、どをん、どをん、と窓の隙間から、韃靼人目蒐けて、鐵砲をぶつ放した。

この申込があつた時、タルタラン・キホオテ君がどんなに熱狂し、どんなに雀躍したか、僕が今申上げる必要はないだらう。まるで大變な悦び方であつたが、都合の悪いことには、タルタラン・サ・チヨ君が、てんで耳を假さなかつた。このサンチヨ君の方が、キホオテ君より勢力が強かつたから、この勤め口の話は、到頭纏らなかつたが、町中はこの噂で持ち切りになつた。「出かけるかしらん」「出かけるかいかしらん」「賭をしよう。出かけるぞ」「おれも賭けよう。出かけるぞ」いゝもう大變な騒ぎであつたが……結局のところ、タルタランさんは出かけるなかつた。それにしても、この事件によつて、タルタランさんの名聲は一層高まつた。一體全體、タラスコンの町では、もう少しのところ、上海へ行かうとした、といふことは、上海へ行つた、といふこと、同じになつてゐる。タルタランさんの大旅行に就いて、様々の話を取り交されると、やがて遂に、タルタランさんは旅行から歸つて來



た、と、誰も彼も信じてしまつた。晩になると、倶楽部に集つた人達は、タルタランさんに向つて、上海生活の御感想はとか、風俗習慣はどんな具合でとか、氣候、阿片、大きい仕事は、など、彼方からも此方からも、質問の矢を飛ばしたものだ。

上海の事情に精通するタルタランさんは、訊かれると上機嫌になつて、實に詳しい話をした。さうかうしてゐる内、この人自身にも、上海へ行つたことがないか、どうか、その邊が妙にはつきりしなくなつたから、鞆鞆人の襲撃に話が及ぶと、とても自然な調子で、次のやうに喋りまくるのが、もう何百回にも達してゐた。

「その時わしは部下の連中に鐵砲を執らせて、領事の旗印を屋根へ高く揚げた。それから、どをん、どをん、と鞆鞆人日蒐けて、窓の隙間からぶつ放しましたよ」

これを聞くと、倶楽部中の人は、ぞつとして怖毛をふるつたものだ。

「おい、おい、作者君。それでは、君のタルタランさんは、とてもひどい嘘吐きぢやないか」

「いや、いや。決して、さうではありません。タルタランさんは嘘吐きではありません……」

「だつて、君。タルタランさんは、自分が上海へ行つたことのないのを、百も承知ぢやないか」

「それは勿論、百も承知してゐますが、たゞその……」

たゞその。此處のところを、諸君、よつく氣を付けて下さい。丁度い、折だから、一寸御説明申上

げませう。

抑々佛蘭西北部の連中は、南部の人が嘘吐きだと、口癖のやうに言つてゐる。しかし、南部には嘘吐きはゐない。マルセイユにも、ニームにも、ツウルウズにも、タラスコンにも、一人もゐない。南部の人は嘘は言はない。たゞ些か思ひ違ひをしてゐる。しやべることと來たら、きつと、本當のことではないが、御當人の積りでは、本當のことをしやべつた積りだ……。つまり、嘘だといはれることになるが、この嘘は、嘘と名付けるべきものでない。一種の蜃氣樓だ……

いかにも左様、蜃氣樓の一種だ……といふ僕の言葉を御信用なさらん方は、御自身南部地方へお出かけになるが、すぐ、お分りになるだらう。この地方へ來ると、太陽があらゆるもの、形を變へて、當り前の大ききより、ずつと大きく見せてゐる。プロヴンス州の小さい丘陵は、モンマルトルの高臺ほどもない、ちよこんとした、低いものだが、實際に諸君が御覽になると、どでかい連山に見える。ニーム市の或る建物なんぞは、小つぼけな四角で、小さい寶石に段々を付けたやうなものだが、ノオトルダム寺院の塔ぐらゐ、雲に聳えて高く見える。又、諸君は……南國の嘘吐きといへば、たつた一人が嘘吐きだ。太陽だけが……太陽は、その光に觸れるものすべ

てを、うんと誇張して見せる。……スバルタは、最も盛んな當時には何であつたか。これつぼつちの小さい、一つの町に過ぎな



つた。……アテネは何であつたか。たゞ單に、郡役所のある田舎町であつた。……しかも、歴史を讀む我々は、スバルタも、アテネも、ともに堂々たる大都市であつたやうに感じる。これみな、太陽のなす業なり……

と、此處まで申上げて、まだ諸君は、その同じ太陽がタラスコンの町に射すと、退役主計大尉のプラギダさんを、えらい隊長さんのプラギダさんとし、蕪みたいなものをパンヤの木とし、上海へ行きかけた人を、行つて來た人とするのが、未だに變挺に思はれるだらうか。

## 八、ミテエヌ猛獸團

アトラス山の獅子が、タラスコンに現れた  
いともし恐ろしき、莊嚴なる會見

さて僕は今までに、タラスコンのタルタランさんの私生活をお話した。光榮がその額に接吻し、色褪せぬ月桂樹の緑葉もて、その頭を飾る、よりも以前のタルタランさんの有様を述べた。この大英雄のお住ひの靜けさ、この人の悦びと悲み、夢と希望、といふやうなことを申上げたが、今や筆を急が

せて、既に今までも比類なき生涯と稱すべきこの人の生活に、一段と光彩を添へた奇妙な出來事、この人の歴史の最も輝かしい頁、いよいよこれに取りかゝらうと思ふ。

或る晩のこと、鐵砲屋コストカルドさんの店頭。タラスコンのタルタランさんは、鐵砲道樂の幾人かに向つて、當時最新式の、撃針の付いた鐵砲を見せ、その取扱ひを教へてゐた。……すると、突然扉が明いて、帽子打の御連中の一人が、吃驚仰天した顔附で、店の中へ轉がり込んで、

「獅子だ……獅子だ……」

と嘯鳴つたから、さあ大變。居合す一同、驚いたの、驚かないの、わい／＼がや／＼、押し合ひへし合ひ。タルタランさんは銃劍を付けて、やつとばかり身構へる。コストカルドさんは横つ跳びに跳んで、店の大戸を締めたものだ。今入つて來た帽子打先生を、ぐるつと皆が取圍んで、どうしたどうしたと迫つ付けて、やがて判明した一伍一什は、大凡次のやうなものであつた。

ミテエヌ猛獸團は、ボオケエルの大市を當て込んで、一興行打つたが、いよいよそれも終つた歸りがけ、このタラスコンにも、五六日寄つて、呼び物の動物を見せようといふことになつた。場所はお城の前の廣場で、何十匹の大蛇、海豹、鰐のほか、アトラス山から生捕つたる、見るも恐ろしい獅子一頭。

阿弗利加はアトラス山の大獅子が、タラスコンの町に現れた。昔々の大昔以來、未だ會つて、誰一人



そんな恐ろしいものは見たことがない。腕に覺えの帽子打先生達は、各々えらさうな顔をして、しばし眼と眼を見合はせた。いかにも男らしい諸氏の顔は、何だか後光でも射したやうになり、コストカルドさんの店の隅々では、幾多の強さうな拳が、人知れず、きゆつと握り緊められた。思ひも掛けぬ一大事に、一同はたゞ呆然として、物も言へない有様だ……

タルタランさんでさへ、矢張一口も口を利かない。青い顔で、小刻みに顫へて、先刻の撃針の付いた鐵砲を、もう一度握つて賣臺の前に仁王立、しきりと何か考へてゐた……

アトラス山の獅子が、すぐ其處、二足ぐらゐの所にゐる。獅子。これぞ、英雄的なる獸、獯猛極りなきもの。野獸の王。夢にまで見る、憧れの獲物。度々空想の中で、みづから素晴らしい場面の主人公となつたが、その時の相手役のうちでも、殊のほか優れたる千兩役者……

獅子だ、難有いとも、忝ないとも……

おまけのことに、アトララ山生捕と來ては……

なんぼなんでも、えらいタルタランさんは、最早我慢がし切れなくなつた。

見る／＼、顔面に紅潮を呈した。

眼は焔の燃ゆるが如く、痙攣でも起したやうな手附で、例の鐵砲を肩に擔ぐが早いか、退役主計大尉ブラギダさん、えらい隊長さんにくるりと向直つて、破鐘のやうな聲を出した。

「見に行かう、隊長さん」

——「もし、もし。……あ、一寸……わたしの鐵砲で……わたしのところの針發銃を、持つていらしつては困りますが……」

と、おづ／＼言つてみたのは、いつも溫和しいコストカルドさんで、餘つ程困つて言ひ出したのだが、その時分にはもう、タルタランさんは、横町を曲つて、その後に帽子打の御連中がお揃ひで、歩武堂々と進軍して行つた。

見世物小屋に着いて見ると、もう大勢の人ばかりだ。タラスコンの町民は、由來英雄的なところが、物に動じない性であつたが、何しろ長い間、素晴らしい見世物にお目に掛らなかつたから、大舉してミテエヌ猛獸團のパラツクを取圍み、忽ち四邊は人で埋まつた。この景氣を見てほく／＼ものになつたのは、ミテエヌのおかみさんで……アトララ山地のカビリイ地方の變つた衣裳で、腕は肱まで露出して、足首に鐵の環を嵌めて、片手には鞭と生きてゐる牡鶏一羽、といふ満艦飾の恰好で、パラツクの中から現れ出で、タラスコンの皆様方にお目通りした。すると、どうだ、この女も矢張り、二重の筋肉が見える體格だから、竝居る一同、うわあつとばかりに喝采した。このおかみさんの飼つてゐる、動物どもに對する喝采にも、決してひけをとらない大喝采であつた。

タルタランさんが、鐵砲を肩に、遣つて來ると、これを見た一同、青くなつて驚いた。



男も女も、子供も大人も、タラスコンの町中が全部揃つて、動物の檻の前を、平氣な顔で、武器も帯びず、恐れげもなく、危険なんぞありつこが無いといふ顔附で、あちらへぶらり、こちらへぶらりしてゐたが、今しも町の大英雄、えらいタルランさんほどの人が、事もおろかや、恐るべき戦争道具を肩に、小屋の中へ闖入なされたのを見ると、老若男女悉く、色を失つたも無理はない。こいつは、きつと、とてもこはいことがあるのだぞ。それが證據に、あれを見る、あの英雄さまが……となつたから、瞬く暇もあらばこそ、右往左往に逃げ散つて、忽ちのうちに、檻の前は、人つ子一人あなくなつた。こはいよう、と泣き出す子供、小屋の入口ばかり見てゐる女。藥屋のベジユケさんと來たら、鐵砲を取りに行くんだと言つて、何時の間にか逃げて歸つた……

さしもの大混亂も、やがて段々、タルランさんの態度が目につくに從ひ、やう／＼に鎮まつて、人々の心に勇氣が出てきた。

といふのは……

タラスコンの大英雄、大膽不敵のこの人だけは、怖めず臆せず、天の一角を睨みつ、小屋の中を一巡した。水槽にある海豹の前なんぞ、立止りもしないで、通り過ぎた。長つ細い箱にがさ／＼とごそごそ妙な音がしてゐるが、その中で大蛇が、生きた鶏を丸呑みにするところなんか、なあんだといふ顔附で、一寸覗いたきりであつたが、やがて最後に、びたつと足を留めて、動かなくなつたのは、

外でもない、獅子の檻の前……

いとも恐ろしき、莊嚴なる會見。片や、タラスコンの獅子に、片や、アトラス山生捕の獅子。互ひに見合つて……こちらはタルランさん、膝を伸ばして仁王立、鐵砲を杖にして、腕を組んでゐる。あちらは獅子、巨大なる獅子、藁の中に轉がつて、眼ばかりばち／＼、間抜け顔、黄色い鬘でも被つたやうな、うんとでかい鼻面を、前肢の上にぬつと出し……この御兩人が物も言はず、お互ひの顔をぢつと見据ゑた。

すると不思議や、かの獅子、たつた今まで、タラスコンの老若男女を眺めては、貴様達なんか相手にするものかと、威張りくさつた顔附で、誰の鼻つ先でも欠伸なんぞしてゐたやつが、針發銃を見て癢に觸つたのか、この人を見て、此奴一種の獅子なりと嗅ぎ付けて、好き敵御參なれと思つたのか、俄に憤怒の様子を示した。先づ獅子は、ふうつ、ふうつと鼻を鳴らし、ごうと唸り出し、爪を擴げ、肢を伸ばした。次には、やをら立上り、頭を擧げて、鬘を振つた。大きい口をくわつと開け、タルランさん目蒐けて、物凄いと何とも言へない、咆吼一聲。これに答へたのは、人間どもの恐怖の叫びだ。度を失つたタラスコンの町民は、先を争つて入口へ急いだ。老も若きも、女も、子供も、荷擔ぎ人足も、帽子打も、さしものにえらい隊長さんのブラギダさんまで……然るに、たつた一人、わがタラスコンのタルランさん、この人だけは、貧乏搖ぎもしなかつた。……すつくと立つて、泰然



自若、相も變らず檻の前、眼は爛々と輝いて、口はあの、町中誰知らぬ者もない、悪魔の歌をやらかす時の、見るも恐ろしい尖んがらした口で……

一瞬間の後、帽子打の御定連は、わがタルタランさんの落着いた態度を見て、同時に、あゝ、さうさう鐵格子は頑丈無類だつけ、と思ひ出しもしたもので、再び勇氣を取り返して、總大將の傍へ寄つて来た。その途端、御定連の耳に入つたのは、獅子を見詰めてゐるタルタランさんの口から、眩くが如くに洩れた言葉、

「ふうむ。こいつは、どうも、狩の値打が十分あるわい」

といふのであつたが、かう言つたきり、タルタランさんは、その晩はもう口を利かなかつた……

### 九、不思議なるかな、蜃氣樓の仕業

それつきり、タルタランのタルタランさんは、その晩はもう口を利かなかつた。ところが、たつたそれだけで、既に十分、しゃべり過ぎた譯になつた……

翌日になると、町中は、近々タルタランさんがアルヂエリアへ、獅子狩に出かけるぞ、といふ評判

で大騒ぎだ。これに就いては、讀者諸君も、いざといふ場合には、證人になつて下さるだらうが、わがタルタランさん自身の口から、そんなことを喋つた覚えは全然ない。然るに、何ぞや、御承知の、あの、蜃氣樓が……

煎じ詰めると、要するに、全タルタランのあらゆる人間が、話といへば、この遠征のことばかりであつた。

廣場でも、俱樂部でも、コストカルドさんの店頭でも、人の顔を見さへすれば、仰山な調子で、すぐと、かうだ。

「時に、あんたは、新事實を知つとるだらうな、いくら何でも」

「時に、どうしたと言ふんだね。……タルタランさんの遠征だらう、それくらゐ、いくら何でも」

タルタランの町では、あらゆる文句が、「時に」といふ言葉で始まり、「いくら何でも」といふ言葉で終るが、それを各々「どきに」とか、「いぐら何でも」とか、發音する。だから、今お話の當日には、いつもの日よりずつと激しく、あちらでも「どきに」、こちらでも「いぐら何でも」の連發で、硝子がびり／＼顛へたものだ。

タルタランさんの亞弗利加行、といふことを耳にして、町中で一番驚いたのは、誰あらう、御當人のタルタランさんだ。ところが、何しろ、虚榮心なるものがある以上、斷じて出かけないとか、出か



ける意志は毛頭無いとか、そんなことは口に出せない。可哀さうに、タルタランさんは、この遠征に就いて、人から訊かれた最初の時、逃げを張るやうな調子で、ごく曖昧に、

「いやあ……どうも……ひよつとするとね……何とも知れないよ」

と答へたのが始まりで、二度目になると、逃げなんぞ張るものか、と圖々しく、

「あゝ、多分」

と出たものだし、三度目になると、

「確定しましたよ」

と、遣つ付けた。

やがて、その晩、俱樂部へ行つてもい、コストカルドさんの店へ顔を出しても、まあく、一杯と、玉子入りの甘い酒を勧められるし、えらいくくと褒められるし、もそつと明るい方へ、さあどうぞ、なんかんといふ持て方で、すつかり好い氣持になり切つて、かまどに自分の遠征が、町中の評判になり得たことを悦んだ餘り、無我夢中、可哀さうなはこの人で、といふタルタランさんが出来上つた。とは即ち、堂々と正式に發表して曰く、古ぼけた帽子を打つなんか、もう大抵に倦きちまつたから、いよく最近のうち、アトラス山脈の大獅子を取りに行く……

この發表があるや否や、どつとばかりに萬歳の聲。玉子入りの酒がもう一杯、もう一杯。拳を握つ

て、振廻す。頸にかじり付いて、鬚武者が接吻する。パンヤの木があるお家の前は、夜中過ぎまで、どんちやん騒ぎの炬火行列。

納まらないのは、タルタラン・サンチヨ君。亞弗利加へ出かけるの、獅子狩をするのとは、思つただけでも、ぞつとした。炬火行列の大騒ぎが、窓の外でがんくやつてゐる最中、獨り居間へ引取ると、タルタラン・キホオテ君と大喧嘩を始めた。キホオテ君のことを、氣違ひの、誇大妄想狂の、無鐵砲の、たとへやうがない莫迦野郎のと、さんくくの悪口を吐いてから、そんな遠征に出かけた日には、これくしかくの澤山の、恐ろしいものにぶつかるぞと、數へ上げたのは、難船、儂麻質斯、熱病、赤痢、黒死病、象皮病、その他……

タルタラン・キホオテ君は誓つて曰く、決して無鐵砲な眞似をしないからとも、冷えないやうに、着物寢具に氣を付けるからとも、入用の品をすべて持参するからとも、口を酸つぱく言つたのだが、タルタラン・サンチヨ君は、てんで聞き入れない。もう既に、獅子に食ひ殺され、聖者カムビスと同様に、沙漠の砂に埋められたやうなことを言ふ。そこで、キホオテ君の慰めるには、何も今直ぐ行くとはきまらず、今日明日に迫つた旅ではないが、してみれば、君、サンチヨ君、お互ひにまだ、出かけた譯ではないだらう、と言つたので、サンチヨ君は多少安心した。

言ふまでもなく、これほどの大旅行は、ちつとやそつとの準備をして、出かけられるものでない。



抑々、行先は何處だと思ふ。然らば直ぐにおいそれと、鳥が飛び立つやうな工合には、ちよいと、どうも……

わがタラスコンの人氣者は、何はともあれ、先づ第一に、偉大なる阿弗利加旅行家の、ムンゴ・バルク、カアイエ、リギングストオン先生、アンリ・デュゼイリエ、など、いふ人達の本を、片つ端から讀破することにした。

讀むに随つて、分つたのは、これら勇敢なる旅行家が、大遠征の草鞋を穿くに先だつて、長い間に體を慣らし、饑餓、涸渴、強行軍、あらゆる種類の不自由に、耐へ得るだけの體を作つた、といふ事實であつたから、タルタランさんも、こいつを眞似た。この日以来、びつたりと、口にするのは重湯ばかり——タラスコンで重湯と言へば、黒焦にした麵麩を賽の目に刻み、韭の球を一つと、立麩香草ちよつびり、月桂樹の若葉と一緒に、お湯で煮たものだ。——この獻立では助からない。お察しの通り、サンチヨ君が、苦い顔をしたの、しないの……

重湯による練習の外、タラスコンのタルタランさんは、もう一つ大事な實地練習をした。何しろ長途の旅行だからと、毎朝必ず、七八回、町の周圍をぐるぐる廻つた。或は速足、或は駆足。兩方の拳を腰に付けて、小さい白い石を口に含んで、これは古人の方法を學んだものだ。更に又、夜露、濃霧、朝露に、へこたれてはならんとばかり、毎晩々々、庭に下り立つて、十時、

十一時まで、鐵砲構へて、何を狙ふか、ベンヤの木蔭……

それから、もう一つ。

ミテエヌ猛獸團がタラスコンにゐた間、帽子打連がコストカルドさんの店に長つ尻をして、夜遅くなつての歸り道、お城の廣場に來かゝると、必ず毎晩、暗の中に、怪しの人影を認めた。小屋の後をのちらこちら、妙な男が歩き廻つてゐた。

これぞ、タラスコンのタルタランさんで、深夜の眞暗に獅子の怒號を聞いても、びくくしないやうにとの、練習最中であつた。

## 十、出發を前にして

かういふ風にタルタランさんが、並大抵ではない各種の練習を、夜を日に繼いで遣つてゐる時、タラスコンの町中は、商賣も道樂もそつちのけ、タルタランさんにだけ目を付けた。帽子打はあがつたりで、戀愛歌の歌ひつこは臨時休業。藥屋のベジユケさんのピアノと來たら、綠色の覆ひを被せられて退屈ばかりしてゐたもので、勿體ない話だが、この素晴らしい樂器の上に、班猫がひつくり返しになつて、乾干しにされてゐる……と言つたやうな有様で、何事も、タルタランさんの遠征のため、



すつかりおぢやんになつてしまつた。……

おつと、まだある。客間に於ける、わが大英雄のえらい人氣だ。引張り風の、喧嘩の種。借りたり貸したり、盗みつこまでした。女にとつての最大名譽は、タルタランさんに腕を執られて、ミテエヌ猛獸團へ見物に行き、獅子の檻の前で、この人自身の口から、この巨大なる野獸の狩の仕方の説明され、何歩の距離から狙ふべきかとか、命の危い場合がうんとあるとか、いろ／＼言つて貰ふことであつた。

人に訊かれると、タルタランさんは、詳細を極める説明をした。何がさて、ジュウル・ヂエラアルの本を讀んであるから、獅子狩のことなら、一から十まで、先刻御承知のこのお人で、實際に狩に行つた人でも、かうは行くまい。だから話がこれに及ぶと、しやべるわ、しやべるわ……

時に、最も素晴らしかつたのは、裁判所長のラドエズさんや、退役主計大尉、えらい隊長さんのブラキダさんなんぞのお宅で、夜食の會が開かれた時で、珈琲が出ると、皆が椅子を寄せて来て、今度の狩の模様を是非一つと、タルタランさんに話をせがんだ……

かうなると、わが大英雄は、食卓にどすんと肘を載せ、モカの中へ鼻を突つ込みながら、眞に迫つた凄い聲で、あちらに待つてゐる危険の數々を、いとも巧に話し出した。月のない晩、夜明しで獲物を探すこと。黒死病その他の流行病がこはい沼澤地方。夾竹桃の葉が腐つて、毒性を帯びた河の水、

萬古の雪。赫々たる太陽。おそろべき蝸。雲霞の如き蝗の大群。といふことから始まつて、いよく、アトラス山の獅子の話しになり、その習性やら、その喧嘩の方法、たゞさへ強い、荒つばい奴が、交尾期になると、大變で、言はうやうなきひどい力と荒々しさ……

やがてのことには、話す御當人が夢中になり、食卓を離れ、食堂の眞中で、どすん／＼跳ね廻る。獅子の吼える聲の眞似をする。小銃の音のどをん、どをん、爆彈が風を切る音、しゆうつ、しゆうつといふのまで眞似をして、身振り手振りの、眞赤な顔、椅子も何もひつくり返した……

食卓を圍む人達は、一人残らず、青くなつた。男は頭をゆすつて、顔を見合せた。女は眼を瞑つて、はあく／＼言つた。老人は肌身放さぬ長い杖を、劍かなんそのやうに執り直した。隣の部屋はと見てあれば、早くから寝かされた子供が、みんな起きて來た。物凄い咆吼と鐵砲の音に目が覺めて、暗い處がこはくて、明るい方へ寄つて來たのだ。

さて、しかし、黃道吉日を選ぶのか、タルタランさんの御出發は、まだ中々のことであつた。

### 十一、鐵砲で來い、刀で來い……眞綿に針は卑怯だぞ

果して一體本當に出かける氣があるのか知ら……これは、どうして、大いに微妙な問題で、タルタ



ランさんの傳記を書く、僕としても返事に困る。

この問題は預りにして、さても、ミエテヌ猛獸團が、タラスコンからその小屋を、引拂つて後、三箇月以上に及んでも、獅子をぶち殺すべき英雄は、一步たりとも踏み出さなかつた……といふ所から見ると、わが愛すべき大英雄は、再しても蜃氣樓のごまかしに引つ懸かつて、最早アルヂエリヤへ行つた積りになつたらしい。この度の狩には、この度の狩には、としゃべつてゐるうちに、狩を済ましたやうな氣になつて、もうすつかり、納まり返つたらしい。つまり、あの、上海に於ける、領事の旗の掲揚と、韃靼人日蒐けて、どをん、どをんの、あの流儀で、堅く／＼思ひ込んだ。

さてこゝに、困つたことが出来たといふのは、タラスコンのタルタランさん、この人だけは蜃氣樓に遣られたが、ほかの連中、タラスコンの町中は、今度こそはごまかされない。三箇月も経つたといふのに、狩人先生一向に、行李一つも作らないから、これを見た町中の誰彼は、ぼそ／＼いろんな噂を始めた。

「きまつてまさあ。上海行の、例の手さ」

と、にや／＼笑ひながら、言つたのは、コトスカルドさん。この鐵砲屋さんの一言が、口火を切つたといふ譯で、忽ちのうちに町中は、タルタランさんの言葉を信用しなくなつた。

ちとお芽出度い、意氣地無し連中、例を擧げると、ベジユケさんのやうな、蚤が飛び出しても、わつと逃げ、眼を瞑らないと、鐵砲が打てないやうな、かういふ連中が、殊更に、失禮なことを言つたものだ。俱樂部だとか、廣場だとか、タルタランさんの姿を見ると、のこ／＼傍へ遣つて来て、冷かし半分、こんなことを言ふ。

「時に、御出發は、何時になりますか」

コトスカルドさんの店へ行くと、タルタランさんが何と言つても、ふん／＼と鼻であしらはれた。帽子打の御定連は、頭に戴くことを拒絶したのだ。

おまけのことに戯れ唄が流行つた。所長さんのラドゼエズさんは、平生職務の暇々に、プロウンス州に鎮座まします、詩の女神に向ひ、お世辭たら／＼祈願を籠めて、詩歌の嗜み、大いに深いお人であつたが、この度この地方の俗語を使つて、新作一つを出したところ、これが大變な當りを取つた。この歌の大體を述べてみると、ヂエルエエ先生といふ、鐵砲の大名人があつて、その恐ろしい銃先に、亞弗利加の獅子を、一匹残らず、退治してくれん、と、えらい權幕はよかつたが、生憎のことに、その鐵砲の奴め、奇妙にひねくれた出來工合で、彈丸を詰めて打つても、出ない。彈丸を詰め替へ、打つても、引けども、どうしても出なかつた。

どうしても出なかつた。とは即ち、何をあてこすつたか、お察しの好い讀者諸君は……  
手の平かへす一瞬の間に、歌は町中へ擴まつた。タルタランさんがぶら／＼行くと、河岸の荷擔ぎ



人足でも、御門の前の靴磨き小僧でも、聲を揃へて、かう歌つた。

ヂエルゼエ先生の鐵砲は

彈丸を詰めても、詰め替へても

ヂエルゼエ先生の鐵砲は

詰めても、詰めても、どうしても出ない

たゞしかし、こいつを歌ふのは、相當距離を置いた、遠い處であつた。何しろ、どうも、二重の筋肉がこはいので。

あゝ、タラスコンの人心、熱し易く、冷め易く……

何を聞いても、何を見ても、わがえらいタルタランさんは、聞かざる見ざるの振りをした。それはうはべのこと、心の底では、ぬちくと攻め寄せ、毒蟲のやうな奴等には、したゝかに降参してゐた。思へば、タラスコンは、わが手中より滑り落ちた。町の人氣はほかの人に浚はれた。思へば、思へば、タルタランさんは、腹が立つてならなかつた。

人氣といふものは、うまいお汗が一杯入つた、茶碗のやうなものだ。その前の椅子に腰を卸せば、

とても嬉しいが、ひつくり返つた日には、火傷する……

腹の中は煮えくり返るタルタランさんだが、顔は常に微笑を浮べ、何事も起らなかつたかの如く、相變らずの生活を、さも〜平氣に續けてゐた。

ところが、時々、この、勇しくも顔に括り付けてゐる、屈托のない晴れやかさ、といふ假面が、何かの拍子に、びよいと脱れた。すると、その時見えたのは、笑ひ顔に非ずして、そは實に、忿怒の形相、惱める顔附……

さるほどに、或る朝のこと、靴磨き小僧どもが、窓の下へ來て、

ヂエルゼエ先生の鐵砲は

を遣り出したから、その聲は、わが大英雄が鏡に向ひ、髭を剃らうとして、(タルタランさんは不  
斷、髭をそのまゝに生えさせるが、あんまり剛くなつて來ると、仕方なしに手入をする)といふ場面  
を演じてゐる、お居間のあたりへ、がんく響いて來たものだ。

その時遅し、かの時速し、窓ががたと明け放たれ、タルタランさんが現れた。襦袢一枚で、鉢巻  
して、上等の石鹼の泡を顔中に塗つて、剃刀と鬚刷毛を振廻し、いとも恐ろしき聲を張上げ、

「鐵砲で來い、刀で來い……眞綿に針は卑怯だぞ」

と呶鳴つたが、成程、これは名臺辭で、歴史に特筆大書すべきものだが、惜しむらくは、少し見當



違ひであつた。折角の名臺辭を、相手もあらうに、むぎ／＼と、背の丈が靴磨きの箱ほどもない、雞小僧の、刀一本碌に持てない、赤ん坊風情に向つて言ふとは……

## 十二、パンヤの木がある小さいお宅で取交された話

どいつも、こいつも、變節したが、流石に、軍人連中だけは、相も變らぬタルタランさん最良であつた。

退役主計大尉、えらい隊長さんのプラキダさんは、終始變らざる尊敬を捧げて、

「あのお人はラバンド。勇氣のある人だ」

と、言ひ通しであつたが、この證言は確なもので、藥屋のベジユケさんの言葉に比べると、どつちが、どつちとも言へない程、各々確な……さて、このえらい隊長さんは、亞弗利加遠征のあてこすりなんぞ、一つも言ひはしなかつたが、世間の騒ぎが餘りひどくなると、いよく堪り兼ねて、一言なかるべからずと奮起した。

或る晩、可哀さうなタルタランさんが、居間に獨りつくねんと、色々悲しいことばかり、考へ込んでゐる時に、ひよいと見ると、隊長さんが入つて來た。嚴肅な顔で、手袋まで眞黒い、黒づくめの衣

裳に、耳の邊までボタンを嵌めた、いやに改まつた恰好だ。

退役大尉さんは、一句々々に力を籠め、

「タルタランさん、お出かけになるんですぞ。タルタランさん」

と言つたきり、こつちへ來ないで、扉のところを棒立だ——嚴然として侵すべからざること、義務のやうに。

抑々、この、「タルタランさん、お出掛けに、なるんですぞ」とは何のことを言ふのか、タラスコンのタルタランさんには忽ち分つた。

眞蒼い顔で、立上つた。名残惜しげに、あたりを見廻した。綺麗な居間は静かな部屋で、ぼか／＼と暖く、氣持のいい、明るさだ。大きい肘掛椅子の工合のいいこと。窓はいづれも、回轉窓掛で、その眞白さ、幅の廣さ。窓の向うにふるへてゐるのは、さ、やかなお庭の華車な木の枝。惜しむ名残は盡きせぬど、かくては果てじと、タルタラン、えらい隊長さんに進み寄り、その手を執つて、しつかと握り、涙に曇る聲ながら、弱き心を押包む、言葉の綾で、

「出かれますとも、プラキダさん」

と雄々しくも言放つた。

言つた通り、出發した。だが、それは、その日すぐに、とは行かなかつた。いろんな道具を揃へる



のに、相當の時日といふものが……  
先づ最初、ボンバルさんに注文して、内側にすつかり銅を張つた、でかいトランク二つを作つた。外側に長い板金を打ち付けて、それへ彫り込む文字として、

### タラスコンのタルタラン

#### 武器 在 中

と指定したが、銅の内張と、文字の彫りに、中々長いこと費つたものだ。  
次に、タスタヴンさんの店へ注文したのは、特別でかい、上等別製の帳面で、日記を付けたり、旅の印象を記すためだ。獅子狩といつても、狩ばかりが能ではない。途中で、いろいろ、感想がある。

遙々マルセイユへ手紙を出し、食料品の罐詰をしこたまと、即席スウプにする乾肉の、一回分づつになつたやつを山の如くに、最新式の携帯天幕で、擴げるんでも、疊むんでも、一分間に自由自在といふやつを一張に、水夫なんかの履く長靴どつさり、雨傘二本、防水布の外套、日光の直射を避ける青眼鏡、などと、殆ど汽船一艘の荷物を取寄せた。

最後に、藥屋のベジユケさんと相談して、藥箱に詰めたのは、絆創膏やら、藥草やら、氣付藥に殺菌劑で、まるで藥屋の店が動き出したやう。

可哀さうなタルタランさん。かういふ準備を整へたのは、自分が望みではたではない。用意をさを怠りなく、細いところまで行届く、これほどの世話をして遣れば、あの怒りん坊のタルタラン・サンチヨ君も、いくらか機嫌が直らうかと、そればかりにしたことだが、サンチヨ君は、中々どうして、出發が確定したその日以来、毎日毎晩、嗚り續けの怒り通しだ。

### 十三、御 出 發

やがて遂に、その當日が來た。記念すべき、偉大なる日だ。

朝早く、薄暗いうちから、タラスコンの町中が起き出して、パンヤの木がある瀟洒なお宅を、ひしひしとばかり取圍み、アギニオン街道の交通防害になつた。

どこの窓からも首が出て、屋根の上にも人ばかり、木には人が生つてゐた。ロオヌ河の船乗も、河岸の荷擔ぎ人足も、靴磨き小僧も、お金持も、紡績の女工さんも、機織娘も、俱樂部の御定連も、總動員、町中の人が遣つて來た。またその上に川向うの、ボオケエルの連中さへ、あの危い橋を渡つて來



た。近郷近在のお百姓は、箱車を引張つて、葡萄酒の人達は、リボン、房玉、鈴なんかで、可笑しいほどに飾り立てたる、牝の驃馬に跨がつて、反つくり返つて遣つて来る。まだ来る、まだ来る、何が来る。名にし負ふ、アルルの娘と、美貌を謳はれる可愛らしい田舎娘が、紺青のリボンを頭に捲き付け、カマルグ地方特産の、あをの小馬の上、といつても、各々色男の尻馬に乗つて、あちらからも、こちらからも。

かういふ群集が、押し合ひ、へし合ひ、目指すところは、タルタランさんの御門前で、えらいくタルタランさんが、いよくこの度獅子をぶち殺すため、遙々と、「どるこ」へ向ふ……

「どるこ」とは、土耳其のことを言ふのだが、一體タラスコンの連中の頭の中では、アルヂエリアでも、亞弗利加でも、希臘も、波斯も、メソポタミヤも、ごつちやになつて、唯一つの、茫漠模糊たる國になり、殆ど神話の國と思はれてゐたから、こいつを引つくるめて、「どるこ」と言ふ。

さても、黒山のやうな人の中を、帽子打先生連が彼方此方した。總大將の御出發といふので、その威を借りて、大得意、英姿颯爽として、人波を突つ切る。

パンヤの木があるお宅の前、でかい荷車が二臺あつた。時々、門の戸がぱつと明くと、瀟洒な庭の中を大勢の人が、重たさうに遣つて来るのが見えた。トランクや、箱や、夜具の包を、えいやつと擔いで来て、荷車の上へ積み込んだ。

荷物が一つ来るたんびに、群集は々々よめいた。頓狂な聲を張り上げて、荷物の名前を言ふ奴がある。

「やあ、携帯天幕だ……ひやあ、鐘詰だ……薬箱だ……武器のトランクだ……」

すると、帽子打の先生連が、包の中味を詳しく説明なさる。

やがて、十時、突如として、群集中に恐ろしい動搖が起つた。鐵の庭扉が轟然と開いた。

「来た、来た……そら、来たぞ」と嗷鳴つた奴がある。

正しく、来た、おいでになつた……

そのお姿が、敷居際に見えるると、期せずして、群集の口を衝いて出たものは、次の二つの、呆然たる叫びであつた。

「あれは、どるこ人だ……」

「——眼鏡を掛けてる」

抑々タラスコンのタルタランさんは、アルヂエリアへ行くものなら、アルヂエリア風の衣裳を着なければならん、といふ斷案を下したのだ。白麻で作つた、だぶくのズボンを引摺つて、窮屈さうなチヨツキには、金のボタンをずらりと光らし、二尺もあらうかと思はれる、無暗と幅の廣い、眞赤い



帯を、腹の周圍にぐる／＼捲きつけ、カラは着けず、額を剃り上げ、頭に戴く土耳其帽は、とてもでつかく、とても眞赤く、青い房を長々と……といふ扮装のその上に、重たい鐵砲を二挺まで、右の肩にも左にもし、吊帶に獵刀、しつかと横たへ、臍のあたりに彈藥盒、革囊に入つたピストルは、お聲の邊でぶら／＼した。かくの通りの爲體で……

や、これは失禮。僕はまだ忘れてゐた。例の眼鏡だ。うんとでつかい青い眼鏡で、こいつが中々似合つたから、わが大英雄の猛惡な姿を、多少和らげて見せたものだ。

「タルタランさん萬歳……タルタランさん萬歳」

といふ鯨波の聲が、どつと上ると、わがえらい人は微笑した。しかし、お辭儀はしなかつた。お辭儀こそしないが、心では、かくも盛大なる見送りに對し、どうしなれば、跡がこはいか、よつく御承知のタルタランさんで、お辭儀したいは山々だが、鐵砲が邪魔で出来なかつた。ところで、その、今の心の又その奥の、どん底の心では、何が萬歳だ。無慈悲な奴等め、貴様達のお蔭で、このタルタランは、羽目が眞白、鎧戸が緑の、こんないゝ家を出て行かねばならんわい、と大に呪つたのかも知れないが……そんな素振はちつとも見せない。

落着き拂つて、誇りがましく、尤も、すこし青い顔で、通に出ると、荷車を一眼検査して、萬事手落のないのを見ると、勇氣凜々停車場へ向つた。一度も後を振向かず、バンヤの木があるお家なん

ぞ、未練はないぞといふ風で、そのすぐ跡に従ふのは、退役主計大尉、えらい隊長さんのブラギダさんで、次は裁判所長のラドエズさん、それからお次は、鐵砲屋のコストカルドさんを初めとし、帽子打の御連中、さてその次は荷車で、最後にぞろ／＼、一般民衆。

停車場の前には、驛長さんがお出迎へだ——これは亞弗利加人の老人で、千八百三十年頃の舊弊人で、タルタランさんの手を執つて、幾度も／＼堅い握手だ。

巴里マルセイユ間の急行列車は、まだ來てゐなかつた。タルタランさんと幕僚の面々は、待合室に入つた。これだけの人が入ると、驛長さんは格子戸を締切つた。混雑を防ぐためだ。

約十五分間、タルタランさんは、待合室のあちこちを、帽子打先生連の間を、歩き廻つた。この度の我輩の旅はとか、狩獵はとか、景氣よくしやべつた末、獲物を毛皮にして送つて寄越すよ、などといふ約束をした。すると、各々先を争ひ、タルタランさんの手帳に名前を書込んだ。ダンスの相手になりたいたい時、丁度かういふことをするが、これは毛皮を貰ひたいのであつた。

正に毒盃を仰がんとするソクラテスの如く、悠容迫らず、大膽不敵のタラスコンの英雄は、並居る一同に、一々言葉をかけ、一々愛想好く笑つたものだ。言葉は簡なれども、その容や慇懃を極む。悪口屋がこれを見たら、どうだ、あいつ、出發間際に、精々跡で好く思はれようと、いやに愛嬌を振撒きやがる、と言つたかも知れない。それは兎も角、帽子打の御連中は、かういふ優しい總大將の有様



を見て、思はず涙を浮べたが、中には後悔の涙を流した人もあつて、所長さんのラドエズさん、薬屋のベジユケさんなんぞ、特にさうであつた。

あちらの隅でも、こちらの隅でも、長年のお馴染みが、みんな揃つて泣きに泣いた。格子戸の隙間からのぞくのは、締め出しを喰つた一般民衆で、中の様子がよく分からないから、矢鱈に聲を張り上げて、

「タルタランさん萬歳」

到頭鐘が鳴つた。地響立て、汽車が来た。耳を劈くばかりの汽笛は、圓天井をがたく揺つた。

……お早く願ひます。お早く願ひます……

「左様なら、タルタランさん……左様なら、タルタランさん……」

——「さらば、諸君」と言つたのは、わが大英雄で、かう言ひながら、えらい隊長さんのブラギダさんの頬つべたに接吻したが、これは、この、無二の親友に別れる氣持だけでなく、いとしい／＼タラスコンの町やあい、といふ悲痛な氣持で遣つたものだ。

ひらりと打乗る列車の中。と、丁度その車室には、巴里女が一杯あだが、鐵砲やら、ピストルやら、うんと吊下げた妙な風態の奴が、今しも入つて来るのを見ると、この女連、驚きの餘り、死にさうになつた。

#### 十四、マルセイユ港

出帆だ。出帆だ。

頃は何時なんめりや、千八百六十……何年かの十二月一日、丁度正午の折も折、マルセイユの空は飽くまで澄み渡り、眩きばかりのプロヴンスの冬の太陽、その輝きに照らし出されたるものは、カヌピエエルの廣場を行く、いと怪しげなる「どるこ」人、となつたから、さあ大變、マルセイユつ兒の吃驚したこと……左様、たつた一人の「どるこ」人で、而もマルセイユは、名だたる海港、度々「どるこ」人がうろついたから、何もそんなに驚かなくても、好きさうなものだが、こんな「どるこ」人は始めて見たので、マルセイユつ兒も……

これなる怪しき「どるこ」人は、誰あらう——など、今更言ふにも及びますまいが——これぞ、タルタランさん、おえらいタラスコンのタルタランさんだ。武器のトランク、藥箱、鐘詰なんかを伴に連れ、波止場をずつとお徒歩で、あちらの國へお渡し申すべき、飛脚船ズアアブ號が待つてゐる、ツウアシユ汽船會社の船着場指して、急がる、ところであつた。

耳にはまだ残る、タラスコン全町を擧げての、別れの叫び、目を射るは滿天の輝きで、鼻には海の



香を吸ひ、躍る心地のタルランさんは、左右の肩に二挺の鐵砲、きよろ／＼眼で見廻すのは、生れて初めて見るマルセイユ港の、素晴らしい光景だから、おつ魂消ないわけには行かなかつた。……夢かとも思つたし、我名は「船乗シンドバッド」で、千一夜物語にある空想の町へでも来たのかと思つた。

見渡す限り、帆柱と帆架が、色々様々に交叉してゐる。世界各国の旗がある。露西亞の旗、希臘の旗、瑞典の旗、チユニススの旗、亞米利加の旗……澤山の船が波止場に横付けで、その舳の突梁は、岩壁の上へ突き出して、銃剣を並べたやうだ。その下を見ると、木の彫刻を彩つて、水の精やら、女神やら、聖女などの像がある。船の名前を象つたものだ。それが、皆海風に打たれ、鹽に洗はれて、古びたり、損じたり、色鮮かに光つたり、微が生えたり……時々どうかすると、船の間に海が見える。ほんの僅の切れつ端ほどの海面で、油に汚れた、汚點だらけの布のやうだ……無数の帆架が入り交り、鷗の群が青空に美しい點々を描くあたりを仰ぐと、見習水夫が口々に、世界各国の言葉で罵り合ふ。

波止場には、彼方此方の石鹼工場から、細い川が流れ出して、青黒いどろ／＼の水に、油と曹達を浮べて来るが、其處を織るが如くに往來するのは、税關吏、運送屋など、大勢の人で、人足なぞも、コルシカ産の小馬に荷を付けて、遣つて来る。

倉庫に一杯積上げたのは、諸國の珍しい織物だ。小屋掛に煙が濛々としてゐるから、覗いてみると、水夫がお料理をやつてゐる。猿や鸚鵡を賣る人もあれば、繩や帆布を賣る店もある。骨董屋にはごた／＼と、奇妙な品物が並んでゐる。えらく時代のついた、長い大砲やら、金びかのでかい提灯やら、錆付いた巻揚機や、折れちまつた錨やら、古ぼけた索具やら、役に立ちさうもない滑車や、通話管や、ジャン・バルとか、デユゲエ・トルウアンとかの昔に出来たらしい、恐ろしく舊式の雙眼鏡がある。貽貝やめくらがひを賣る女は、貝殻を山と積んだ傍にしゃがんで、しよつちう呶鳴り續けてゐる。水夫が大勢通つて行くが、瀝青の壺を抱へたり、煙の立つ鍋を掛けたりして、鰯が一杯の籃を持つたのは、水盤から湧く白玉の水で洗ひに行くのだ。

どつちを向いても大變で、あらゆる種類の物が、ごた／＼してゐる。絹がある、鑛物がある。材木がある、鉛の塊がある。羅紗がある。砂糖がある。豆がある、菜種がある。甘草がある、甘蔗がある。東洋と西洋がごちやませだ。和蘭で作つた乾酪が、うんと澤山來てゐるが、こいつを赤く塗つたのは、伊太利はヂエノアの女だ。

あつちの波止場では、船から麥を卸すところだ。恐ろしく高い足場の上から、岩壁目菟けて、袋をどし／＼、人足どもが投下す。袋の口を開けると、麥は黄金の洪水で、金髪の色を煙を立て、流れ出す。それを、赤い土耳其帽の男が、驢馬の皮で出来た大きい篩へ流し込む。やがて、車に積んで曳出



すと、その跡を追蒐けて、わい／＼行くのは、女子供大勢で、手に手に小箒と籠を持って、落ちこぼれを拾はうと……

もつと向うに、船渠がある。でかい船が横向に、腹を出してゐると、その腹に付いた海藻を取らうと、火の付いた束を振廻して、焼いてゐる。架架は水に浸かつてゐる。樹脂の匂がふん／＼する。耳を聳せんばかりの音は、船體に大い銅板を打付ける、鐵槌の響きだ。

帆柱が重なり合つて、暗いとさへ見える空が、時々ぼつと明るくなる。するとタルタランさんの眼に、港の入口が見えた。出船、入船、大した眺めだ。マルタ島に出動する英國の帆走軍艦は、洗つたやうに眞白で、玩具のやうに綺麗な軍艦で、士官の嵌めた手袋は、洒落た黄色い革だ。歡呼の聲や、悪口雑言に送られて出帆する、マルセイユの帆前船は、その艦に肥つちよの船長が、フロックコオトにシルクハットの禮装はい、が、プロヴンス訛のへんな言葉で、あれやこれやと指揮を下す。出て行く船は、帆を一杯に揚げて、矢を射るやうに、遠ざかる。すつと向うに見える船は、中々こつちへ遣つて来ないが、陽を浴びてぼつかり浮び、空へでも昇りさうだ。

この景色が、しよつちう、物凄い音響に満され通した。荷車のがたく。「帆を揚げえ」といふ水夫の叫び、悪口を言合ふ唸鳴り聲、わめく歌。サン・ジャン砲臺、サン・ニコラス砲臺の太鼓と喇叭。ラ・マジヨル寺院、デザクウル寺院、サン・ギクトル寺院の鐘、かういふすべての音響を受取つたマ

ルセイユの町は、これを丸め轉がし、揺ぶり抜いて、自分の聲とごちやませにする。かくて出来上つた音楽は、氣違ひ染みた、野蠻人めいた、勇壯なもので、鹿島立を送る、壯大な樂隊のやうだ。この樂隊を聞いた者は、誰しも、必ず、出かけたくなる、カ一杯羽ばたいて、うんと遠くへ行きたくなる。

この素晴らしい樂隊を聴きながら、わが大膽不敵の大英雄、タラスコンのタルタランさんは、船に乗つた。獅子住める國をぞ指して……



## 二の巻

「どるこ」人の住める國

### 一、船路

土耳其帽の位置が變ること

三日目の晩

おた、おた、おた助けえ

親愛なる讀者諸君よ。僕はこの二の巻の初めに於いて、繪描きになりたいたと申上げるのである。而も、うんと上手な繪描きに成りたいのである。といふのは、外でもない。わがタラスコンのタルタラさんの土耳其帽が、ズアアブ號に打乗つて、佛蘭西からアルヂエリアに至る、三日間の船路のその間に、とてもいろんな位置をとつたが、そいつを是非とも、繪にしたいのだ。

お見せしたい第一の繪は、いよ／＼出帆に際し、甲板高く置かれたる、雄々しくも又、嚴かな、實にや英雄にふさはしい土耳其帽で、これを被つたお方のお頭から、眩しいばかりの後光が射した。次の繪は、ズアアブ號が港を離れ、そろ／＼浪に揺れ出した時で、土耳其帽は驚いて、ぶる／＼小刻みに頭へ始め、そ／＼、よくない事が遣つて來たぞ、としよげ返つたものだ。

さてその次の繪になると、沖合遠く、獅子灣の眞只中、浪は段々ひどくなつたる頃ほひ、暴風雨と戦ふ土耳其帽で、大英雄のお頭に、恐さの餘り棒立で、青々とした毛の房は、濃霧につゝまれ、突風を喰つて、天を衝いて逆立つた……四番目の繪になると、夕方の六時頃、コルシカ島が見えて來たが、時に、可哀さうなる土耳其帽は、船縁に並ぶ、ハンモック入の箱に凭れ、ても情無い眼附をして、海の深さを目測した……

さて最後に、第五番目の繪になると、狭い船室の奥の方、箆筒の抽斗みたいなベッドに、何か、くしや／＼の形の見ると哀れな妙な物が、枕の上で轉がりながら、頻りにぶつ／＼愚癡をこぼした。これぞ、かの土耳其帽で、出發當時の英雄的なる様にひきかへ、今や惘然極りなき、ナイトキャップと成下つて、死人のやうに眞蒼い、たゞ、びく／＼と痙攣する、病人先生の頭に嵌り、耳のあたりまで、おつかぶさつてゐた……

何たる光景。タラスコンの連中に見せたかつた。その英雄と崇めたる、タルタランさん御自身が、



お寝みになる場所もあらうに、箆筒の抽斗に寝轉がり、窓から射込む、青ざめた、不景氣な光に照らされて、鼻を衝くのは、コック場のいやな匂と、濕つて腐つたやうな木の香、つまり飛脚船特有の、嘔吐が出さうな匂の中に、こんな態であるところだ。また、あの連中に聞かせたいのは、推進機の一回転する度、苦しうに吐く瀕死の息、五分間毎にお茶を呉れといひ、ポオイに何やら毒付くが、遺憾ながら、赤兒のしやべるやうな小つちやい聲。これを聞いたり、見たりしたら、あの連中も後悔して、やれ、この人を、無理矢理出發させるんぢやあなかつた……

僕は決して謙は言はないが、この「どるこ」人の態を見て、同情しない者はないだらう。何しろ、どうも、病氣の來たのが急だから、可哀さうにこの人は、アルヂエリア風の帯を解き、武装を脱ぐ暇が無かつたものだ。柄の太い獵刀は、胸をきゆうく押し付ける。ピストルはごつく足に當つて、死の苦しき、そこへ持つて來て、例のタルタラン・サンチヨ君、持前のぐづり癖を出してからに、不平を言ふやら、罵るやら。

「莫迦野郎、見やあがれ……おれがあれ程、言つたのに……亞弗利加へ行くんだ、行くんだと、飽くまで駄々を捏ねやがつて……なんと、どうだ、これが亞弗利加……御感想は如何様で、

更に一層つらいことには、船室の奥にすつこんで、獨りでうんく唸つてゐるから他、の音は聞えずともないのに、社交室の船客が、笑つたり、食つたり、歌つたり、トランプをしたりする物音が、

手にとる如く、はつきり聞えた。このズアアア號のお客には、面白さうな人が大勢ゐた。休暇が終つて、歸隊する將校、マルセイユのアルカザアル座の女優さん、田舎廻りの喜劇の一座、メツカにお詣りして來たお金持の回々教徒、ラエルとかヂル・ベレエなどといふ、人氣俳優の眞似がお得意の、とてもお氣輕なモンテネグロ國の公爵様……かういふ人達が揃つてゐたが、誰も船になんぞ酔はなくつて、三鞭酒の杯を舉げ通したが、そのお相手は、ズアアア號の船長さん、くりく肥つた、快活なマルセイユつ兒で、マルセイユ市にも、アルヂエ市にも、どつちにも家がある、面白い人で、バルバツスウといふ滑稽な名前が、いかにもその人らしかつた。

タルスコンのタルタランさんは、こいつ等全部を、憎みに憎んだ。いやに景氣よく遣つてやがるので、こつちの苦しきは増すばかり……

やがて、三日目の午後になると、只事ならぬ動搖が、甲板上に起つたから、さしもの長い間、死んだやうになつてゐた。わが大英雄も、はつと目醒めた。がんく鳴るのは、舳の鐘だ。遙か上の、甲板の方に當り、どたばたするのは、走り廻る水夫の長靴だ。

「ゴオヘエ……ゴオスタアン」と嘯鳴るのは、バルバツスウ船長の皺鳴れ聲だ。

と思ふと……

「エンヂン、ストップ」



と聲がして、後はびたつと止つたきり、一度がたんと揺れが来たが、それつきりで……この飛脚船は、うんとおすんとも物を言はず、右に左にぶら／＼する。いはゞ、空中に浮んだ風船のやう……

「おた、おた、お助けえ。沈没だあ……」  
世にも哀れな聲振り搾り、一旦かうは嘯鳴つたが、不思議や、再び力が湧いて、がばと跳ね起き、えいやつと、ベッドの手摺を躍り越え、有合ふ得物を握り緊め、甲板指して一目散。

## 二、武器を執れえ。武器を執れえ

沈没ではなかつた。到着したのだ。  
ズアアブ號は、入江に入つてゐた。綺麗な入江で、水は深く、青黒い。景色はいゝが、ひつそりかんとして、不吉な事でもありさうな、こはい位の淋しい眺めだ。真正面に見えるのは、白い町と呼ばれるアルヂエで、小山の天邊から、海の際まで、段々下りに、ぎつしりたて込んだ、どんよりと白い、小さい家だ。この小山、ムウドンの山の上に、洗濯物を並べたやうだ。その又上は、大空一面、青い縞子を張つたやう。その青いこと、青いこと……

先刻の吃驚仰天から、多少は癒つたタルタランさんは、モンテネグロの公爵様のお傍に立つて、畏れ多くも公爵様御親ら、町のあちこちを指して、あれはカスパア、これは山手、あそこがバブ・アズウン通など、説明して下さるのを、恭しく謹聴しながら、あたりを眺めた。モンテネグロの公爵様は、やんごとないお生れながら、アルヂエリアの國の隅々まで御存じで、流暢な亞刺比亞語をお使ひになつた。やがて、タルタランさんは、改めて、以後お見知り置き下さるやう、とお願ひに出ようとすると……その途端、二人が寄りかゝつてゐた船縁に、あつちの端から、こつちの端まで、眞黒い、でかい手が、によき／＼出て、外側から船縁に引懸つた。それと同時に、タルタランさんの眼の前にひどい縮れ毛の黒奴頭が、ぬつと出たから、驚いた。思はず、あつと言はうとすると、口開く暇もあらばこそ、四方八方、前後左右、ばら／＼と現れしは、百人餘りの海賊で、黒い奴やら、黄いろい奴、半裸體の荒くれ男、穢らしいやら、物凄いやら。

これなる海賊どもこそは、タルタランさん先刻御承知……これぞ、所謂「奴等」であつた。タラスコンの横町で、幾夜幾晩探しに探した、その名に高い「奴等」であつた。さては「奴等」も心を決めて、今ぞ、現れ出でたるか。  
……先づ最初、驚き慌て、釘附になつた。なれども、素早い海賊どもが、積んだ荷物に走り寄り、覆ひの合羽をひんめくり、船中に入る處に掠奪を行はんとするや、それと見るより、英雄の血は湧



いて、手練の獵刀、すらりと抜き、

「武器を執れ。武器を執れ」

と、船客に聲を掛け、我に續けと眞先に、海賊目蒐けて、斬込んだり。

「クス・アコ。どうした。どうしました」

と言つたのは、バルバツスウ船長で、中甲板から駈出して來た。

「やあ、船長さん、い、所へ……早く、早く、船員どもに、武器を執らして」

「なにを、御冗談。何故ですかい」

「何故とは、あんた、あれが見えんか」

「あれとは、何ちやい……」

「其處にある……眼の前に……海賊が……」

バルバツスウ船長は、膽を潰して、タルタランさんを見た。丁度その時、雲突くばかり大男の黒ん

ぼが、二人の前を走つて過ぎたが、その背負つたるものこそは、わが英雄の藥箱。

「この野郎……逃しはせんぞ……」

と吼えたのは、わがタラスコンの大英雄、白刃かざして、まつしぐら……

行かんとするを、バルバツスウ、その帶取つて、引留めた。

「これさ、これさ。何が何でも、まあ、落着いて……あれは海賊ぢやありません……海賊なんか、とつくの昔に、あなくなりましたよ……あれは、荷擔ぎ人足ですよ」

「人足か……」

「正に左様。陸へ運ぶ荷物を取りに來たもんです……どうぞ一つ、その物騒な拔身なんぞお納め願ひ

たいですな。それから、切符は、こちらへ頂戴致します。この黒奴の後へ跟いておいでなさい。何で

も出來る大した奴で、無事に陸まで、お伴もするし、お望みとあらば、ホテルまで御案内も……」

そこで、タルタランさんは、一寸てれたが、慌て、切符を渡してから、黒奴の後に跟いて行き、船

へ横付けになつて、ゆらくしてある、でかい傳馬船に乗込んだ。お荷物は、もう積んである。行李

も、武器のトランクも、食料品の罐詰も、すつかり揃つてゐたはい、が、それで傳馬は一杯だから、

外に一人も乗れたものでない。例の黒奴は、行李に攀ち登り、膝を抱いて、猿のやうな恰好で蹲つ

た。もう一人の黒奴が、やつしくと漕ぎ出して……この二人が、タルタランさんの方を見て、にや

にや笑ふと、眞白い齒が剥出しになつた。

タラスコンの英雄は、すつくと艦に仁王立、嘗て恐怖の的になつた、かの物凄き、尖り口の顔附

で、碎けよとばかり、愛刀の柄を握つてゐた。それといふのは……あのバルバツスウさんが、先刻あ

んなことを言つたもの、この黒檀のやうな肌をした人足共の心の中は、半分だつて信用出來ない。



人足、人足といふけれど、あの使ひ好い、タラスコンの河岸人足とは、似ても似付かん變な……  
五分の後、傳馬船は陸に着いて、わがタルタランさんの踏んだのは、バルバリヤ地方の關門たる極く小つぼけな波止場だが、この波止場こそ、三百年前、ミグエル・セルヴンテスと呼ばれる、西班牙人の罪人が、アルヂエリア人の看守が振ふ棒の下、苦役の船漕を遣りながら、ドン・キホオテ物語といふ、素晴らしい小説の腹案を始めたところだ。

### 三、セルヴンテスよ、靈あらば聽け

#### 御上陸

「どろこ」人は何處にゐる

「どろこ」人なんか、てんでゐない

#### 幻滅の悲哀

世間の人の話によると、昔々えらい人が住んだ場所には、幾千年の後までも、何物か其處の空中

に、さまよひ、漂ふものだといふが、こいつが若しも本當だと、あゝ、ミグエル・セルヴンテス・サアエドドラよ、卿の魂はこのバルバリヤの海岸に残つてゐて、今しも、タラスコンのタルタランさん、生粹の南佛人で、その一身に、卿の小説の主人公を二人まで、ドンキ・ホオテとサンチヨ・パンサを、兼ね備へたるこの人が、御上陸の有様を見て、驚喜亂舞を禁じ得ないだらう……  
當日は中々暑かつた。波止場は一杯陽を浴びて、其處にあるのは、五六人の税關吏、佛蘭西から何か新しい便りでもないか、と待つてゐるアルヂエリア人、長いパイプで煙草を吸つて、胡坐をかいたモオル人、でかい網を手繰つてゐる、マルタ生れの船頭なんかで、その網の目には無数の鱗が引懸つて、小さい銀貨のやうに光つてゐる。

いとも長閑なるこの光景は、タルタランさんの足が地に付くが早いか、俄然一變、活氣を呈した。船中の海賊より、もつと薄穢い野蠻人の一隊が、小石だらけの波打際から、それつとばかり、上陸したお客さん目蒐けて、飛びかゝつたからだ。ひよる長い亞刺比亞人は、素裸の上に、たつた一枚毛布を引掛け、ちびのモオル人は襪樓を吊下げ、黒奴がある、チユニス人がある。マホネエ人や、ムザビト人もある。宿屋の客引きは白い上つ張を着てゐる。この總勢が、唳鳴り、喚き、お召物を引摺むやら、喧嘩しながら、お荷物をお一人は鐘詰のつゝみ、一人は藥箱、といふ工合に擔ぐやら、何とも、かんと意味の分らん言葉を並べたり、嚙付くやうに唳鳴るのは、ありさうもない宿屋の、奇妙な名



前……

この大騒ぎにおつ魂消て、可哀さうなはタルタランさん。あつちへ行つたり、こつちへ行つたり。こらつと言つたり、ぎやつと言つたり、こけつ、轉びつ、荷物の跡を追蒐けたり。この野蠻人どもに、なんとか話が分らせようと、知つてある限りの言葉を使つて、長つたらしい演説をやつた。先づ佛蘭西語で、次はプロヴンス語、おまけにもう一つ、羅典語で、といふと、仲々學者らしいが、實は教科書仕込のやつで、しかも覚えてゐるのは、たつた一行、ロオザ、薔薇、ボヌヌ、ボナ、ボヌムといふだけの羅典語で、頼りないこと夥しいが、何かの足しにと遣つつけた……

搔き口説いても、その甲斐なし。聞く耳持たぬ、野蠻人……時しも折よく現れたは、汚れ腐つたカラをした、何かの制服を着た小男で、長いステッキを振廻し、群集の中へ割つて入つたその姿は、ホオマア物語の神様かとも仰がれた。その打振る棒に恐れ、下民どもは逃散つたが、これぞ、アルヂエ市の巡査であつた。これがタルタランさんに向ふと、とても鄭重に、宿屋は歐羅巴ホテルが宜しう御座いませうと言つて、そこらに遊ぶ子供に命じて、御案内をさせるやら、あの澤山のお荷物を、數臺の車に載せるやら。

タルスコンのタルタランさんは、アルヂエの町に一步足を踏み込むと、思はず驚きの眼を睜つた。抑々、かねて想像したのは、近東風な、幻想的な、神話にあるやうな不思議な町で、土耳其コニススタンチノオブルの町と、亞弗利加ザンジバルの町のあひのこだらうと……それがどうだ、タルスコンの町とそっくりだ……カフェがある。レストランがある。大通もあるし、四階建の家もある。一寸した廣場なんか、割栗石を敷きつめて、軍樂隊が演奏するのは、オッフエンパツハのボルカではないか。男はカフェの前に椅子を持出し、軽い菓子を肴に麥酒の満を引く。女はと見ると、時々、商賣女らしいのも遣つてくる。それから、軍人、又、軍人……といふ風に、いろんな人が遣つてくるが、どるこ人だけは一人も來ない。タルタランさんの外、一人もゐない……そこで、廣場を突切る時は、流石に少し氣まりが悪かつた。誰も彼も、こつちを見る。軍樂隊はびたりと止め、オッフエンパツハのボルカが途切れたから、踊半に足を揚げたまんま、といふ恰好になつた。

この群集の眞中を、のつし〜と行くタルタランさんは、二挺の鐵砲肩にかけ、ピストル腰にぶらさげて、ロビンソン・クルウソオさながらの、凄惨な威儀を正して、まことに立派なものであつたが、宿屋に着くと、がっかり、げつそり、總身の力が脱けてしまつた。頭の中にこんぐらがつたのは、タルスコンの御出發、マルセイユ港、船の旅、モンテネグロの公爵様、海賊の奴原なんかのことでも、もやく〜霧でもかゝつたやう。……この人を部屋に擔ぎ上げ、武装を解いて、着物を脱せる……と騒ぎ立つ中にも、心利いたる人なんぞは、早く醫者を、と言つたりした。ところが、枕に着かせる時、忽ちのうちに、大英雄は、雷の如き軒を立て、さも氣持が好ささうに、寢込んだもので、宿屋の



主人も、これは醫學の助けを借りるまでもない、と判断を下して、附添ひ一同、鳴りを靜めて引き下った。

#### 四、いよく狩にお出かけた

市役所の時計臺から、三時が打つと、タルタランさんは眼を覺ました。昨日は宵も夜も寢通して、今日も午前中をたつぷりと、午後もこれだけ寢てしまった。言ふまでもないが、この三日間に、土耳古帽の艱難辛苦は……

眼を開いた英雄が、先づ第一に思つたのは、

「獅子住める國へ来た」

といふことであつたが、それは、とりも直さず、獅子が直ぐの近くの、二足ぐらゐの處にある、直ぐ手の届く處にある、と思つたことであり、いよく戦はねばならん、と思つたものだから、背中へ水を掛けられたやう、ぶる／＼と顫へ上つて、布團の中へもぐり込んだが、こいつばかりは實に威勢が好かつた。

ところが、次の瞬間に、外の賑かさは聞えてくるし、空はあくまで青いのだし、射込む日光は明る  
いし、寢床へ運ばせた飯は、中々うまいし、でつかい窓から、海が見渡せるし、クレシヤ産の上等の葡萄酒一本が、そろ／＼效目を現してくるし、忽ち、この人の體中に、英雄の血が蘇へつた。

「獅子を。獅子を」

と呶鳴るや否や、布團をぱつと投飛ばし、手早く着物を着たものだ。

この時の計畫は、次のやうなことであつた。

誰にも言はず、町を出て、沙漠の眞中へ行つて、夜を待つ。獲物の來るのを待伏して、獅子が遣つて來たら、いきなり、どをん、どをん……それから、明日、歐羅巴ホテルに歸つて、朝飯を食ひながら、アルヂエリア人からお芽出度を言はれて、獅子を運ぶための荷車を雇ふ。

大急ぎに武装した。脊中にしつかと括つたのは、携帶天幕の一揃ひで、その太い柱と來たら、頭の上へ二尺も突き出してゐたから、タルタランさんは、杭のやうにしやちこ張つて、通りへそろ／＼下りて行つた。通りへ出ると、一切道を訊かなかつた。下手に訊くと、計畫を悟られる虞れがある、といふ譯で、何でも構はず、無茶苦茶に、右へ／＼と曲つて行く。すると、バブ・アズウン大通りに入り込んだが、此處に立竝ぶ眞暗い店の奥には、アルヂエリア生れの猶太人どもが、蜘蛛のやうに隅へ平張りつきながら、タルタランさんの通るのを、薄氣味悪い眼附で、じろ／＼眺めた。芝居小屋のある廣場を横切つて、やがて、すつかり郊外に出て、ムスタファアへ行く、埃つばい、だ／＼つ廣い街道へ



出た。

この道は、とてもひどい混雑だ。乗合馬車、辻馬車、ナポリ風の車、大荷車、牡牛二三頭が牽く乾草を積んだ車、亞弗利加獵兵の騎兵中隊、顯微鏡でないと、見えないやうな、小つぼけな驢馬の夥しい群、麩麵菓子を賣る黒んぼ女、アルサス州から移民の馬車、眞赤な外套の土耳其騎兵、かういつたものがぞろ／＼と、埃の渦の中を、叫びと歌と喇叭の響に包まれて、見すばらしい小屋の二列の間を、向うへ行く。その小屋はと見れば、肥つたマホネエ女が、家の前で、お化粧してゐたり、兵隊が一杯の居酒屋があつたり、肉屋がある、皮剥屋がある……

えらいタルタランさんの思ふには、

「人から聞いた話によると、東洋だ、東洋だと、如何にも物珍しさうに言はれたが、何のこつちやい。どるこ人が、てんでゐない。マルセイユ程も、居やあしなない」

この時、突然、すぐ傍を、長い脚をぐい／＼伸ばし、七面鳥のやうに威張りながら、でかい駱駝が通つて行つた。これを見ると、タルタランさんの胸は、どき／＼せざるを得なかつた。

駱駝がある。してみると、獅子も遠くはあるまい。案に違はず、五分の後には、此方へどし／＼遣つてくるのが、鐵砲擔いだ獵師の一隊、獅子の狩人だ。

この一隊を遣り過しながら、わが大英雄の思へらく、

「卑怯な奴等だなあ。臆病至極、卑怯千萬。獅子に向ふのに、隊を組んで、しかも犬まで連れてゐやがる……」

かう思つたのも無理はない。何しろ由來、アルヂエリアの狩人が獅子でない獲物を狙ふなどは、一度たりとも想像しなかつた、タルタランさんだ。

狩人の様子を見ると、隠居した商人としか見えない、人の好きさうな顔附だ。狩の支度にしてからが、犬を連れたり、獵囊を下げたり、あんまり淳朴過ぎる恰好だ。不審を起した、タラスコンの英雄は、狩人のうちの一人に近寄つてみた。

「時に、如何ですか、獵の獲物は」

「悪くはありませんよ」

と、その人は言つたものだが、わがタラスコンの英雄の、物々しい身支度を見て、鳩が豆鐵砲でも喰つたやうな顔をした。

「遣つつけましたか」

「いや、その……悪くはありません……まあ、御覽下さい」

と、アルヂエリアの狩人は、獲物囊を差出したが、見ると、兎や鵝で一杯。

「何です、こいつは。こんなものを、大事さうに、袋へ入れるんですか」



「ぢや、何處へ入れたら、いゝんです」

「それは、その……兎に角、こいつは小さ過ぎる獲物ですな」

「小さくても、うんと肥つてゐますからね」

と、狩人はやり返した。早く家へ歸りたいので、急ぎ足に、友達の跡を追蒐けた。

大膽不敵のタルタランさんは、たゞ呆然と、道の真中に突つ立つた。……や、あつて、ふと思ひ返したのは、

「何ぢやい。狩人ぶつて、えらさうな口を利きながら、その實、一匹も仕留めなかつたんぢや……」

といふことで、こちらはこちらと、目を反らし、どん／＼先へ進んだものだ。

段々家が少くなり、通行人も少くなつた。夜になり始めて、何が何やら、見當もつかない……タルタランのタルタランさんは、それから、約半時間歩いた。そして、止まつた……もうとつぷりと暗くなつた。月のない暗夜、散らばつた星。人つ子一人通らない……

元來が血の廻りのいゝ人だから、わが英雄は氣がついた。獅子は乗合馬車ではない。廣い道ばつかり通りはしない。かう思つたので、畑へ踏込んだ。……一足毎に、溝だ、茨だ、叢だ。何のこれしき、ぐん／＼歩いた……

ところが、突然、おつと待つた。

「臭いぞ、臭いぞ、この邊は。獅子の匂がぶん／＼しやがる」

大英雄はかう思つて、右を嗅いだり、左を嗅いだり、しきりに鼻をひこつかせた。

### 五、どをん、どをん

あたりは荒果てた大沙漠。不思議な恰好の植物が、によき／＼と突立つてゐる。この東洋の植物は、猛惡な獸のやうな恰好だ。その草木は、臙々した星の光に照らされて、物凄く大きな影を、地上の四方八方へ投げてゐる。右の方を見てあれば、形はつきりと分らないが、どつしり構へた山がある。音に聞くアトラス山は、これかも知れない……左の方から轟くのは、海は見えないが、恐ろしい潮の響……野獸が巢を作るのに、これほど究竟な場所があらうか……

鐵砲一挺を前に置いて、もう一挺を手に持つて、タルタランさんは、片膝衝いて折敷の構へ、いざ來い來れと待受けて……一時間……二時間……待てど暮せど……何にも來ない……

時に思ひ出した。讀み耽つた本によると、獅子狩の名人は、狩に行く時、いつも必ず、小さな仔山羊を連れて行つて、それを五六歩の前に繋いで、足を時々糸で引張つて啼かせたものださうだ。ところが、わがタルタランの英雄は、仔山羊なんぞ連れて來なかつたから、その啼聲の眞似をしようと



つた。そこで、早速、顫へる聲で啼き始めた。

「めえ。めえ……」

最初は極く小さな聲であつた。といふのは、心の奥底に、この聲を獅子に聞かれては困る、といふ心配があつたからだ。……やがて、何にも来ない様子なので、もう少し大きい聲で啼いた。

「めえ……めえ……」

相變らず、何にも来ない。業を煮やして、タルタランさんは、うんと啼いた。何遍でもぶつ續けに啼いた。

「めえ……めえ……めえ……」

猛烈な勢で啼立てたから、仔山羊ではなく、牡牛の吠えるやうな聲になつた……

突然、五六歩前に現れたのは、眞黒な獣の、でかい姿だ。タルタランさんは黙つてしまつた……獣は屈み込んで、ふん／＼鼻を鳴らして地面を嗅ぐ。飛び上つたり、轉がつたりしたが、急に向うへ駆け出したかと思ふと、また直ぐ戻つて来て、びたつと止まつた……これぞ、紛ふかたなく、獅子……今やはつきり見えたのは、その短い四足と、恐ろしい頸の恰好と、暗に光る爛々たる、巨大な二つの眼……

「狙へ……打て……」

どをん。どをん。

と遣つてから、後へばつと跳び退り、獵刀握つて身構へたり。

タラスコンの英雄が、狙ひ定めて火蓋を切ると、その直ぐ次に起つたのは、恐ろしい咆哮だ。

「そら、怒つたぞ」

と、タルタランさんは嘯鳴つて、頑丈な兩足をしつかと踏み擴げ、いざ来い、來たれと待受けた。

ところが、獅子先生の怒り方は、どうして／＼大變なもので、タルタランさんに觸らうともせず、猛烈に咆えながら、無茶苦茶な勢で向うへ飛んで行つた。そこで、タルタランさんは、獅子の牝を待つた……獵の本には、ちやんと書いてある。牝が遣られると、牝が懸つてくる……

生憎のことに、牝が来ない。二時間、三時間と待つてゐると、タラスコンの大英雄は、へと／＼に草臥れた。地面は濕つぽく、夜氣は寒い。海からの北風が骨を刺すやうだ。

「夜の明けるまでに、一寝入りしようかな」

とも思つたし、儂麻質斯が起るのも恐いから、携帶天幕の方へ戻つて行つた……ところがどうだ。この携帶天幕と來たら、實にうまい工合の發成品で、どうひねくつても、開いてくれない代物だ。

約一時間、汗水垂らして骨折つたが、天幕の奴はどうしても開かない……讀者諸君も御經驗がお有りだらうが、車軸を流すやうな雨の時に限つて、かういふ風に開いてくれない雨傘があるものだが、



つまり、この天幕は、この雨傘の親類であつた……さて、この一戦に疲れ切つて、タラスコンの英雄は、天幕を地面に抛打つて、ごろりとその上に横になつて、悪口屋のプロウンス人の正體を現して、あらん限りの悪口雑言を吐いたものだ。

「タ、タ、ラ、タ、タラタ……」

——あれは、何ぢやい……

と、タルタランさんは、むつくり跳起き、口走つた。

これは、ムスタファの兵營の、亞弗利加獵兵聯隊の起床喇叭であつた……獅子を殺したタルタランさんは、たゞ呆然として、眼を擦つた……沙漠の真中へ來たとばかり思つてゐたのに……花甘藍の苗床と、砂糖大根の苗床との間にある、朝鮮薊の四角な畑に立つてゐる。

タルタランさんのサハラ沙漠には、野菜が植わつてゐる……その直ぐ傍には、ムスタファ高臺の美しい緑の丘の上に、アルヂエリア風の別荘が、眞白に建ち並んで、今しも昇る太陽の薔薇色の輝きを浴びてゐる。マルセイユの近郊にでも來て、バステイドとかバステドンとか呼ばれる、田舎小屋を見てゐるやうな氣持だ。

この平和に満ちた景色、たつぷり食つて安らかに眠つてゐる都會人のやうな景色を見て、タルタランさんは少からず驚いたが、又一方に、恐ろしく不機嫌になつて、こんなことを心に思つた。

「こゝらの連中は莫迦か氣違ひだ。朝鮮薊を植ゑるのに、ところもあらうに獅子の傍とは……おれの見たのは、夢ではないぞ……確に獅子が此處まで來たんだ……それ、其處に證據がある……」

その證據は、獸が逃げながら、ぼたく、落して行つた血の滴りだ。この血の痕を傳つて、眼を四方に油断なく配つて、ピストル片手に握り緊め、勇ましきタラスコンの大英雄は、朝鮮薊から朝鮮薊と進んで行つて、燕麥の小さな畑に辿り着いた……と、踏みにじられた麥の間に、一つの血の池。その血の池の真中に、頭へ大きな傷を受けて、べつたり仆れてゐる一匹は……さあ、何でせう……

「獅子さ、きまつてゐるさ……」

大違ひ。驢馬ですよ。アルヂエリア地方にざらにある、とても小つぽけな驢馬で、地方の俗にパウリコと呼ばれる奴でした。

## 六、牝が遣つて來た

### 悪戦苦闘

#### 『兎の逢曳の軒』

不運にもわが銃先に懸つた、この獸を見て、タルタランさんの第一に感じたのは、口惜しいといふ



氣持であつた。獅子と驢馬とでは、大變な相違だ……次に感じたのは、可哀さうで堪らないといふ氣持だ。この憐れな驢馬君は、いかにも可愛らしく、いかにも善良さうな様子だ。その腹は、まだ暖かさうで、上つたり下つたり、大波を打つてゐた。タルタランさんは跪いて、アルヂエリア風の帯の先で、可哀さうな驢馬君の血を止めようとした。この大英雄が、この小さな驢馬の介抱をする、といふ光景こそは、何物にも勝つて涙ぐましい光景であつた。

帯の絹が觸ると、ほんのちよつぱり位は未だ生きてゐた驢馬君は、その灰色の大きい眼を開けて、長い耳を二三度動かしたが、それは丁度「有難う……有難う……」とでも言ふやうであつた。その次に、頭の中から尻尾までを、びりりと痺撃させて、それつきり動かなくなつた。

「黒よ。黒よ」

だしぬけに、かう呶鳴つたのは、咽喉を締められてでもあるやうな、苦しきやうな聲だ。同時に、すぐ傍の林の中で、枝が動いてがさくつと言つた……タルタランさんは、起上る隙もない、身構へる暇もない……牝が來たのだ。

正に遣つて來た。恐ろしい形相で、眞赤になつた婆さんだ。アルサス州生れの婆さんで、髪を布で包んで、その兩端を頭の下で結んでゐる。赤い傘を振廻して、驢馬を返せと喚き立てたが、その聲はムスタファの山々に飮して、物凄いと何とも譬へやうが無い。タルタランさんにとつては、この性

悪な婆さんを相手にするよりも、怒り狂ふ牝獅子を相手にした方が、餘程有難かつたらう……言葉を盡して、事の成行を説明したが、婆さんははてんで聞入れない。この黒君を獅子と間違へたのだ、といふと、婆さんが怒つたの、怒らないの……この期に及んで、冗談を言ふとは、人を莫迦にするにも程があるとはばかり、素晴らしい大聲で「こん畜生」と言ふなり、わが大英雄に向つて傘を振つての滅多打だ。面喰つたタルタランさんは、一生懸命、鐵砲で受け留め、受け留め、汗をかいて、はあく言つて、こけつ轉びつ、聲振擗つて、

「まあ、まあ、奥さん……まあ、まあ、奥さん……」

ところが、この奥さんは聳たと見えて、遮二無二打つて懸るその勢が、益々ひどくなるばかりであつた。

幸ひにも、この戰場へ第三者が現れた。それは、アルサス女の夫で、矢張りアルサス生れの男で、居酒屋の亭主で、錢勘定のうまい人であつた。事の次第を早速見て取つて、驢馬を殺したタルタランさんが、その代金を拂ふつもりらしい、と見るや、女房の武器を取り上げて、示談の交渉を始めたものだ。

タルタランさんは二百フラン拂つたが、こんな驢馬などは、亞刺比亞人の市場へ行けば、十フラン位で買へる。さて、愈々示談となつてから、可哀さうな黒君を無花果の木の下に埋めた。アルサス男



は、タラスコン男の渡した銀貨を見て、ほく／＼ものに悦んで、わが大英雄に勸めるには、わしの店で朝飯をおやりになつては如何ですか、と言つた。その居酒屋は、此處からわづか五六歩の所で、街道に沿つてあるのださうだ。タルタランさんは承知した。

道々の亭主の話によると、日曜のたんび、アルヂエリアの狩人連中が、この店へ書飯を食ひにくるが、それといふのも、こゝらあたりは、實に獲物の多い野原で、兎の獵にかけては、町の二哩四方で、此處ほど好い場所はない、といふことであつたから、タルタランさんは直ぐ訊いた。

「獅子はどうですか」

アルサス男はタルタランさんを見詰めた。とても吃驚した調子で、

「獅子ですつて」

「左様。獅子ですよ……あんたは見たことがありますか」

と再び訊いたタルタランさんの調子は、もう、ひどく頼り無ささうになつてゐた。

居酒屋の亭主は、わつはつはと笑ひ出した。

「いやあ……獅子ですか……獅子をどうするんですかい……」

「アルヂエリアには居ないので……」

「居ませんとも。わしは一週も見たことがありません……二十年も住んでゐますがね。それはさう

と、何時か誰かに聞いたことがありません……いや、新聞で見たのかも知れませんが……兎に角、かうですよ。すつと遠く、南部へ下つて行くと、あるさうですが……」

話が此處まで来た時、丁度居酒屋に着いた。グンズとか、バンタンとかの田舎町で、よく見掛けるやうな、町はづれの居酒屋だ。戸口の上には枯れた小枝がかぶさつて、戸口の脇には撞球のキユウがぶつ違へに描いてあり、その上の方を見ると、屋根の近くに、大きく看板が出てゐる。

「兎の逢曳き軒」

兎の逢曳き。これを見て、タルタランさんは、自分のことをラバンだ、勇氣のある人だ、と言つて呉れたブラギダ隊長さんを思ひ出した。

## 七、乗合馬車と、モオル女と、素馨の花を繫いだ念珠との話

第一回の冒険が、かういふことになつたのでは、閉口垂れる人が世間には多いものだが、タルタランさんのやうな底力のある人になると、これつぼつちで參ることはない。

わが英雄の思へらく、

「獅子は南部にある。ようし、おれは、南部へ行かう」



麵麩の最後の一片を頬張ると、タルタランさんは立ち上つた。亭主に禮を言つて、あの婆さんには、例の事は水に流して、快い別れの挨拶をした。不仕合せな黒君のため、もう一度涙を濺いだ。大急ぎでアルヂエ市に取つて返すことになつたが、心中堅く決心したのは、直様行李を纏めて、今日にも南部へ出發しよう、といふことであつた。

此處に面白くない話といふのは、今朝のムスタファ街道は、昨夜に比べて、道程が長くなつたらしい。何しろ、どうも、太陽が照り付ける、埃が立つ、携帶天幕が重荷となる……そこで、流石のタルタランさんも、アルヂエの町まで、歩いて行く元氣は無くなつたから、乗合馬車が通り掛ると、いきなり呼び止めて、乗り込んだ……

嗚呼、可哀さうなは、タラスコンのタルタラン。その赫々たる名譽のためには、こんながた馬車に乘らないで、てく／＼道を歩いた方が好かつた。よしんば、太陽に照り付けられ、携帶天幕と、二挺の旋條銃の重さにうん／＼呻つて、窒息しさうになつたとしても、歩いた方が、この大英雄の名譽を救ふ所以であつたが……

タルタランさんが中へ入ると、乗合馬車は満員だ。すつと奥に、鼻を祈禱書に押つ付けてゐるのは、眞黒な長い髭の、アルヂエ市の副牧師だ。その向ひに坐つてゐるのは、モオル人の若い商人で、無暗に長い巻煙草をぶか／＼やつて、それから、マルタ生れの水夫が一人と、モオル女が四五人ゐる。

この女達は、眞白いリンネルを顔に掛けて、眼だけ出してゐる。見受けるところ、アブド・エル・カデルのお墓に詣つて来たものらしいが、お墓に詣つても氣分は陰氣にならないと見えて、白い面紗の下で、饅頭菓子をむちやく／＼食べながら、笑つたり、おしゃべりしたりする聲が聞えた。

タルタランさんは、自分がこの女達に見られてゐる、といふことに氣がついた。女達の中でも特に、眞向ひに坐つた女は、タルタランさんの眼をぢいつと見詰めて、その眼が動く、跡を追つたものだ。面紗を掛けた女達だが、面紗に隠されてゐない黒い大きな眼は、縁に墨の粉を塗つて、一層大きく長い眼に見えるから、その眼が生々してはゐるし、時々面紗の間から出る、可愛らしい、よく手入れの届いた手首には、金の輪が嵌つて、ちら／＼光るし、話し聲は得も言はれぬ好い響きだし、頭の動きは優美を極めて、子供のやうな無邪氣さのこともあるし、何を見ても、何を聞いても、面紗の下には、若い、美しい、嘆賞すべきものがひそんでゐる、としか思はれなかつた……タルタランさんは、可哀さうに、じろ／＼見られて氣まりが悪くなつた。穴へでも入りたいが、隠れる所は何處にもない。近東の女の美しい眼が、無言のうちに愛撫を續けてくれるのだから、タルタランさんは面喰つた。胸がどき／＼した。死にさうに思つた。體中が熱くなつたり、寒くなつたり……

此處へ持つて来て、ぐつと止めを刺したのは、向ひの女のスリツバのやうな靴だ。狩獵用のでかい長靴の上を、そのスリツバ靴がちよろ／＼と走る。タルタランさんは、はつきり感じた。可愛い小



つちやいスリッパ靴が、ちよろ／＼と走り、びち／＼跳ねて、丁度小さい赤い廿日鼠のやう……ど  
うしたら宜からう。あの眼附、このスリッパ靴に答へればいゝのか知ら。答へたら、その結果が何う  
なるだらう……近東の戀には油断がならない。恐ろしい陰謀があるさうだ……かくして、タルタラン  
さんは、南方人の羅曼的な空想を働かしたから、自分が宦官どもの手に落ちて、首を刎ねられる光景  
やら、皮の袋にぶち込まれて、生命だけは助かつて、頭を横つ腹にくつつけた苦しい恰好で、海の  
上にぶか／＼浮いてゐる有様、なんかんと思ひ浮べた。すると、總身に水を浴びたやうにぞつとした  
……小さいスリッパ靴は、何事かを待ちながら、例の誘惑法を續けてゐる。真正面の二つの眼は、ぐ  
つ大きく開かれて、タルタランさんを見詰めてゐるが、黒天鷲絨で作つた花のやうだ。  
「わたしを摘んで頂戴」

とでも言ひたさうだ。

乗合馬車が止つた。芝居小屋のある廣場だ。バブ・アズウン通りの入口だ。モオル女達は一人々々  
下りた。だぶ／＼のズボンを足に絡ませる。面纱を引緊める動作は少々荒つぽいが、却つて未開人ら  
しい美しさがある。タルタランさんの隣にゐた女が、最後に下りた。立上りざま、顔をすり寄せたも  
のだから、わが大英雄は、女の息吹きをさつと感じた。それは正しく、若さと、素馨と、麝香と、饅  
頭菓子とを一緒にした、一つの花束だ。

タルスコンの英雄は、もはや我慢が出来なくなつた。愛情に酔ひ、何事にも恐れず、モオル女の跡  
から、飛んで出た……革具のがさ／＼いふ物音に、女はひよいと振り向いたが、「しつ」とでも言ふや  
うに、面纱の上へ指を當てた。もう片つぽの手で、勢よく、投げて寄越したのは、香料を透ませた  
小さい念珠で、素馨の花を繫げたものだ。これを拾はうと、タルスコンのタルタランさんは身を屈め  
た。ところが、少し肥つちよ過ぎてゐるお體の上に、物々しい武装が多過ぎるから、中々おいそれと  
は拾へない……

漸くにして立上り、素馨の念珠を心臓に押し當て、ぐつと氣取ると——モオル女の姿は消え失せて  
ゐた。

## 八、アトラス山の獅子よ、安らかに眠れかし

アトラス山の獅子諸氏よ。眠つてゐるがいゝ。蘆薈や仙人掌の奥の洞窟に、安らかに眠るがいゝ。  
……まだ／＼當分のうちは、タルスコンのタルタランさんが、諸氏を征伐には行かないだらうから。  
何しろ、今のところ、タルタランさんのお道具は、鐵砲のトランクでも、藥箱でも、携帶天幕でも、  
食料品の罐詰でも、一切合財たたくと、歐羅巴ホテルは三十六號室の片隅に、積上げられてゐる始



末だ。

赤毛の大獅子諸氏よ。平然と眠つてゐるがい。タラスコンの英雄は、あのモオル女を探していらつしやる。乗合馬車の一件以来、足の上にしよつちう何か載つてゐるやうだ。山野を跋涉する狩人にふさはしい、でかい御足の上に、小さい赤い二十日鼠が、ちよろ／＼と走り廻る。海からの北風が肩に觸れると、その度、いつも香しい匂がする。饅頭菓子と茴香の甘つたるい戀の匂が。

戀しい、慕はしいモオル女。

どうしても探し出さうと思つたが、これは中々樂ではない。人口十萬の都會に於いて、息吹きと、スリッパ靴と、眼の色と、たつたこれだけを頼りにして、女を見付け出さうとするのは、戀に悶えたタラスコン男でない、普通一寸取掛かれない大事業だ。

厄介千萬なことには、眞白な大きい面纱をかぶつてゐると、どのモオル女も同じに見える。おまけに、ちよいと身分のいゝ女は、殆ど外出しない。さういふ女を是非見たいと思つたら、山手へ行かねばならん。山手は、亞刺比亞人の町だ。「どるこ」人の町だ。

この山手ときたら、いやはや大變な危険な場所だ。晝なほ暗き、狭つ苦しい小路が、うね／＼と曲つて、上つて行く。兩側に立並ぶのは、何かの祕密を藏してゐるらしい家ばかりで、その屋根が重なり合つて、トンネルを作つてゐる。戸口は低い。窓は思ひ切つて小さく、ひつそりかんとして、陰氣

くさく、格子が嵌つてゐる。右を見ても、左を見ても、いやに暗い小つぼけな店がうちや／＼あつて、其處にゐるのは、海賊のやうな凄い面相の「どるこ」人どもだ。眼と齒を白く光らせて、長いパイプで煙草を吸ふ。低い聲で話をするが、悪事の相談にきまつてゐる……

かゝる恐ろしき町を、タルタランさんがお通りになつて、何等の氣持も起らなかつた、と僕が言つたなら、僕はひどい諷吐きだ。何等の氣持が起らないどころか、タルタランさんは、とても／＼、心配した。薄暗い小路を通る時、そのでつかいお腹が小路一杯になつたりしたが、この大英雄は油断も隙も見せなかつた。四方八方に眼を配り、ピストルの引金に指を掛けてゐた。すべて、タラスコンの町に於いて、俱樂部へお出かけの時と同様だ。一瞬間たりとも忘れなかつたのは、今にも後から、宦官や暗殺者が飛び懸るのではないか、といふことであつたが、戀しい女に逢ふためと思へば、この恐ろしさも堪へ忍んで、タルタランさんには、巨人の如き力が湧いた。

八日間といふもの、わが大膽不敵のタルタランさんは、この恐ろしい山手にへばり付いてゐた。そのお姿は、或る時はモオル人の錢湯の前に立ち通して、女がぞろ／＼出てくるのを待つてゐた。湯歸りの女は、出ると直ぐ體を一寸ゆすつて、お湯の匂をあたりに撒いた。或る時は又、タルタランさんは、回々教のお寺の前にしやがみ込んで、この聖域の中へ入るため、でつかい長靴を脱がうとして、汗をかいたり、息を切らしたりしてゐた……



また、或る時は、お風呂屋でも、お寺でも、何にも收穫がなかつたので、悲しみを抱いて歸る日の暮れがた、タラスコンの英雄は、モオル人の家の前に佇んで、單調な歌や、ギターのしめやかな響きや、バスケット地方の太鼓のどんく〜い音などに耳を傾けたが、女の笑ひ聲が濕つぽく聞えると、はつとばかりに、胸を轟かせた。

「女はきつと彼處にゐる」

と獨り言をいつた。

その時、町に人通りがないと見るや、とある一軒に近寄つて、下水の穴のやうな低い戸口で、重い槌をやつこらさと取つて、遠慮しながら、扉を叩いた……すると、歌も笑ひも、はたと止んで、中から聞えるのは、たゞ、ぼそ〜何か言ふさ、やきだけだ。鳥籠の中に眠つてゐる鳥が、時々音をさせるやうな調子だ。

英雄は考へた……

「用心しなければならんぞ。おれに何かするのだぞ」

この人に向つてされたことで、何が一番多くされたかといふと、頭の上からざんぶりと、冷たい水の大甕一杯を浴びせることや、オレンヂの皮や、腐つた無花果を、ぐしやりと投付けることなどで……大したことは一度もなかつた……

アトラス山の獅子諸氏よ。安らかに眠り給へ。

## 九、モンテネグロのグレゴリイ公爵

たつぶり二週間、可哀さうなタルタランさんは、戀しい女を探しあぐんだ。一體ならば、もつと長い間探すところであつたが、戀人に恵みを垂れ給ふ女神様が、モンテネグロの貴族の形をとつて、お助けにおいで下さつた。ことの次第は次の通り。

冬になると、毎土曜日の晩、アルヂエ市の大劇場では、假面舞踏會が催はされて、巴里のオペラ座にも劣らぬ盛況だ。とはいふものゝ、舞踏會としては、餘りにも殺風景な、田舎くさいものであつた。肝腎の大廣間には、ほんのちよつぱりしか人がゐない。巴里の本場をちよいと覗いて來ただけの男や、軍服姿にあこがれる娘たちや、流行遅れの氣障な紳士や、荷揚人足に假装してはゐるが、本當に零落した人とはか見えな、みすばらしい男や、マホネエ生れの小娘の洗濯女ぐらゐなものだ。この小娘たちと來ると、ほんのたつた今、自墮落になり始めたらしく、その眞面目時代の香りが、葎やサフラン・ソオスなどの匂が、いまだにぶんく〜してゐる……

大廣間はこんな工合で、本當に壯觀とはいへないが、休憩室こそ、素晴らしい賑ひだ。今夜だけ、



賭博場になつてゐる休憩室で、緑の布を掛けた、長い机の周囲には、様々な肌の色の人間が熱狂しきつて、押し合ひ、へし合ひの大盛況だ。外出許可を貰つたアルヂエリア狙撃兵は、給料のどかい銅貨を、威勢よく賭ける。山手のモオル人の商人がある。黒んぼがある。マルタ生れの男がある。四十二哩の山奥から出て来たお百姓なんぞは、鋤を賣つたお金や、牡牛二頭の代金を、何かの「一」に思ひ切つて賭ける……皆ふるへて、青くなつてゐる。齒を喰ひ縛つて、血走つた眼附だ。博奕打の常として、いつも同じの骨牌を睨むから、藪睨みになつた、奇妙な眼附だ。

向うに見えるのは、アルヂエリアに住む猶太人の一團で、これは一家族揃つて、博奕をやりに来たものだ。男は無暗に飾り立てた東洋風の衣裳で、青い靴下に、天鵞絨の帽子だ。女は青白い顔色で、體が膨れたやうに肥り返つて、金の胸當を堅く締めてゐるから、すべての動作がぎこちない……かういふ一家族が一團になつて、テエブルの周囲に塊まつて、があく／＼唵鳴つて相談する。指折り數へてから、ほんの僅の金を賭ける。長い／＼會議が終ると、父なる神のやうな、立派な髻を生やした長老が、この群からつと離れて、一家の議決による西班牙銀貨を、ふるへる手附で賭けて見る……すると、勝負が續く間中、ヘブライ民族の輝ける眼は、テエブルの上に着いと注がれる。その黒い眼は、眞黒な磁石のやうだ。緑色のテエブル掛の上にある、金貨といふ金貨をびち／＼跳らせて、やがて、糸で引張るやうにして、こつちへそろ／＼引寄せるとは知らないか知ら……

それから、喧嘩だ。毆合ひだ。あらゆる國での悪口の言合ひだ。あらゆる國語で氣が狂つたやうに唵鳴り立てる。短刀を抜く。短刀が何だと打つて懸る。巡查が入つてくる。金が無くなつてゐる……かういふ大騒ぎの場所へ、或る晩ひよつくり現れたのは、餘人ならぬ大英雄、タルタランさんその人だ。胸の苦しさを忘れようと、魂の平和を求めて、遣つて来たのだ。わが英雄は、たゞ一人で、群集の中を揉まれて歩き、只管モオル女を思つてゐると、突然、ある一つのテエブルから、どつと上る喚聲と、金貨のがちや／＼いふ音との間に、激昂した二人の聲が、はつきり聞えた。

「僕の二十フランが足りないんだよ。さう言つたのに、君には分らんのか……」

「君とはなんだ……」

「君と言つたが……どうしていけない……」

「おい、君。君が今話してゐる相手の、僕といふ人間を誰だと思ふ」

「だあれとも思はんね。穿鑿しない方が、君の爲だらう」

「僕は、モンテネグロのグレゴイ公爵だぞ、君……」

この名前を聞いて、はつと思つたのはタルタランさんだ。群集を掻き分けて、最前列にぬつと出た。見れば嬉しや、紛ふかたなき公爵だ。飛脚船の甲板で、はしなくも知遇を辱けなうした、あのモンテネグロ國の公爵様だ。嬉しまぎれに、タルタランさんは、反身になつた……



ところが、お生憎、この貴族の肩書は、タラスコンのお人好しにこそ、大變な利目があつたが、今この公爵が遣り合つてゐる、當の相手の、獵兵士官には、屁とも感じないらしかつた。

「へん。大方そんなことだと思つてゐたよ……」

と、士官は冷笑してから、部屋中をぐるつと見渡して、

「モンテネグロのグレゴリイ……といふお方をどなたか御存じですか……どなたも御存じない」

タルタランさんは、憤然と、一步進み出たものだ。とてもしつかりした聲で、生粹のタラスコン訛りを丸出しで、

「いんにや……わしが知つとるよ。公爵様ぢや……」

その顔に穴が明くほど、獵兵士官は暫く眺めてゐたが、やがて、肩を聳やかして、

「よろしい。それならば……此處に不足の二十フランを、後でいざごぞのないやうに、あいつと君とで分け給へ」

と言ふが早いか、くろりと向直つて、群集の中へ逃込んだ。

憤慨その極に達したタルタランさんは、跡追蒐けて飛込まうとすると、公爵がそれを遮つた。

「打つちやつてお置きなさい……わたしのことは、わたしがしますよ」

と言つて、タラスコンの英雄の腕を執つて、急いでこの場を脱け出した。

廣場へ來ると、モンテネグロのグレゴリイ公爵は帽子を取つた。わが大英雄に手を差出して、挨拶を始めたが、名前をはつきり思ひ出せないで、あやふやな顛へ聲だ。

「やあ、バルバランさん……」

「タルタランですよ」

と言ふのも口のうち。いとも遠慮深い調子だ。

「タルタラン、でも、バルバランでも、どちらでも宜しいが……さあ、これからは、お互ひに、生死を共にする、無二の親友だ」

と言つて、モンテネグロの貴族は、わがタルタランさんの手を、堅く握り緊めた……握られた痛さを忘れ、わがタラスコンの英雄が、どんなに得意になつたかといふことは、讀者諸君の御想像にお任せしよう。

「公爵様……公爵様……」

酔つ拂つたやうになつて、たゞかう繰返すだけであつた。

十五分の後、このお二人連は、鈴懸亭といふ料理屋に陣取つてゐた。實に氣持のいい料亭で、その見晴らし臺は、海の上に出出てゐた。お二人は、露西亞産の立派なサラダをむしやくやり、クレシア産の上等葡萄酒を傾けて、しきりに舊交を温めたものだ。



讀者諸君が如何に空想を働かしても、このモンテネグロの公爵ほど、惚々するやうな人物を、思ひ浮べることはお出来にならないだらう。すらりと背が高い。頭は縮れ毛だ。小さな鍔で焼いた縮れ毛だ。軽石で磨きかけた顔の色艶。胸に燦くのは、見慣れない勳章だ。眼は少しずるさうな、油断のない眼だ。言語動作は、人の機嫌を取ることがうまい。その言葉に、ちよつぱり伊太利らしいところがあるから、それは兎も角、この公爵が羅典語に通じてゐることは、實に驚くべきもので、二言目に思はれる。それは兎も角、この公爵が羅典語に通じてゐることは、實に驚くべきもので、二言目に、タシトスを引用し、ホラアスを論じ、いろんな記録を引合に出した。

古來續いてゐる名家に生れたが、すでに十歳の頃ほひ、自由思想を懐いたのが原因で、兄君達から勸當され、世界中を廻り歩いて、教育を受けたし、快樂も味はつた。かくて、貴族にして、哲學者になつたといふが……何といふ奇妙な取り合せだらう。聞けば、この公爵は、タラスコンにも三年間ゐたといふ話だから、タルタランさんは吃驚して、では、俱樂部だの、お城の前の廣場で、お目にかつたことがありさうなのに、それがないとは不思議千萬、と訝ると、

「あまり外出をしないもので……」

と言ふ公爵様の口振が何となく怪しかつたが、タラスコンの英雄は、失禮と思つたから、重ねては訊ねなかつた。何しろどうも、高貴の方々になると、色々不思議な裏面を持つていらつしやる……

結局ひつくるめて考へると、このグレゴリイ様は、とても素晴らしい公爵様だ。クレシア産の薄紅の葡萄酒を、ちびりくとやりながら、この公爵は、タルタランさんの話を聞いてゐた。モオル女のことを、くどくどとしゃべつたが、公爵は辛抱して聞いた上に、女ならば皆知合だから、早速にも見付け出して上げませう、と萬事飲込んで、受合つた。

葡萄酒の方も、がぶく飲んで、長い間飲んだ。「アルヂエ市の女のため、モンテネグロ國の自由のため」に乾杯した。

外へ出ると、見晴らし臺の下で、海がうねつてゐた。岸打つ波の音は、濕つた布を振ふやうに、ばさばさとして、暗の中に聞えた。空氣は暖かだ。空には星が一杯だ。

鈴懸の間に、鶯が歌つてゐる……

勸定を拂つたのは、勿論、タルタランさんだ。

十、おんみが父上の名を教へ給はれかし、然らば

小生もこの花の名を申上ぐべく候

モンテネグロの公爵は、中々莫迦に出来ないものだ。



鈴懸亭の御宴會があつた、その翌日、まだ薄暗い朝早く、グレゴリー公爵が、タラスコン男の部屋に遣つて来た。

「早く、早く、着物を着給へ……君の女が見付かつた……パイヤといふ名前だ……年は二十、とてもとても美しい。おまけに、君、もう後家さんだよ……」

「後家さんですか……あ、有難い」

と嬉しさうにタルタランさんは言つたが、それは近東諸國の夫なるものを、非常にこはがつてゐたからだ。

「後家は後家だが、兄弟があつて、そいつが嚴重な見張をしてゐる」

「ちえつ。それは困りましたなあ……」

「とても獯猛なモオル人で、オルレアン屋といふ市場で、パイブを賣つてゐる奴だよ……」  
びたりと黙つて、返事がない。

やがて公爵は續けて、

「それはさうと、君などは、それっぽつちの奴に恐がるやうな人ではない。あんな奴、パイブの五六本も買つて遣れば、譯はなく買収が出来るんだから……さあ、さあ、早く、着物を着給へ。さあ、さあ、色男」

蒼ざめた顔、胸はどきどき、愛情に溢れて、タラスコンの英雄は、寢床から飛び起きて、フランネルのズボン下の釦を、大急ぎで嵌めた。

「わたしはどうしたら好いでせう」

「ちよつと一筆、手紙を書くんだよ。逢つてくれと申込むんだよ」

「佛蘭西語を知つてゐるでせうか……」

と訊くタルタランさんの調子は、妙にがっかりしたやうだ。正直一方のこの人は、純粹まじりけ無し近東の女とばかり、想像してゐたからだ。

公爵は、平然として答へて曰く、

「佛蘭西語なんか、ちつとも知らん女だがね。……君がいま、口で言つて見給へ、僕がすぐ翻譯するから」

「それは、公爵様、御親切さまで……」

そこで、タラスコンの英雄は、部屋中をのつしくと歩き廻つた。一口も物を言はず、心を押静めようとしたものだ。

讀者諸君も大抵はお考へになつていらつしやるでせうが、アルヂエ市に住むモオル女への手紙は、ボオケエルの町の女工さんにやる手紙とは、大分趣きが違はなければなりません。



ところが幸ひ、わが大英雄は、いろ／＼な本をうんと讀んだお庇で、ギユスタヴ・エイマアルの小説から、印度の奔放な口調を拜借し、それへラマルチヌの近東旅行記を混ぜたり、うろ覚えの雅歌の調子をくつつけたりして、およそ異國情調たつぷりな手紙を、でつち上げることが出来た。先づ最初、

「砂礫のうちに住む駝鳥の如く……」  
から始まつて、おしまひは

「おんみが父上の名を教へ給はれかし、然らば小生もこの花の名を申上ぐべく候……」

といふ文句にしたから、至極近東風の慣例に従つて、印しの花束をつけて遣りたい、といふのが、羅曼的なタルタランさんの望みであつたが、グレゴリイ公爵の考へは、兄弟からパイプを買つた方がいゝ、その獷猛な性質を和らげることもなるし、女もきつと悦ぶだらう。何しろ煙草好きの女で、といふのであつた。

「では、早く、パイプを買ひに行きませう」

と、タルタランさんが、勢こめて急ぎ立てると、おつとどつこい、公爵は、

「いや、いや……それは、僕が一人で行かう。その方が、安く買へる……」

「あ、公爵様……御足勞が願へるでございますか……これはまあ……」

と恐れ入つた正直者は、この親切な、モンテネグロの公爵に、財布をそつくり手渡しして、どうか女の満足するやうに、計らつて下さいまし、とくれ／＼もお願ひした。

かういふ工合に、最初は宜かつたが、さて、物事は、思ふやうに運ばない。話に聞くと、モオル女は、タルタランさんの名文に感動して、四分の三位は靡いたさうだが、その兄弟がうんと言はないので、女も言出せないで困つてゐるさうだ。そこで、その、うんと言はない兄弟を陥落させるため、パイプをしこたま買込んだ。幾ダアスも、何ダロスも、小さい船なら、何艘にも一杯になる位……

惱めるタルタランさんは、時々、獨り言に、

「あのパイヤの奴、こんな澤山のパイプをどうする積りだ」

と言つたが、けち／＼しないで、どん／＼金を拂つたものだ。

やがて、パイプの山を幾つも買ひ、異國風の詩を竝べ立て、から、やつと、逢へることになつた。讀者諸君に今更僕が言ふまでもないが、タルタランさんの心は躍りに躍つた。用意萬端怠りなく、帽子打の狩人らしいぼさ／＼の髭を、丁寧に刈込んで、油をつけるやら、香水を振るやら……時に忘れなかつたのは、まさかの場合の用心に、棒の先に刃のついたのを一挺と、ピストル二三挺を、ポケットに忍ばせることであつた

いつも親切な公爵は、この第一回の訪問にも、通譯の資格で付添つてくれた。女の住むのは、山手



だ。その門口に、十三四と見えるモオル人の少年が、巻煙草をふかしてゐた。それが即ち、問題の兄弟で、アリ君といふ名前であつた。お二人の訪問客を見ると、少年は槌で扉を叩いて、早速何處かへ引下つた。

戸が明いた。黒んぼ女が現れて、一口も言はないで案内した。狭つ苦しい中庭を通つて、瀟洒な小さい部屋に來ると、其處に女が待つてゐた。低い寢床に、肱をついて横になつて……といふ姿を一目見ると、わがタラスコンの英雄は、おや／＼、これは、乗合馬車のモオル女よりか、少し背が小さく肥つてゐる、果して同じ人間かしら、とは思つたが、この疑ひは、タルタランさんの腦裏を電光の如くに走つただけで、すぐ消え失せてしまつたものだ。

素晴らしい美人であつた。足には何にも履いてゐない。ふつくらした指に指環を一杯嵌めてゐる。薔薇色の顔、伶俐さうな顔。錦で出来た胸當をして、花を撒いた唐草模様を着物で、少しぼつちやり肥え過ぎてゐるが、如何にも可愛い、丸々とした體つきで、一口食べて見たいやう……唇に當て、あるのは、水煙管の琥珀の吸口だ。それから出てくる金色の煙が、女の體をすつかり包んで、後光でも射すやうに見える。

部屋に入ると、タラスコンの英雄は、片手を心臓の邊に當て、出来るだけモオル人風にしようと、熱情に燃える大きな眼を、ぐる／＼と廻しながら、いとも鄭重にお辭儀した。それを眺めたバイヤは、しばらく物を言はなかつた。やがて、琥珀の吸口を唇から離し、いきなり後へひつくり返り、兩手で顔を隠してしまつた。眞白い頸筋だけが見えたが、夢中に笑つてゐるらしく、その頸筋がくつくと動いた。眞珠が一杯の袋を揺すぶつたら、或ひはこんなにも動くかも知れない。

## 十一、シヂ・タルトリ・ベン・タルトリ

もし讀者諸君が、或る晩ぶらりと、山手にあるアルヂエリア人經營のカフェに、お入りにならうものなら、今日でもまだ、モオル人達が、シヂ・タルトリ・ベン・タルトリといふ人のことを、お互ひに妙な目配せをしながら、へんな笑ひ方をしながら、語り草にしてゐるのを、お聞きになるだらう。この人は、まことに好人物のお金持の歐羅巴人で、何年か昔のことになるが、この山手界限に、土地つ兒のバイヤといふ可愛い女と、暮したお人だ。

この問題のタルトリさんは、町の連中に愉快な追憶を残した人だが、これぞ、外ならぬタルタランさん……

何ですか、非難なさる方がおありですか。その非難は、少しひどいでせう。かういふことは、どんな聖者にも、どんな英雄にもありません。盲目となり、ぼんやりして、うかく／＼毎日を送ることは



誰にもあつたものですが、タルタランさんも御多分に洩れず、二箇月といふものは、獅子を忘れ、榮譽を忘れ、近東風の戀愛に陶酔し、眞白き都市のアルヂエ市に、無上の歡樂を味はつて、睡りこけておりました。これは、つまり、名將ハンニバルがカプア町にゐた時と同じ譯です。

わが大英雄は、亞刺比亞人町の眞中に、借家住居をしたものだ。この土地風の實に綺麗な小住宅で中庭があり、芭蕉が植わつて、涼しい廻廊があり、噴水がある。このお家に、モオル女と御一緒に、うるさい世間を離れてお暮しになつたが、御自分とても、頭の先から足の爪先まで、モオル人になりきつて、毎日、水煙管からぶか／＼吸つて、麝香の匂がする菓子をばく／＼召上つた。

その眞正面の長椅子には、バイヤが長々と寝そべつて、ギターを玩具にしたが、單調な歌を、鼻聲で歌つた。又或る時には、旦那様を悦ばせようと、腹踊りの眞似をした。その時は小さい鏡を手に持つて、眞白な齒をそれに寫したり、奇妙な顔附をしたりした。

女は佛蘭西語を知らないし、タルタランさんは亞刺比亞語を知らないので、會話は度々途切れたから、由來おしやべりのタルスコンの英雄は、おそろしく退屈になつた。けれども、それは、藥屋のベヂユケさんだの、鐵砲屋のコストカルドさんだの、家で、あれほどべら／＼しやべつたことの、免れ難い罰と思つて、仕方なしに辛抱した。

ところが、この辛抱には、多少の魅力もあつたといふのは、この一日中黙り込んで、水煙管のごぼごぼいふ音や、ギターに軽く觸つた響きや、モザイツクに敷詰めた中庭から、噴水のかすかな音が聞えるのなんか、耳を傾けてゐると、歡樂極まつて哀愁生ず、といふやうな気分が、しみ／＼と味はへたことであつた。

水煙管、お風呂、戀愛、これが生活の全部を占めた。滅多に外出をしなかつた。ほんの時たま、タルトリさんは、愛人と合乗りで、驃馬の牝に跨つて、郊外に買ひ取つた小さな果樹園へお出かけになり、仲睦まじく柘榴を食つたが……下の方の歐羅巴町へ行くことは、それは斷じて、決してしなかつた。アルヂエ市でも、あつちになると、酔拂ひのズアア人がうぢや／＼あるし、その立派な建物には、士官が一杯詰つてゐて、サアベルをしよつちうがちや／＼言はせて、拱廊の下が物凄く響くし、それはどうも、西洋の風紀衛兵でも取巻かれたやうで、タルタランさんのお氣に召さなかつた。

大體をいふと、タルスコンの英雄は、幸福な毎日を送つてゐた。特にタルタラン・サンチヨ君ときたら、土耳其風の饅頭菓子が大好物で、この新生活ほど、楽しいものは、世の中にないと云つた。ところが、タルタラン・キホオテ君は、タルスコンや、約束の獅子の毛皮などを、時々思ひ出して、良心の苛責に堪へなかつたが、これは大して長續きがしなかつた。不景氣な物思ひを追つ拂ふには、バイヤの姿を一目見るか、頬つべたが落ちさうな旨い香ばしいお菓子の、ホオマアの物語にある妖女シルセの魔酒のやうに、人間を豚にするやうな不思議な力を持つてゐるやつを、ちよいと一匙食べてみ



るか、そんなことで十分であつた。

晩になると、グレゴリー公爵が遣つて来て、モンテネグロ國の自由を論じたが……相も變らず親切なこの貴族は、通譯の役も勤めるし、家令の用事までしたものだ。何をしても金を取らない。いろいろな用事をするのが、楽しみなのだと言つてばかり……この公爵のほかに、タルタランさんの付合つたのは、「どるこ」人だけであつた。つい近頃までは、眞暗い店の奥から、じろつと睨んでゐる、海賊のやうに凄じ連中だ、と思つてゐたのが、交際つてみると、みんな愛想の好い商人だ。刺繍をする人、香料を賣る人、パイプの吸口を拵へる人なんかで、相當の教育があるし、腰が低いし、抜け目がないし、懐み深いし、骨牌のブイヨット遊びときたら、名人揃ひだ。この連中が、一週に四五回、タルトリさんのお宅の夜を賑はして、お金を捲上げ、お菓子をばくついて、十時が鳴ると、豫言者マホメットにお禮を申上げながら、禮儀正しく暇を告げた。

跡に残つたタルトリさんは、その忠實な細君と、見晴らし臺に出て、夜の氣分を味はつた。これはお家の屋根の上で、眞白な廣い見晴らし臺だ。町中が一目に見渡せる。あちらにも、こちらにも、矢張り眞白な見晴らし臺が澤山あつて、月皎々たる空の下に、ひっそりと竝んで、段々下りに海まで續いてゐる。何處からともなく、風が傳へるギアアの忍び音……時しも起つたのは、朗々たる樂の音だ。星が戀を囁くのかと思はれる位、空一杯に響き渡つた。す

ると、隣りの、櫓の上に現れたは、夜目にもしるき美男の招禱僧で、その白装束の姿を、青い夜空にくつきりと浮び上らせて、アラアの神様の御徳を、聲高らかに唱へるが、その聲の美しさ、地平線の端までも透るくらゐ。

これを聞くと、パイヤは、手にしたギタアをはたと落して、大きな眼を招禱僧に向ける。あのお祈りの聲を、眼の中に呑んでしまひたいやうな、有頂天になつた眼だ。歌の如きお祈りが續く間、パイヤは其處に跪いて、感激の身顫ひをする。聖女テレエズが、近東風の衣裳になつたか、と思はれる位、神々しいパイヤの姿……タルタランさんはこれを見て、すっかり感じ入つたる顔附だ。心の中で思つたのは、信仰もこれまでになつて、酔つたやうにさせるのだから、この回々教こそは、實に偉大な、立派な宗教だ、といふことであつた。

あゝ、タルスコンの人々よ、顔を蔽つて嘆くがいゝ。町の英雄と崇めたるタルタランさんが、今といふ今、異教の信者になり始めたのだから。

## 十二、タルスコンよりの消息によれば

空はあくまで眞青に、生温かい風がそよくと、といふいゝ、お天氣の午後のこと、タルトリさんは



驃馬に跨つて、今日はたつたお一人で、小さい果樹園からお歸りだ……足をうんと擴げてゐるのは、驃馬の背に敷いた、スバルト草を編んだ敷物の下へ、佛手柑やら、西瓜やら、どつさりと詰めたからだ。でつかい鐘が鳴り續けて、子守唄でも歌ふやうだ。驃馬が體を振るたんび、上の御主人もゆらりぐらりと、繪のやうな美しい景色のなかを、お腹にお手々をちやんと載せて、しんづくと行かれたが、四分の三は眠つてゐる。何しろ安樂な毎日だし、それに今日の暑さと來たら……

と、だしぬけに、町の入口で、破鐘のやうな聲が呼掛けたから、タルトリさんは、はつと眼を覺ました。

「いよう。これは、これは、お珍しい。タルタランさんぢやあ、ありませんか」

タルタランと名前を呼ばれ、懐しい佛蘭西南部の訛りを聞いて、タラスコンの英雄は、頭をきつと持上げて見ると、つい二足の前にあるのは、飛脚船ズアアア號の船長さん、バルバツスウさんの澁皮色の顔だ。とある小さなカフェの門口で、アブサントをちびく遣りながら、例のバイブから煙を立てゝゐる。

「やあ、お久し振りですなあ、バルバツスウさん」

と言ひながら、タルタランさんは驃馬を止めた。

バルバツスウさんは、それには何にも答へないで、たゞ、眼を丸く、でつかくして、タルタランさ

んの顔をぢつと見た。やがてのことに、わつはつはとばかり笑ひ出したので、タルトリさんは面喰つて、西瓜の上のお尻をもぢくさせた。

「なある程ねえ。世間の噂に嘘はない。あんたは、どうも、すつかり『どるこ』人にお成んなすつた……時にどうです。可愛いバイブは、あの『うるはしの乙女マルコ』の唄を、今でも矢張り歌ひますかな」

タルタランさんは憤然と、

「うるはしの乙女マルコですつて。御冗談を仰有つては困りますよ。今のお話のその女は、身持の正しいモオル娘です。佛蘭西語なんぞ、一つも知りませんよ」

「バイブが、佛蘭西語を、一つも知らん……いやはや、あんたは何處から來なすつた……」

と言つて、船長さんは、一層猛烈に笑ひ出した。

ところが、見ると、タルトリさんのお顔が、泣き出しさうになつたので、船長さんは思ひ返して、「してみると、つまり、同じ人間ではないのでせう……わたしがごつちやに考へたのでせうが……何しろ、タルタランさん、あまり御信用なさん方が、お爲なのは、アルヂエリアに住むモオル女や、モンテネグロの公爵なんぞ……」

タルタランさんは、鐘の上に突つ立ち上がり、口先を尖んがらして、



「公爵は、わたしの親友ですよ」

「いや、いや。さうお怒りになつてはいかん……これは如何です、このアブサントを一杯は。いらんと仰有るか。では、お國へ何か言傳はありませんか。それも無いのですか。然らば、何分、御機嫌宜しう。さて、話は違ひますが、佛蘭西煙草の上等を、少しばかり持つて來ましたが、これを一つお飲みになりませんか。まあ、まあ、い、から、お持ち下さい。あなたの爲になる煙草だ。この土地の煙草はつかり吸つてゐなると、あなたの頭が段々ぼんやりします」

かう言つてから、船長さんはアブサントのテエブルに戻つたが、一方、タルタランさんはといふと、何か物思ひに沈みながら、駒の歩みも遅れがちで、小住宅への道を辿つた……大體が度量の廣いお人だから、別に疑ひは起さなかつたが、バルバツスウさんの意味ありげなほめかしが、奇妙に心に懸つたし、故郷の言葉訛りやら、遠慮のない調子やらを耳にすると、後悔のやうな氣持が、むくむくと湧いて來た。

お家に歸ると、誰も來てゐない。バイヤはお風呂に行つたさうで……留守居の黒んぼ女は、見るもいやな女だし、家中がひどく不景氣だ……何とも形容し難い憂鬱になつて、噴水の傍に腰を卸した。バルバツスウさん心盡しの佛蘭西煙草を、パイプにぎゆう／＼填めようとすると、この煙草は「腕木信號」新聞の古いのに包んであつた。紙を擴げると、いきなり眼についたのは、懐しい故郷の町の名

前であつた。

### タラスコンよりの消息によれば

町民一同不安の絶頂に達しつゝ、あり。かの著名なる獅子狩人タルタラン氏は、亞弗利加の大猫族を皆殺しにせんものを出發したるが、既に數箇月音信不通なり……わが町の誇たる英雄の運命や如何に……冒険を好む大膽不敵の、かの熱血漢の平生を知る吾人は、今や慄然たらざるを得ず……氏は果して、先人の例に洩れず、沙漠の砂に埋れたるか、將又、氏が出發に際して、わが町の名士諸氏に約束したる毛皮の持主の、アトラス山の猛獸の牙にかゝりて、あえなき最期を遂げたるか……吾人の想像は慘又慘の一事に及ばざるを得ざるなり。時に聞くなり、ポオケエルの年の市に來合せたる黒人商人の談に曰く、沙漠の眞只中に於て、一歐羅巴人と遭遇したるが、該歐羅巴人はその面貌わが町の英雄に酷似し、且つトンプクツウ指して進みたりと……願はくば、神よ、われらのタルタラン氏を守り給へ。

一氣に讀んで、タラスコンの英雄は、眞赤になつた。眞蒼になつた。ぶる／＼顫へた。眼の前に現



れたのは、タラスコンの町だ。倶楽部が見える。帽子打の御連中がある。コストカルドさんのお店の青い肘掛椅子も見える。さういふ有様すべての上に、翼を張つた鷺のやうに、一際恐ろしく見えるのは、えらい隊長さんブラギダさんの、びんとはねたるでかい八字髭だ。

今頃は野獸をぶち殺してゐる、といふ人々の期待に背いて、今や、莫産の上にしやがんでゐる自分を顧りみると、タラスコンのタルタランさんは、つくづく我が身が恥づかしく、さめくと泣いたものだ。

突然、わが大英雄は跳ね起きた。

「獅子を遣つつけろ。獅子を遣つつけろ」

まっしぐらに飛んで行つたのは、埃だらけの部屋の片隅で、其處に積んだ携帯天幕や、薬箱や、鐘詰や、武器のトランクなどを、中庭の真中へ引摺り出した。

タルタラン・サンチヨ君は、何時の間にか死んでしまつた。残るは、タルタラン・キホオテ君だけ一人。

忽ちにして、諸道具一切の點檢をした。武器を身に着け、仰山な服装になつた。でつかい長靴をやつこらさと履き、「バイヤを頼む」とたゞの一行、公爵に書殘して、涙に濡れた青い紙幣を五六枚、封筒に突つ込んだ。と思ふと、最早、わが大膽不敵の英雄は、ブリダア街道を行く乗合馬車の中で揺

られてゐた。お家に殘された黒んぼ女は、呆氣にとられて、水煙管やら、捲帽子やら、スリツバ靴やら、すべて、回々教徒タルトリさんのお形見が、三葉形にくり抜いた狭い廊下の、眞白な床に散らばつたのを、やれ／＼勿體ないと眺めてゐた……



### 三の巻

#### 獅子の住める國

##### 一、流罪になつた乗合馬車

おつそろしい舊式な馬車であつた。何時の大昔の流行か、厚ぼつたい羅紗で屋根を覆つてゐるが、その羅紗の青い色が、さんぐに褪めて見る影もない。堅い毛のよぢれた球がぼろ／＼落ちるから、二三時間も乗つてゐると、背中に灸でも据ゑられたやう……タラスコンのタルタランさんは、後の方の小さい部屋に陣取つた。出来るだけゆつたりと構へ込んで、やがての近い將來に、亞弗利加の大猫族が發散する麝香のやうない、香を、思ふ存分嗅ぐことを楽しみにしてゐたが、今のところは、この乗合馬車の古臭い匂、といふと、男や、馬や、女や、革や、食料品や、微の生えた藁なんぞの、種々雑多な匂のまじり合つた、いやもう大變な臭さを、我慢しなければならなかつた。

この部屋は、大して混んではゐなかつた。修道士が一人と、猶太人の商人が二三人。田舎町のオルレアンスギユの寫眞屋が一人。女が二人。これは、所屬の隊へ歸る淫賣の姐さんだ。といふと、輕

騎兵第三聯隊のい、人達のところへ歸る姐さんだ……といふ工合に、この乗合客は、相當面白さうな人間の寄合つたものだが、タラスコンの英雄は、例のおしやべりを始めようとしな。背中のお荷物背負革に腕を通した儘、二挺の旋條銃を膝の間に立て、物思ひに深く沈んでゐる……あはたゞしい御出發、バイヤの眞黒な眼、これから遣らうとする恐ろしい狩、なぞといふことを思ひ廻すと、頭の中がぼうとなつた。知らず識らず、眼の前に浮ぶのは、タルタランさん未だ若かりし頃のタラスコンの有様、郊外への御散策、ロオヌ河畔のうまいお食事、それからそれへと、實に澤山の光景だが、これは、今この亞弗利加の眞中で、圖らずも歐羅巴風の馬車を見出したので、それが原因となつて、故郷を思ひ出したのだ。尤も、タルタランさん御自身には、原因も何も分らない。

だん／＼夜になり始めた。馭者は燈火を點けた……錆だらけの乗合馬車は、古くなつた彈機をぎいぎいと、悲鳴を擧げながら、跳上がる。馬は速歩になつて、鈴ががらん／＼……上の方から、時々、金物のぶつかる恐ろしい響きが聞えたが、これは、頭の眞上の、幌圍ひの部屋に積まれた、わが英雄の武器の音だ。

タラスコンのタルタランさんは、四分の三ぐらゐうと／＼して、乗合客の様子を眺めた。馬車の揺れるにつれて、皆ぐら／＼滑稽に揺れる。こいつは面白い影繪だわい、と見てゐたのも、ほんの束の間、タルタランさんのお眼めは、忽ちとろんこになつて、頭の中に霧がかつたやう。ぼんやり耳



に聞えるのは、車の心棒が愚癡たらしく廻る音と、馬車の腹がめそ／＼泣く聲……  
突然、タラスコンの英雄の名を呼んだのは、年取つた魔女の聲だ。皺唄れた、力のない、ひびの入つたやうな聲だ。

「タルタランさん。タルタランさん」

「誰ぢや。わしを呼ぶのは」

「わたしですよ。タルタランさん。わたしを憶えてはいらつしやいませんか……わたしは、あの、古い乗合馬車でございます。二十年も昔になりますが、タラスコンとニイムの間を通つてゐた、あの馬車でございますよ。あなた様やお友達の方々をお載せ申して、度々、ジョンキエエルやベルガルドあたりの、帽子打にお連れ申上げましたよ……先程はちよつとお見逸れ申しました。何しろ、『どるこ』人の帽子をかぶつていらつしやるし、お體の様子も大分變つていらつしやるので、つい失禮致しましたが、よたく／＼お揺れになり始めますと、やれ／＼やつと、思ひ出せたのでございますよ」

「やあ、そんなことは、どうでもいゝ」

と、タラスコンの英雄は、少し氣色を損じて仰有つた。

それから、多少機嫌を直して

「それはさうと 乗合馬車の婆さんや、こんな土地へ流れて来て 一體どうしようといふ積りかね」

「あゝ、タルタランの旦那様。好きこのんで来た譯ではございません。まつたくのお話……ポオケエル鐵道が出来上りますと、わたしなんぞ役に立たんと棄てられて、それでこの亞弗利加くんたりへ流されました……わたし獨りきりではございません。佛蘭西中の乗合馬車が、大概みんな矢張り流罪になりました。わたしどもは、餘りにひどい反動主義だと言はれまして、こんな苦界に落されたのです……このわたしどものことを、佛蘭西では、アルヂェリア鐵道と、綽名を付けてゐるさうで……」

婆さんの乗合馬車は、此處で長い溜息をついたが、やがてまた言葉を續けて、

「タルタランさんの旦那様。いまだに忘れることが出来ませんのは、あの樂しかつたタラスコンのことでございます。あの當時はわたしもまだ若い盛りで、嬉しいことだらけでした。わたしが朝早く出かけるのを、皆さんにお見せしたい位でした。さあ／＼水を掛けて、綺麗に洗つて、新しく塗られたわたしの車輪は、びか／＼と光ります。わたしの燈火は二つの太陽のやうに輝きます。幌にはいつも油が塗つてあります。思ひ出しても、ぞ／＼嬉しくなりますのは、馭者さんが鞭をびゆん／＼鳴らしながら、『ありや、こりや、どつこい。龍のタラスク、遣つて来た。龍のタラスク、遣つて来た』といふ唄を歌ふ時です。それから又、いよくその馭者さんが、革で吊した喇叭を提げて、縫取をした帽子を耳までかぶり、片腕をぐる／＼廻しては、夢中になつた小犬を、幌圍ひの部屋に追ひ上げてから、自分もひらりと乗込んで、『そら、出かける』と唄鳴る時です。すると、わたしに付けられた



四頭の馬が、鈴をぢやらん／＼言はせて、駈け出します。犬がわん／＼、喇叭が響く。方々の窓が開いて、タラスコンの町中の皆さんがわたしを見送つて下さいます。廣い國道を遁げるやうに行く、乗合馬車の姿を、おれ達の名物だ、と得意さうに眺めます。

あゝタルタランさん。あの國道の素晴らしいこと。廣い道で、手入が届いて、里程標が建つてゐます。正しい距離を置いては、砂利の山が見えて來ます。右を見ても左を見ても、橄欖と葡萄がある、景色のいゝ平原です。十歩行くとたんび、宿屋があつて、五分毎に馬の立場がありました……それにどうでせう、わたしの載せたお客様達は、揃ひも揃つて、立派なお方です。町村長さんや牧師さんは、ニムムへ行つて、知事さんや僧正さまに面會なさるのです。お金持の呉服屋さんは、田舎の遊びからのお歸りで上々吉の御機嫌です。休暇旅行の大學生もゐます。縫取をした晴着のお百姓さんは、今朝だけはさつぱりと髭を剃つて來ました。かういふ人達が下の段の部屋にゐて、上の段の幌圍ひの部屋にいらつしやるのは、あなたの方、帽子打の御連中です。いつもお元氣で結構でしたが、とりわけ、星を戴いての晩のお歸りになりますと、皆さんのお家の唄を、それ／＼お歌ひになりました……

そのわたしが、今はどうでせう……お話にも何にもなりません……大變な連中を運ぶのです。何處の馬の骨とも知れない異教徒の奴等で、わたしの中へ蚤や虱を持ち込みます。黒ん坊、ベドアン族、煮ても焼いても食へない老兵、世界各國の冒険家、襤褸をさげた移民の家族、といった連中が、臭い

煙草を無暗にふかして、神様でさへも分らない、妙な言葉でしゃべります……そして又、わたしを取扱ふのに、刷毛もかけず洗ひもしません。そのくせ、車の心棒に油滓が溜つていかん、と不平ばかり並びます……昔のおとなしい肥つた馬の代りに、ちつぽけな亞刺比亞馬です。この馬どもは、體の中に悪魔が巣をくつてゐるのか、しよつちう喧嘩して齧合ひます。駈けながら、びよん／＼跳ねて、山羊のやうです。わたしの轆木を蹴り付けて、折つてしまひます……お、痛い……お、痛い……御免下さいまし……もう始まつたのですよ……それから、道の工合ですが、この邊はまだしも辛抱が出來ます。都の近くですから道もいゝのですが、もう一寸先の田舎へ參りますと、道といふものがあります。山でも、原でも、若い棕櫚の林でも、乳香樹の森でも、何でも構はず突つ切ります……馬の立場なんぞ、一つもありません。駈者の好きな所に停りますから、方々の農園に勝手に寄ります。

この駈者ののらくら野郎は、わたしに二里も三里も廻り道をさせて、友達のところへ寄込んで、アプサントやブランを一杯やります……その跡は、そら行け、そら駈ける、と鞭を鳴らして、遅れた時間を取返さうとします。太陽が照り付け、埃がむん／＼。そら行け、駈ける、と續けますから、がたんとぶつかつて、ひつくり返ることもあります。それも構はず、そら行け、駈ける。時によると、わたしは、川を泳いで渡りますから、風邪をひきます。濕つばい體で、眞黒になつても、そら行け、駈ける、といぢめられ通しです……夜になりますと、露がひどいのに、この年になつたこのわたしが、



僕麻質斯の持病があるといふのに、星の下に寝かされます。隊商の宿屋の中庭に、ほつたらかしのなつてゐますと、草木も眠る丑満頃、金狼や鬣狗が現れて、わたしの車室を嗅ぎ廻ります。光を恐がる泥坊が、わたしの中へ這込んで、一夜を明かしたりします……

かういふのが、わたしの今の生活でございます。ねえ、もし、タルタランさんの旦那様。こんな生活、わたしは續けて、やがては太陽に焼かれ、濕っぽい夜に腐らせられて、死んでしまふ外はありません。わたしは何處で死ぬのでせう。きつと、ひどい悪道路の片ほとりで、わたしの亡骸の古ぼけた木の片は、亞刺比亞人がどろどろのお粥を煮る薪になるのでせう……」

「ブリダア。ブリダア」

とはつきり聞えたのは、扉を明けて、土地の名前を呼んだ馭者の聲であつた。

## 二、ちびの紳士が土地の福利き

人いきれで曇つた硝子の向うに、ぼんやりと見えるのは、郡役所のある廣場だ。拱廊やオレンヂの木に取巻かれた、眞四角な廣場で、その眞中に、薔薇色の朝靄に包まれて、練兵をする兵隊は、とても小さく、鉛の兵隊のやうだ。カフェでは戸が明いた。あちらの方では、野菜の市が始まつた……と

いふ譯で、中々い、町だが、獅子のあさうな氣配は何處にも見えない。

「南だ。もつと、もつと南だ」

と、わがタルタランさんは、口の中で言ひながら、元の席へどかんと腰を卸した。

丁度この瞬間に、後の扉が明いて、一陣の涼しい風がさつと入ると、それに乗つて、オレンヂの花のい、匂も来たが、ちんちくりんの紳士も舞込んだ。焦茶色のフロツクコオトで、年寄つて、乾らびて、皺くちやで、四角張つた體附だ。顔の大きさが、やうやく握り拳ぐらゐの小つぽけなのに、黒い絹のネクタイは、指を五本も竝べた程の幅が廣いやつだ。革の折靴を抱えて、蝙蝠傘を持つてゐる。打見たところ、どうしても、村にお住居の公證人だ。

この小つぽけな老紳士は、タルタランさんの眞正面に坐つたが、わが大英雄の物々しい武装を見ると、ひどく吃驚した眼附になつて、わがタルタランさんのお顔を、いやにじろく、氣まりが悪くなる位、見据ゑたものだ。

馬のつけ替へが済んで、乗合馬車はまた出かけた……ちびの紳士は相も變らずタルタランさんを見詰めてゐる……たまり兼ねて、タラスコンの大英雄が口を切つて、

「何ですか。吃驚したんですか」

と言ひながら、今度はこつちから、ちびの紳士の顔に穴が明く程、睨み返した。



「どう致しまして。窮屈で困るんです」

と、相手は静かに答へたが、言はれて見れば、これは成程、携帯天幕のお荷物に、ビルトルヤ、袋に入れた二挺の鐵砲や、獵刀などがある上に、大變な肥つちよでいらつしやるから、タラスコンのタルランさんは、獨りでうんと場所を取つてゐる……

それにしても、ちび紳士の返答を聞くと、タルランさんはむつとした。

「さう仰有るのでは、さてはあなたは、獅子狩に出掛けるのに、そんな蝙蝠傘一本でいゝといふお考へですかい」と、大英雄は意氣軒昂と言放つた。

ちびの紳士は蝙蝠傘を見て、ちよいと笑つた。相變らず、例の静かな調子で、

「では、あなたは……」

「タラスコンのタルラン。獅子の狩人ぢや」

と言つて、大膽不敵の英雄は、土耳其帽の總玉を、鬘のやうにぶる／＼と揺つた。

乗合馬車の一同は、これを聞いて吃驚仰天。

修道士は十字を切つた。二人の姐さんは、お、恐いと聲を擧げた。オルレアンズギイユの寫眞屋は、獅子の狩人に近づいたが、これは早くも、一枚撮らせて頂く光榮に浴したい、と思つたからだ。ちびの紳士は、びくともしない。

「然らば、タルランさんにお尋ねしませう。獅子を何頭も殺したことがおありですか」  
いとも靜かに、かう訊いた。タラスコンの英雄は、早速の機轉で、うまい返事をした。

「何頭殺したかといふことは……あなたに申上げるまでもありません。丁度、あなたのお頭の毛の數だけですからな」

乗合一同は、どつと笑つて、ちびの紳士の頭を見ると、黄色くなつた毛が三本ばかり。

オルレアンズギイユの寫眞屋が、こゝぞとばかり、しやく／＼り出て、

「何しろどうも、恐ろしい御商賣ですなあ……さぞまあ、苦しい時がございませうな……矢張りその、あなたも、ボンボンネルさんと御同様……」

「やあ、あの人ですかい。あの人の専門は豹……」

と、タルランさんは、大に輕蔑の口調で言つたものだ。すると、

「あの人をあなたは御存知ですか」

と、ちびの紳士が訊いたから、

「知つてゐるの、知らないの、と言つて……二十回以上も一緒に狩をしましたよ」  
ちびの紳士は微笑して、

「では、タルランさん。豹なんぞもお遣りですか」



「時々遣ります。慰みにね……」

と、タラスコンの英雄は、憤慨しきつて仰有つた。

それから、英雄らしくお頭をぐいと振上げ、二人の姐さんがあら素敵と言ひさうになつた位、勇ましい恰好になつて、つけ加へて仰有るには、

「獅子ほどの値打はありませんからな」

オルレアンスギイユの寫眞屋が、口から出まかせに言ふのには、

「つまるところですな。豹なぞといふものは、猫の大きいの位なもので……」

「勿論その通り」

と言つたタルタランさんは、ボンボンネルさんの名譽を下げる事が、ちつとも苦にはならなかつた。特に御婦人方の前だから、勢籠めて、かう言つた。

丁度この時、馬車が停まつて、馭者が扉を明けに来て、ちびの老紳士に向つて、

「はい、到着致しましてございます」

と、おつそろしく丁寧な口を利いた。

ちびの紳士は立上つて、車を下りたが、扉を締める前に、

「時にタルタランさん、一つ御忠告申上げたいのですが」

「何事ですかい」

「かうですよ。よつく聞いて下さいよ。あなたは立派なお人らしく見えますから、わたしも腹藏の意見を上上げます。早く、タラスコンへお歸りなさい。此處へ來ても、無駄奉公です。この邊に豹なら多少残つてゐますが、豹では小さ過ぎて、あなたの獲物にならないでせう……獅子はと申しますと、もう一匹も居りませんよ。アルヂエリア地方のどつこにも、一匹たりとも、居りません。わたしの友人の、シャツサン君が、最後の一匹を、つい先日仕留めてしまひましたよ」

かう言つて、ちびの紳士はお辭儀した。扉を締めて、折靴を抱へ、蝙蝠傘を提げて、にや〜〜笑ひながら、行つてしまつた。

タルタランさんは、口を尖んがらしながら、

「おい、おい。馭者さん。あの人は誰かね」

「なあんだ。旦那は御存知ぢやあないのですかい。あれがその、ボンボンネルさんですよ」

### 三、獅子の修道院

ミリアナアといふところで、タラスコンのタルタランさんは馬車を降りたが、馬車はもつと南へと



んどん行つた。

二日二晩揺られ通し、一睡もしないで、タルタランさんは、窓から外を眺めてばかりゐた。畑やら、道やらに、もしや恐ろしい獅子の影が見えはしないかと、眼を皿のやうにしてゐたのだから、今や数時間のぐつすり寝ることが必要になつた。それから……何事もすつかり申上げると、ボンボンネル氏での失敗以来、正直者のタラスコンの英雄は、馬車の中に居づらくなつたのだ。相も變らず、武器を押立て、尖がり口をして見せて、赤い土耳其帽を頂いて、厳然と構へてはゐたけれど、オルレアンズギイユの寫眞屋や、輕騎兵第三聯隊の娘さん二人なんぞに、顔を見られると、どうも氣まりが悪くて、居た、まれなかつた。

ミリアナアの町の廣い通を、宿屋はないかと探しく、よちよちとお歩きになると、美しい木があり、噴水があつた。その道々で考へるには……ボンボンネル氏の話によると、アルヂェリアに獅子は一匹もゐないといふが、それは果して本當かしら。もし本當なら、飛び廻つても、草臥損の骨折儲けだ……

時しもあれや、とある小路の曲り角、わが大英雄の鼻先に、だしぬけに現れたのは……讀者諸君、何だと思し召す……獅子ですよ。威嚴に満ちた獅子王が、カフェの戸口にどつかと座して、荒々しい鬣に、目を一杯に浴びてゐた。

はつとばかり、一足後へ飛び退つて、タラスコンの英雄は、

「何のこつちやい。一匹も居らんなどと、嘘ばかり」

と頓狂聲を擧げたものだが、この聲を聞いた獅子は、頭をひよいと下げて、その口に、手前の歩道にあつた木の椀を、軽く啣へて、吃驚仰天身動きもしないタルタランさんのお腹のあたりへ、その椀を恭々しく差し出した……亞刺比亞人が通りかゝつて、でかい銅貨を椀に抛り込むと、獅子は尻尾を振つた……そこで漸く、タルタランさんは事情が分つた。何しろ、最初の感動が餘りにひどかつたら、ついつつかりしてゐたが、今氣がついて見れば、この獅子は、可哀さうに眼が見えないし、よく馴れてもゐるらしい。その周圍には、一杯の人ばかり。棍棒を持つた、のつぼの黒んぼが二人ゐて、これがこの獅子を町中引廻すので、丁度、タラスコンの靴磨きの小僧が、モルモットを連れて歩くと同じ工合だ。

タラスコンの英雄の、満身の熱血は火と燃えた。雷のやうな聲を出して、

「無禮者奴が。かゝる氣高き百獸の王様に、賤しき勤めをさせるとは、何たる無禮」

と呶鳴りざま、獅子に跳びかゝつて、その王者の腮から、汚い椀を引つたくつた……驚いたのは二人の黒んぼ、此奴てつきり泥坊と思つたから、棍棒振翳して、タラスコンの英雄に打つて懸つた。

さあ、大變な大騒ぎ。黒んぼは無暗に殴りつける。女がきいゝ聲を立て、子供は笑つて面白がつ



た。猶太人の靴屋の爺さんは、店の奥から銅鑼聲で、「お巡りさん。お巡りさん」と喚いたし、皆目見えない獅子は、不安を感じて唸り出した。タルタランさんはどうかといふに、悪戦苦闘、遂に力が盡き果て、地面にごろりと轉がされた。銅貨の散らばつた真中だ。ぐるりと取巻く彌次馬連。かゝる折柄、群集を割つて出でたる一人物。一聲高く黒んぼを吐り飛ばした。女子供は、その堂々たる風采を見て、みんな後へ引下つた。この人物は、タルタランさんを助け起し、そのお召物の塵をはたいて、しつかりなさいと言ひながら、息も絶えくの英雄を、里程標の上に坐らせた。

「お、これは公爵。あなたでしたか……」

と、タルタランさんは、お腹を擦りく。

「正に僕だよ。僕が来たんだよ……君の手紙を見るが早い、パイヤを弟に頼むなり、郵便馬車を借切つて、五十里をひとつ飛びさ。丁度い、時に間に合つて、こんな田舎者の手から君を救へた……それはさうと、大變なひどい目に遭つたが、一體何を君はしたんだね」

「そのことですよ、公爵さま。獅子が可哀さうになつて……腕を啣へて、乞食の眞似です。こんな回教の奴等に征服され、笑ひものにされて、その慾張りの道具に使はれ、生恥をさらしてゐるのですもの……」

「それは、君、とんだ思ひ違ひだ。この獅子は、笑ひものにされるところか、奴等にこの上もなく尊

敬されてゐるのだよ。抑々これはたゞの獅子ではない。神聖な獣だ。出所は何處かといふと、獅子がうんとある修道院だ。およそ三百年以前、マホメッド・ベン・アウダといふ人が創立した修道院で、實に物凄い中の有様。うおうくと吼える聲、野獸特有の強い匂。此處に坊さんたちもあるが、それは何百頭の獅子を、育て馴らすのが、その役目だ。やがて馴れた獅子は、北部亞弗利加一帯に送り出されるが、托鉢僧がついて行く……集まつたお賽銭は、この修道院その他のお寺の維持費になる。といふ譯でね。たつた今、あの二人の黒んぼが、かんくんに怒つたのは、このお賽銭のうちの鏝一文でも、自分達の不注意から紛失すると、この獅子の怒りに觸れて、食殺される、と思ひ込んでゐるからだよ」

聞けば聞くほど不思議な話、でも、どうも、本當に、感心せざるを得ない話だ。タラスコンのタルタランさんは聞き惚れて、しきりに鼻を擧り上げた。

やがてのことに、至極論理的な結論を下して、わが大英雄はかう言つた。

「今のお話を伺ひますと、ボンボンネル氏が何と言つても、まだくアルヂエリアには獅子がゐますなあ……」

すると、公爵が勇み立つて言ふには、

「あるとも、あるとも……明日にも、シエリツフ平原を遣つつけよう。僕も行つて、君を一つ吃驚さ



せるよ」

「何ですか、公爵さま。あなた御自身も狩にいらつしやるのですか、あなたも……」

「きまつてゐるさ。僕をそんな薄情者と思ふのかね。君をたつた一人で、亞弗利加の真中へ、風俗習慣も言葉も、君は御存じがない野蠻人の國へ、突つ放して遣る、そんな薄情な僕ではないよ。ねえ、タルタラン君。僕は君に離れないよ。どんなところへでも、一緒に行くよ」

「あゝ、公爵さま、公爵さま……」

と言ひながら、有頂天になつたタルタランさんは、勇しいグレゴリー公爵に抱ついた。時に心に思ふやう。

——ジエウル・ヂエラアルでも、ボンボンネルでも、どんな獅子狩の名人でも、誰でも来い。はゞかりながら、外國の公爵さまと御一緒に、狩に行くといふ、この真似は、ちよいと誰にも出来なからう——

#### 四、隊伍堂々

翌日の朝まだき、大膽不敵のタルタランさんは、これも劣らぬ大膽不敵のグレゴリー公爵と御一緒に

で、六七人の黒んぼに荷物を擔がせ、ミリアナアの町をお出になつて、シエリツフの平原へ降りて行かれた。その道は峻しい坂だが、素馨、ほひ、いなごまめ、野生の橄欖が茂り合つた、實に氣持のいい道だ。兩側には、土人の作る小さい畑の生垣が竝んで、ちよろ／＼水も澤山走つてゐる。何處から出てくる水なのか、まるで生きてゐるやうに、岩から岩へ轉がり落ちて、唄を歌ふ……得も言はれぬい、景色。聖書にあるレバノンの谷も、かくやと思ふばかりであつた。

えらいタルタランさんに負けず劣らず、グレゴリー公爵も、物々しい武装をしてゐたが、なほその上に、頭に頂く帽子ときたら、金筋が入つて、銀糸で柏の葉を縫取つた、實に立派な、奇妙な形の軍帽だ。公爵閣下がこいつをかぶると、墨西哥の將軍のやうにも見え、ダニユウブ汽船會社の船着場の事務所長さんにも見えたものだ。

奇妙奇天烈なこの軍帽を見て、ひどく好奇心を起したのは、わがタラスコンの英雄だ。おそろ／＼どういふ譯かと伺ひを立てた。

すると、公爵は、いとも嚴かに、

「亞弗利加旅行には、かういふ帽子が何よりも必要だ」

と答へてから、袖裏でこすつて、眉底を光らせながら、何にも知らない道伴れのタルタランさんに向つて、この軍帽が亞刺比亞人に對して演ずる、重大なる役割を、事細かに説明した。かういふ風な



軍人の印を、亞刺比亞人が見ると、びく／＼する。この軍帽でないと、さつぱり利かない。そこで、軍人ならぬ文官も、道路修繕工夫でも、登記所の書記などでも、みな軍帽をかぶつてゐる。

つまるどころ、アルヂエリアを統治するには、——としやべりまくるのは、公爵さまで——しつかりした頭脳はいらない。頭脳も手腕も不必要だ。軍帽一つで澤山だ。金筋入りの、びか／＼光る軍帽を、瑞西の悪代官ゲスラの帽子のやうに、丸太棒の先に載つけて廻れば、泣く子もだまる效目がある。

こんな工合に談論風發、まことに景氣のいゝ進軍だ。荷擔ぎ人足は跣足のまんま、猿のやうに叫びながら、岩から岩へと跳んで行く。武器のトランクはがちゃ／＼いふ。日に照らされて、鐵砲が光る。通りかゝつた土人どもは、立派な軍帽に敬禮して、頭を地面につけてしまふ……ミリアナの兵營に來ると、亞刺比亞人部隊の隊長は、丁度その時、城壁の上を、涼しい風に當らうと、夫人を連れて散歩してゐたが、たゞならぬ物の具の音を聞き、木の間に見ゆる武器の光を見て、すはや攻撃と思つたから、撥ね橋をおろさせ、非常喇叭を吹かせ、忽ち戦時状態にしてしまつた。

といふ有様で、わが一隊の御出發は、實にや華々しい限りであつた。

ところが、生憎、その日の午後になると、事態一變、滅茶々々になつた。荷物を擔いだ黒んぼのうち、一人の奴は、藥箱から膏藥を出して、むしや／＼食つたので、さあたまらん。七轉八倒の苦しみ

だ。もう一人の奴は、道傍にぶつ倒れて、死んだやうになつたものだが、こいつは、カンフル入りの燒酎を、がぶ／＼やつて酔拂つたのだ。三人目の奴ときたら、持たされた旅行日記の、金びかの金具を見て、これは大層な寶物だと思つたから、足に任せて、跡白浪と逐電した……かうなると、何とか工風しなければならん……わが一隊は進行をやめ、無花果の大樹のこんもりした蔭に、善後策を講じはじめた。

公爵は、三本足の上等の鍋に牛肉を乾し固めて賽ころのやうにしたやつを、融かさうと思つたが、中々融けないので、苦心しながら、こんなことを言出した。

「僕の意見をいふと、……今晚から、あの黒んぼの人足どもは、お拂ひ箱にするんだね……此處からすぐの近い場所に、亞刺比亞人の市がある。早速其處へ出かけて行つて、驢馬を五六頭買つた方がい……」

「いけません……いけません……驢馬はいけない……」

と、猛烈に反對したのは、えらいタルランさん。可哀さうな黒君の事件を思ひ出して、眞赤な顔をしてゐる。

けれども、全くさり氣なく、言葉を續けて言ふのには、

「あんな小さい獸ですもの、どうして／＼、我々の荷物すつかりを、運び切れるものですか」



公爵は微笑して、

「それは、君、ちよいと違ふよ。アルヂエリアの驢馬といふ奴は、見たところ、いかにも瘠せつばちで弱さうだが、腰はともしつかりしてゐる……載つけられた物なら、何でも運んでしまふよ。誰と思つたら、亞刺比亞人に訊いて見給へ。すると、亞刺比亞人は、必ず次のやうに言つて、この植民地の状態を説明するよ。奴等が言ふのには、先づ、一番上に、長官さまがゐて、この長官が參謀將校を、太い丸太ん棒でぶん殴る。將校は、腹癒せに、兵隊をぶん殴る。兵隊は百姓をぶん殴り、百姓は亞刺比亞人をぶん殴る。亞刺比亞人は黒んぼをぶん殴り、黒んぼは猶太人をぶん殴る。この猶太人が驢馬をぶん殴る。小さい驢馬は、可哀さうに、ぶん殴るべき相手がないから、ぢつと堪へて、何でも運ぶ。といふ譯でね。君もあのトランクを載せて見給へ。きつとうまく運んで行くよ」

タラスコンのタルタランさんが言ふのには、

「それは兎も角……なにしろ、我々の一行に、小さい驢馬なんぞがゐたのでは、見すばらしくつていけません。わたしは、もうすこし、異國風のもものが欲しいのです……たとへば、駱駝なんぞはどうでせう……」

「おつと駱駝。お安い御用」

と公爵が言ふや否や、亞刺比亞人の市へ向つて、わが一行は出發した。

この市は、五六キロメートルの所にあつた。シエリツフ川の岸にあつて……襪をきた亞刺比亞人が五六千人、目に照らされて、うよくゝゐて、わいゝがやゝ騒ぎながら、壺に入れた黒い橄欖油やら、蜂蜜やら、香料の袋だの、葉巻の山だの、いろんな物の真中で、甚だ怪しい取引をする。大きく火が燃えてゐる所では、羊の丸焼きが始まつて、脂がぼた／＼川のやうに流れてゐる。野天の肉屋も方々にあつて、素裸の黒んぼが、血の池をざ／＼歩いて、腕まで眞赤になりながら小さい刀を器用に揮つて、竿に吊した仔山羊の體を見／＼うち寸断する。

こつちの隅には、襪をきた亞刺比亞人を綴り合せて、ちやちな天幕の中に、モオル人の書記がゐて、眼鏡をかけて、でかい本を覗いてゐる。あつちには、一塊りの群集が、夢中になつて嘔鳴り合ふ。これは、麥の枳を應用した、玉轉がし賭博の開帳で、カリビヤ人が取巻いて、苦しい金の吐出しつこだ。……すつと向うの方で、地團太踏むやら、笑ふやら、面白さうな騒ぎが起つた。それは、猶太人が驢馬諸共、シエリツフ川に落ち込んで、溺れかけてゐるのであつた……かういふ人間どもの外、蝸がある、犬がある。鳥があるやら、蠅があるやら……その蠅の澤山なこと、いやはやどうも……

ところが、駱駝だけは中々ゐない。探しに探して、やつと一匹見付けたが、これは折好く、ムザビイト人が手放さうと、連れて來たものだ。實に立派な、沙漠の駱駝で、古典的な先生だ。頭は禿げて、悲しさうな顔。その顔がベドアン族のやうにうんと長い。背中のは、寄る年波にぶよく軟か



くなつて、あちらへゆらく、こちらへゆらく、憂鬱千萬な有様だ。

タルタランさんは一目見ると、すっかり惚れ込んで、矢も楯もたまらない。お荷物全部を、この上に、早く載せたたくつて、たまらない。異國情調を戀しがる、例の癖がむらくつと起つたものだ。

駱駝は膝を折つた。その背中へ、荷物を革紐で縛りつけた。

公爵は、駱駝の頸根つ子に跨がつた。タルタランさんは、なるたけえらさうに見せるため、瘤の天邊に攀登り、トランク二つの間にどつかと座して、駈寄つた市の人間どもに向ひ、得意満面で挨拶して、出發の合圖をした……あゝ、この光景。これをタルタランの連中に、一目なりとも見せたかつた……

駱駝は起きて、節だらけの長い脚をぐいと伸ばして、さつさとその場を立去つた……

それからが大變だ。ほんの五六歩も行つた時、すでにタルタランさんは眞蒼になり、その英雄的な土耳其帽は、嘗てズアアブ號の甲板に於けると同様な、あはれな状態になつて來た。駱駝の畜生奴、帆走戦艦のやうに縦揺がした。

眞蒼なタルタランさん、瘤に生えてゐる麻屑のやうな貧弱な毛に獅嚙みついて、聲もおろく言ふのには、

「公爵さま、公爵さま……降りませう……このまゝではわたしは……佛蘭西に對する悪口さへも……

言ひ出しさうでなりません……」

なんと搔口説いても、もう仕様がな。駱駝は出發したのだから、今更止める譯に行かない。跡を追つて、跣足で走つてくるのは、四千人の亞刺比亞人だ。身振り手振りを混へて、何か呶鳴つたり、氣違ひのやうに笑つたり。すると、その眞白な六萬枚の齒が、日に照つてきら／＼光る……

タルタランの大英雄は、あきらめるより外はない。がつかりして、ぐつたりと、瘤の上に載つかつてゐた。その土耳其帽が、自分勝手な姿勢をとつたが、御主人のタルタランさんは、それに構はず、心の中で一生懸命、祖國佛蘭西でも、何でも、あらゆるものを呪ひ續けた。

## 五、夾竹桃の林に夜の見張

駱駝といふ新しい乗物は、實に好ましい、繪になる乗物だが、これをわが獅子狩人は、土耳其帽の面目を救ふため、棄てなければならなかつた。それから、以前のやうに歩いて行つた。タルタランの英雄が前衛となり、モンテネグロの公爵が後衛で、武器のトランクを背負つた駱駝先生が本隊、といふわが一隊は、いとも小かな露營を重ねて、南へ／＼／＼進んだ。

この探險が一箇月も續いた。



一月のその間、ゐない獅子を探し求めて、勇猛なるタルタランさんは、シエリツフ平野のあちこちを部落から部落へ迷ひ歩いて、佛蘭西風のまじつたアルヂエリアといふ、珍無類の滑稽極まる地方を踏破した。この地方では、古代東洋の香りが、アブサント酒と兵營との匂ひとごちやませだ。アブラハムといふ名前を耳にするから、えらい豫言者か何かと思ふと、御當人はたゞの兵卒だつたりする。神祕的なものと、巫山戯きつたものが、こんぐらがつてゐる。譬へて言ふと、舊約聖書の一頁を、軍曹ララメ氏や伍長ピトウ君が朗讀するやうなものだ。

タルタランさんとは一寸違つた、具眼の士が旅行したなら、驚くにきまつてゐる、珍らしいことが澤山あつた……この地方の野蠻人は、佛蘭西文明の恩恵も受けるが、その一方に悪い風俗を教はるから、どん／＼腐敗してしまふ……支配する副主教なんぞからして、徒らに苛酷で、無茶な遣り方だ。平生の生活を見ても、レジオンドヌウル勳章の印たる、大きな飾紐を、漬をかむのに使つて、しかも勿體ぶつて漬をかむ。ほんの一寸の事件があると、すぐ人を縛り上げて、足の裏を棒で叩かせる。裁判をするのは、眼鏡ばかり莫迦にでかい、回々教の裁判官で、良心も正義もそちら向け、コオラン經や法律をひねくり廻すが、その内容と御自分の行ひとは大違ひの偽善者で、棕櫚の木影に寝そべつて、今度の八月十五日には昇進する筈だが、どれ位の昇進だらう、など、いふ夢を見る。一杯の食のためその長子權を賣つたエサウのやうに、一皿の豆や、砂糖入りのごつた煮のお粥なんぞを賣ふと、

その判決を取消すやつだ。この地方の土人で官吏になつた者は、だらしない生活をして、酔つ拂つてゐる。いづれ昔は、ユスフ將軍か誰かの從卒であつたのが、今はえらい出世をして、マホネエ生れの洗濯女を相手に、毎日三鞭酒をがぶ飲みして、羊の丸焼の大層な御馳走をくらつてゐるが、その官吏先生の天幕の前には、腹が空いて死にさうな、老若男女が大勢ゐて、このお大名の御馳走の残り物を見ると跳びつくのが、兎獵の犬と競争の、見るもあさましい有様だ。

見渡す限りの廣い平野は、荒れ果てゝある。草は燃え、仙人掌と乳香樹の密生する灌木地帯は、むんむん暑い。それが、所謂、佛蘭西の穀倉、といはれるこの地方の實狀だ。穀倉といふ名はいゝが、穀物一粒もありはしない。一杯あるのは、たゞ、金狼と南京蟲だ。部落には人がゐない。部落民は餓死を免れようと、當途はないが、兎に角、逃げ出してみたのだが、行く道々でのたれ死をする。所々に、佛蘭西移住民の村があるが、これもみすぼらしい家ばかりで、畑に何にも植わつてゐない。蝗やばつたは、食物がないので、かん／＼に怒つて、そこらの物を何でも食ふ。窓掛なぞをも食つてしまふ。移民達はどうしてゐるかといふと、カフェに入り込んで、アブサントを飲みながら、改革の、施設のと、愚にもつかない議論をする。

タルタランさんも、少し努力をしたならば、かういふ有様に氣がついたらう。ところが、何しろ、獅子一點張りの御熱心だから、タラスコンの英雄は、脇目もふらず、どし／＼歩いた。右をも見な



い。左も見ない。目指すところは、たゞ、かの猛獸……だが、その猛獸は、空想上にとゞまつて、實際には一度も現れなかつた。

携帯天幕はいやに頑強で、何としても開かないし、角になつた乾肉は、どんなことをしても融けないから、わが一行は朝に夕に、士人の家へ厄介になつた。何處へ行つても、グレゴリー公爵の軍帽のお底で、えらい大歓迎を受けたものだ。士人と言つても、官吏になつた人の、物語にある王宮のやうな立派な家で、窓が一つもない眞白な、材木を合掌組にした、大きい建物だ。中に入つて見ると、あちこちに、水煙管がある、桃花心木の簞笥がある。スミルナ産の絨氈がある、調節装置のついたランプがある。西洋杉の箱に、土古耳の金貨が一杯だ。ルイ・フリツプ時代風の、立派な振り時計が動いてゐる……かういふ家で、タルタランさんは、貴賓扱ひの招宴にあづかつて、亞刺比亞騎兵の騎藝なんぞを見せられた……それは、どうするかといふと、ずらりと並んだ騎兵の一隊が、タルタランさんに敬意を表して、空砲の一齊射撃をやつて、外套をばつと撥ねて、日にきらめかす。鐵砲の煙が消え去ると、この家の主人の大官が、タルタランさんの前へ来て、勘定書を差出した……これがその、所謂亞刺比亞人の歡迎法だ。

かういふことは何處でもあつたが、何處へ行つても、獅子はゐない。巴里の新橋にゐないと同様、獅子の影も形も見えなかつた。

さはさりながら、タラスコンの英雄は、意氣沮喪をしなかつた。眞一文字に南へ突進して、晝はひねもす、灌木地帯に分け入つて、旋條銃の先つぽで、小さい棕櫚の木を引掻き廻して、そのたんびに「しつ。しつ」と仰有つた。夜になると、寝る前の二三時間、必ず一應見張をしたが……それもこれも無駄奉公。獅子先生は一向に現れなかつた。

ところが、或る日の夕方六時頃、わが一行は乳香樹の森を通つてゐた。四邊は葦色に暮れかゝり、所々の叢には、暑さでぐつたりした肥つた鶉が、びよこん／＼跳ねてゐた。時に、タルタランさんのお耳に聞えたのは、素晴らしい獅子の咆哮だ。尤も、非常に遠くから、微かに聞える、風の間に聞こえようやうなそれと思へるものだが、紛ふ方なく、あのタラスコンで、ミテエヌ猛獸團の小屋の影で、あんなにも度々聞いた、獅子の聲だ。

初め、わが大英雄は夢かと思つたが……その直次の瞬間に、やはり遠くからだか、益々はつきり、その咆哮がまた始まつた。すると、今度は、地平線の彼方此方に、士人の飼犬が吠えだした。駱駝の瘤の上のお方は、恐くなつて震へ上り、鐘詰と武器をしつかり押へた。

疑ひもなく、獅子だ……早く、早く、待伏せしよう。一分一秒、遅れてはならぬ。

丁度その近くに、古いマラブウがあつた。マラブウとは、隠者が生前に住んでゐたお堂で、今はお墓になつてゐる、白い圓屋根の古ぼけた建物だ。戸口の上の御厨子に、生前使用のスリツバ靴が、黄



色くなつて安置されてゐる。壁に一杯懸つてゐるのは、様々な奉納物で、外套の切れつばしやら、金  
絲やら、赤茶けた髪の毛やら、たゞごちや／＼とぶら下つてゐる。タラスコンのタルタランさんは、  
このお堂の蔭へ、公爵と駱駝を連れ込んで、自分だけ直様、獲物を待つて見張することにした。グレ  
ゴリー公爵は、ついで行かうと言ひ出したが、タラスコンの英雄は、びつたり断つた。獅子に向ふに  
たつた一人で行きたいから、と言つたが、それにしても、公爵閣下に、遠くへ行かないやうにと願  
ひし、何事も用心に如くはないと、財布を公爵に預けたものだ。それは、貴重書類と銀行紙幣で膨れ  
上つた、でかい財布で、もしや獅子の爪なんぞに、一枚でも抜かれては、大變だと思つたからで、こ  
れを預けて置いてから、わが英雄は究竟の足場を探した。

お堂の手前、百歩の所に、夾竹桃の小さい林がある。はや黄昏の、紗でもかけたやうに、暮れか、  
る空氣の中に、ふるへてゐる。その林の傍には小川があるが、水は殆ど涸れてゐる。これぞ絶好の足  
場と見て、タルタランさんは、型の如くに折敷の構へ。旋銃銃に手をかけて、眼の前の土手の砂に、  
獵刀ぐつさり突立てた。

夜が来た。森羅萬象の薔薇色は、葦色に變つてゆき、やがて、とつぶり深い青になつた……下を見  
ると、小川の小石の間には、輝ける水がちよつぱりあつて、丁度懐中鏡のやうに光つてゐる。これぞ  
野獸の水を飲む場所だ。あちら側の土手の斜面には、白い小徑が腫に見える。野獸どもの大きい足が

踏み固めた道であらう。末は乳香樹の森に消えてゐる。この怪しげなる道を見て、わが英雄はぞつと  
した。何しろ、亞弗利加の夜ときたら、枝がざわ／＼言ふやら、金狼の長く引張る遠吠やら、うろつ  
く獸の忍び足が聞えるやら、頭の上に、子供が咽喉を締められる時のやうな聲がするから、何かと思  
つて空を見ると、千メートルか、二千メートルの上空を、鶴の群が通つたり。妙な音に取り巻かれて、  
むづ／＼しずにはゐられない。わがタルタランさんの胸中に、如何なる思ひが湧いたのか、讀者諸賢  
は容易に御想像されるだらう。

タルタランさんの思ひたるや、何とも彼とも、言ひやうがない。可哀さうに、齒はがち／＼。砂に  
突立てた獵刀を、ちつと番をしてゐるタルタランさんの、お手下にある旋銃銃の銃身は、何かにぶつ  
て、カスタネットのやうな響を立てた……おやく／＼、讀者諸君は、不平を仰有るのですか。まあ、考  
へても御覽なさい。如何なる英雄であらうとも、一晚ぐらゐ、氣持の悪い晩があります。えらい動功  
を立てるには、必ず一度や二度の恐い思ひをしなければ……

正に左様。タルタランさんは恐い思ひをした。かうして待つ間中、ずつと恐がつてみたものだが、  
ちつと堪へて、一時間、二時間。ところが、一體全體、英雄の勇ましきには、限りがある。……すぐ  
の近くの、涸れた小川の川床に、何者かの蹙音がした。小石が轉げたのに過ぎないが、これを聞いた  
るタラスコンの英雄は、こはさの餘り、すつくと立つた。暗の中へ、無茶苦茶に、どかん／＼と二發



ぶつ放して、お堂指して一目散に逃げ返つた。突刺した獵刀を忘れたから、これは水蛇を馴らす程の剛勇な人物の魂に、ひどい恐慌が起つたことの記念として、十字架のやうに立つてゐた。

「助けてえ、公爵さま……獅子が……」

呼べど叫べど、返事がない。

「公爵さま、公爵さま、其處にいらつしやらないのですか」

公爵は其處にゐなかつた。お堂の白壁に映るのは、月に照らされた駱駝の姿だけで、その瘤が奇妙な影を見せてゐたが……グレゴリイ公爵は、書類と紙幣の財布を持つたまゝ、尻に帆かけて逃げちまつた……公爵閣下は、一箇月間、この機会を待つてゐたのだ……

### 六、到頭……

この冒険的にして、且つ、悲劇的なる一夜が明けると、朝早く、わが英雄は眼を覺ました。氣がつくと、公爵とお寶は正に無い。どつかへ飛び去つて、二度と再び歸つて來ない。所もあらうに、アルヂエリアの真中の、こんな小さい白いお堂に、たつた一人の我身ではないか。べてんに引懸つて、金を盗まれ、打棄られて、手頼りとするは、瘤が一つの駱駝君と、若干の小遣ひ錢。かういふ状態にた

ち到つて、初めて、タラスコンの英雄は、疑ひの心を起したものだ。モンテネグロを疑ひ、友情を疑ひ、榮譽を疑ひ、獅子をさへ疑つた。かくて、わが英雄は、ゲッセマネに於ける基督の如く、苦しさに堪へかね、大聲で泣いた。

さて、斯様にして、タルタランさんが、兩手を顔に押當て、旋條銃を膝に挟んで、物思ひに惱める風情で、お堂の戸口の前に坐り、駱駝がそれを眺めてゐる時、突如として、遙か彼方の正面なる、灌木地帯が二つに割れ、現れたるは、これ獅子。あれよと思ふ隙もなく、呆れ顔なタルタランさんの前十歩の所に遣つて來た。巨大なるその姿。頭をぐつと振り立て、物凄い咆哮一聲だ。この聲聞くや、お厨子の中の聖者使用のスリツバ靴さへ、びり／＼と顛へ上つた。

躍り上つて、鐵砲の臺尻を肩に、

「到頭」

と叫びざま……どをん……どをん。

びゆつ、びゆつ。物も美事に獅子の頭へ、二發ともに命中した……それから跡の一分間、烈日燃ゆる亞弗利加の空の一角に、恐るべき火花があがつた。腦の味噌の爆發だ。煙のやうな血のしぶき、赤い毛が散亂する。やがて、それも靜まると、タルタランさんの眼に見えたのは……二人のつぼの黒んぼで、眞赤に怒つて、棍棒振つて、こつちの方へ走つて來る。ミリアナアにゐた、あの二人の黒



んぼだ。

何たることだらう。タラスコンの英雄が、たつた今打留めたのは、あの盲目の獅子だ。モハメツド修道院出身の、哀れな盲目の乞食獅子だ。

今度こそは、實際危いところであつた。寄附金集めの黒んぼ二人は、怒り狂つて殴りつける。わが英雄のお身体を、粉々にでもしさうであつたが、時に基督教の神様は、救ひの天使を寄越して下さつた。それは即ち、サアベル腰に、小徑を遣つて来た。オルレアンスギユ地方の田園看守だ。

このお役人の厳しい帽子を見ると、黒んぼの怒りはびたりと鎮まつた。お上の徽章を光らせたこの人は、いとも平和な顔だが、威張り返つて、事件の調書をすぐ作つて、獅子の亡骸を駱駝に載せ、ぶつぶつ言ひ續けの黒んぼ二人と犯人に、跟いて来いと命令して、オルレアンスギユ町に向つたが、村に着くと、裁判になつた。

長い日敷を費した。大變な裁判であつた。

タラスコンのタルタランさんは、土人部落をへめて、アルヂエリアの一面を知り得たが、今此處で、アルヂエリアのもう一面も知ることになつた。これはアルヂエリアの田舎町で、やはり珍無類で、やはり恐るべき所だ。訴訟好きの連中がゐて、三百代言が一杯だ。裁判官と來たら、怪しげな人物だ。カフエの奥で相談するから、その白いカラアには、酒のとばつちりが掛かつてあるし、訴訟記

録はアプサントの匂がぶん／＼して、法律をかじるごろつきだ。裁判所の門衛でも、代理人でも、周旋人でも、みな印紙を貼つた紙に喰ひつく蝗みたいで、瘦せたひもじい連中だ。遣つてくる百姓の、長靴の胴まで嚙つて食ひ、玉葡萄の皮を一枚々剥ぐやうに、百姓の金を取つてしまふ……

先づ第一に決めるべきは、獅子を殺した現場が、行政區域か、軍用區域か、といふことであつた。事件は、最初、商事裁判所に屬してゐたが、次に軍法會議へ廻された。これを聞くと、感じ易いタラスコンの英雄は、城壁の下で銃殺されたり、穴倉の底に日の目を見ない生活をしたり、そんなところを直ぐ想像した……

厄介なことには、行政區域か、軍用區域かといふ境界が、アルヂエリアに於いては至極ぼんやりしてゐた……遂に一箇月の後、法廷へ引張り出されたり、陰謀の道具に使はれたり、亞刺比亞風の建物の中庭の真中へ、日に照らされて何時間も立たされたり、いろんなことであつた。獅子が殺されたのは、軍用區域だが、發砲した時、タルタランさんのお體は、行政區域にゐたものだ、と決定した。そこで、事件は民事裁判となつて、わが英雄に言ひ渡されたのは、裁判費用は別として、二千五百フランの賠償金を支拂ふべし、といふことであつた。

それをすつかり拂ふには、どうしたらいいだらう。公爵の拐帶を免れた、なにがしの銀貨などは、夙の昔に、裁判書類の紙代と、裁判官連中のアプサント代に化けてしまつた。



仕方がないから、獅子殺しのえらい人は、武器のトランクの錠を明け、一つ／＼賣飛ばした。鐵砲を賣る、短刀を賣る。馬來の短劍も、棍棒も……食料品の罐詰を、乾物屋さんが買つてくれた。膏藥の残りは藥屋へ賣れた。でつかい長靴は、方々渡り歩いた末、古道具店に落ちて來たが、この店には既に、完全無缺の携帶天幕があり、いづれも交趾支那の珍品として、高い値段が貼出された。

……すつかり支拂ふと、あとに残るは、獅子の毛皮と駱駝だけ。毛皮の方は、丁寧に荷作りして、タラスコンへ送つたが、名宛はえらい隊長さんのブラギダさん。(讀者諸君よ、この何よりの記念品が、如何なる結果を生じたか、いづれ先でお話しませう。) 駱駝はどうかと言ふに、アルヂエ市へ歸る役に立てよう、とお思ひになつたが、乗つて歸る積りはない。こいつを賣つて、馬車賃にしたかつた。これぞ正しく、駱駝による旅行法中、最もうまい方法であらうが、生憎とこの駱駝は、中々賣れない代物で、鏹一文も出し手がなかつた。

兎に角、タルタランさんは、どうにかしてアルヂエ市に歸りたかつた。早く歸つて、バイヤの青い胸當や、小粋なお住居や噴水なんかを、見たいにも見たいし、又、三葉形にくり抜いた、狭い廊下の眞白な床に寝つ轉がつて、佛蘭西からの金を待ちたかつた。かう思ふと、わが英雄は一刻の猶豫もしなかつた。悲痛な氣持を抱いてゐるが、決して閉口垂れ切らないで、徒歩旅行を始めたものだ。毎日の行程はほんの僅なものであつた。

かゝる悲運に到達しても、タルタランさんを棄てないのは、たつた一人、例の駱駝で、この不可思議な御主人に對して名狀すべからざる愛を注いだ。オルレアンズギイユを出て行くタルタランさんの後から、忠實無二の家來として、一步たりとも離れまいと、歩調を合せてついて來た。

最初の間、タルタランさんは、これに大層感動した。この忠實、何を顧みずして盡す忠誠、これがタルタランさんの心を打つたが、それより何より、この獸は、至極便利に出來てゐて、食物なんぞ遣る必要がない。そこで大いに悦んだが、四五日経つと、タラスコンの英雄は、こいつがしよつちう跟いて來るのに、厭氣がさした。この道伴れがあると、憂鬱になる。大失敗の數々を、一々思ひ出させるから、それが第一氣に喰はないし、さうなると又、一事が萬事で、駱駝の生れつきの、泣き出しさうな顔附や、背中の瘤や、鷺鳥を獸にしたやうな歩きぶりまで、癢に觸つて仕方がない。つまるところ、駱駝に反感を持ち始めて、別れたいとばかり思つた。ところが、駱駝は頑として應じない。タルタランさんが隠れても、早速に探し出す。駢けて逃げると、駱駝の走る方が餘程早い……困り果て、タルタランさんは、

「畜生め、畜生め」

と言ひながら、石を投げた。駱駝は立止つて、悲しい顔で、こちらを見るが、やがて主人が歩き出すと、またぞろ跟いて來て、直ぐ追つく。おしまひには、タルタランさんは諦めた。



八日間の慘澹たる旅をすると、青葉の彼方に、アルヂエ市の見晴し臺が、白く光つて見えて來た。埃まみれの、へとくになつたタラスコンの英雄は、忽ち元氣を取返し、市の門まで大急ぎ。騒々しいムスタフ街道を、どんく歩いていらつしやると、何時の間にもやら、前後左右に、ズアアブ人や、ビスクリ人や、マホネエ女などが一杯で、駱駝と道行の有様を、じろくそいつらに見られてゐる。かうなると、もう、勘忍袋の緒がきれた。

「いかん。絶対にいかん。アルヂエの市へ入るのに、こんなけだものを連れて行かれるか」

と獨り言をいひながら、車の雑踏を幸ひに、畑の中へちよいと逸れ、溝に體を忍ばせた……

と、直次の瞬間に、お頭の上に見えたのは、街道の真中を大跨ぎに行く駱駝先生。頸を長くつん出して、心配さうな様子で、どんく行つてしまつた。

かうなると、重荷が下りた。隠れ場所から這ひ出して、市中へ入つて、曲りくねつた小路を行つたが、この道は、御所有の小さい果樹園の、塀に沿つた道であつた。

### 七、弱り目に祟り目

モオル風の我が家の前に辿り着くと、タルタランさんはおつ魂消た。とつぷりと日が暮れて、人通

りは殆どないのに、アアチ形の低い門は、黒んぼ女が忘れたらしく、まだ明けつ放してあるから、中の様子が筒抜けだ。笑ひ聲や、コップのがちや／＼鳴る音や、三鞭酒の栓をぼんと抜く響やら、騒々しいこと、陽氣なこと。その物音の中でも、一際高く聞えてくるのは、歌をうたふ女の聲で、澄渡つた聲を張り上げて、愉快さうに、

うるはしの乙女マルコよ

くさ／＼の花に飾られし

廣間に踊ることこそは

おんみの好むところなれ……

これを知りたるタラスコンの英雄は、眞蒼になつて、

「これは怪しからん」

と言ひながら、つか／＼と中庭へ入つた。

可哀さうなタルタランさん。なんとといふ光景を見せられたのだらう……狭い廊下の、三葉形のアアチの下に、饅やら、饅頭菓子やら、座蒲團やら、煙管、太鼓、ギタアなどが、一杯散らかつてゐる眞



中に、立つてゐるのはバイヤだが、青い胸當も上衣も脱いで、銀色の絹の半襟一枚に、淡紅色のだぶだぶしたズボンを穿いた、しどけない姿で、「うるはしの乙女マルコ」を歌つて、高級船員の制帽を耳まで冠つてゐる……その足許には、愛情と砂糖菓子を鱈腹味はつたバルバツスウが、莫産の上に坐り込んで、歌を聞きながら、笑ひこけてゐるのだから、このバルバツスウ船長は、實にどうも、太い奴だ。

タルタランさんが青ざめて、瘦せ衰へて、埃だらけのお召物で、濫褸のやうな土耳其帽をちよいと載せ、眼ばかりぎりりとさせて、この場に出現すると、この土耳其マルセイユ同盟の歡樂場面は、忽ちにして一變した。バイヤは、吃驚した兎のやうな、小さい叫びを擧げたかと思ふと、家の奥へ逃げ込んだ。バルバツスウさんは、面喰ふどころか、却つて餘計面白さうに笑ひながら、

「やあ。どうですな。タルタランさん。あなたはあんなことを仰有つたが、さあどうです。あの女は佛蘭西語を知つてゐませう」

タラスコンのタルタランさんは、憤怒の形相すさまじく、どしんと踏出して、

「船長」

と言つた途端、二階から、

「お止しよう、見つともない」

と、立派なマルセイユ訛りで叫んだのは、佛蘭西語さへも知らない筈のモオル女で、さう叫んだ時の體附まで、一廉の姐御らしい、凄美しさ。吃驚しきつたタルタランさんは、太鼓の上に尻餅をついた。

バルバツスウ船長は、鹿爪らしい調子で、

「だから言はないこつちやありません。アルヂエリアの女どもを、信用なさらん方がいゝ、と申上げたのに。やはりその、モンテネグロの公爵の一件と同様ですな」

タルタランさんは頭を上げて、

「公爵の居どころを御存知ですか」

「知つてゐる、知らないの。遠方ではありません。これから先五年間、ムスタファの居心地のいゝ監獄にゐますよ。あの野郎め、現行犯を押へられましてね……今度も今度ですが、なかに監獄は初めてぢやありません。公爵野郎め、先にも三年間、何處か内地の監獄に……あゝ、さういゝ、たしかタラスコンだと思ひますが」

「タラスコンに……」

と呶鳴つたのは、タルタランさん。今しも忽然事情が分つて……

「だからこそ、あいつ、町の片側しか知らなかつたのです……」



「さうでせうとも……タラスコンの町の真中の、監獄から町を見たのではねえ……兎に角、タルタラ  
ンさん、こんな土地へ来たなら、いつも眼を明けてゐないと、飛んだ目に遇ひます……あの坊主の出で  
来た、あなたの一件なんぞも……」

「何の一件です。坊主がどうしました」

「ちえつ、仕様がないなあ……お向ひの坊主ですよ……この事件はこの間、アクバル新聞に出ました  
から、アルヂエ全市の笑ひ草になつてゐます……その坊主め、櫓の上から、お祈りの文句を唱へる次  
手に、あなたの鼻の先で、女を口説いたし、おまけのことには、アラアの神の加護を祈りながら、逢  
曳の打合せをしやがつた……」

散々な目に遇つたタラスコンの英雄は、呻るやうに言ふのには、

「この土地にあるのは、そんな悪人ばかりでせうか……」

バルバツスウさんは、哲學者のやうな顔になつて、

「何しろ、新開地のことですから……それはそれとして、悪いことは申しません。わたしの言ふこと  
を聞いて、早くタラスコンへお歸りなさい」

「歸るのですか……歸るのだ、と一口に言ふだけは言へますが……お金が……あなたは御存知ないで  
せうが、わたしは、あちらで、沙漠の真中で、奴等にひどくしぼられました。追剝に逢つたも同然で

……」

「そんな御心配は御無用です。明日、ズアアブ號が出帆しますから、お望みならば、歸國の御便宜を  
計らひませう……わかりましたかね……さあ、さあ、さうと決まつたら、あなたには、たつた一つ、  
しなければならん仕事があります。まだ三鞭酒も何本か残つてゐるし、菓子も半分はそのまゝで……  
まあ、其處へお坐りなさい、今までのことは何事も、綺麗さつぱり、水に流して……」

タラスコンの英雄は、威嚴にかゝはると思つたから、ほんの一分間躊躇したが、やがて勇敢に坐り  
込んだ。飲み始めると、コツブの音を聞いて、パイヤが二階から下りて来て、「うるはしの乙女マル  
コ」の歌を終まで歌つた。酒盛は續いて、真夜中過ぎにまでなつたものだ。

午前三時頃、頭はぼかんとして、足は重く、タルタランさんが町を歩いてゐた。親友の船長を、そ  
の宿屋まで送り届けて、今しもお家へお歸りのところだ。お寺の前に来ると、坊主のことやら、笑ひ  
草にされたことやら、急に思ひ出したものだから、こいつは一つ、復讐せずばなるまいと、至極尤も  
千萬な理窟に氣がついた。お寺の門は明いてゐたからずつと入つて、莫産を敷いた長い廊下を、どん  
どん行つた。階段を上り、また上り、遂に遣つて来たのは、小さい土耳其風の祈禱部屋だ。切抜細工  
の鐵の燈籠が天井からぶら下つて、白い壁の上に、不思議な影を映してゐる。

坊主はこの部屋にゐた。長椅子に坐つて、でかい捲帽子をつけて、裏に毛がついてゐる白い衣で、



パイプを脚へてゐる。その前には、大きな硝子器に、清らかなアブサント酒が満々とあつて、この器を坊主は嚴かに打つ。信者にお祈りをしろと知らせるべき、その時刻が来るのを待つてゐるのだ……タルタランさんの姿を一目見ると、吃驚してパイプを落した。

胸に一物のあるタルタランさんは、

「おい、坊さん。一口も物を言ふな。その衣と、捲帽子を寄越すんだ……」

土耳其人の坊さんは、ぶる／＼顫へて、捲帽子でも、衣でも、お望み次第、何でも脱いで差出した。タルタランさんはこいつを取つて、好加減に着て、いとも莊重な足取りで、櫓の見晴らし臺の上に現れた。

遠くの方に、海が光る。月の光に照らされて、白い屋根が燦いてゐる。海からの風が傳へるのは、ゆるやかなるギタアの音……タラスコン生れの招禱僧は、一寸心を引緊めてから、兩腕を高く擧げ、とてもきい／＼鋭い聲で、聖歌を唱へ始めた。

「アラアはアラアなり……マホメットは出鱈目を言ふ爺なり……東洋も、コオラン經も、副主教めらも、獅子ども、モオル女の奴等も、みんな鏢一文の値打もないなり……『どるこ』んなんぞ、何處にもゐないなり……ある奴は、いかさま師ばかりなり……タラスコン萬々歳……」  
わがおえらいタルタランさんは、亞刺比亞語やら、ブロヴンス語やら、色々な言葉を無茶苦茶にま

せて、大音聲、山にも、海にも、町にも、原にも、東西南北、地平線の端まで、響き渡れと、悪口を並べた。タラスコン生れの本性を出して、痛快な悪口を散々に呶鳴つた。すると、ほかのお寺の招禱僧が、澄渡つた、重々しい聲で、タルタランさんに答へたが、方々の櫓に、だん／＼とこの聲が起つた。これを聞いて、山手に住む信者達は、一人残らず、胸を打ちながら祈るのであつた。

## 八、タラスコン。タラスコン

時は正午。ズアアブ號は煙を出してゐる。もう直き出發するところだ。かなた陸地の、カフェ・ワランタンの露臺には、將校が大勢ゐて、望遠鏡で船を見る。大佐殿が眞先で、位の順に次々と、望遠鏡を覗いては、あの小さい船は、佛蘭西に歸るのだなあ、仕合せな船だなあ、と感慨に耽る。將校連には、これがせめてもの樂みであつた……こなた入江には、小波が光る。土耳其製の太い大砲は、波止場の砂に埋れてゐるが、その閉鎖機が日を受けて、きら／＼輝く。船の乗客が集つてくる。ビスクリ人やマホネエ人の人足が、荷物を解に積込んでゐる。

タラスコンのタルタランさん、この人には荷物が一つもない。海軍通りをぶら／＼と、バナナや西瓜が一杯の小さな市場を通り抜け、バルバツスウさんと一緒に遣つて來た。不幸なるタラスコンの英



雄は、このモオルの岸、アルヂエリアに於いて、武器のトランクを人手に渡し、希望の夢を破られてしまった。両方のお手々をポケットに突っ込み、いとも淋しい恰好で、タラスコンへ歸る船に乗らうといふところだ……船長用のランチに乗り移ると、その時突然、廣場の向うから、いきせき切つたる一箇の動物、タルタランさん目覓けて、轉がり落ちるやうにして駈つけた。これぞ、かの忠實な駱駝で、二十四時間のその間、アルヂエ市をさ迷ひ歩いて、御主人様を探してゐたものだ。これを見たるタルタランさん、顔色を眞蒼にして、知らん振りをつた。ところが、駱駝は大悦び、波止場のあちこちを跳び廻る。仲好のタルタランさんを、優しい眼でちつと見る。その悲しげな眼の光は、次のやうなことも言ひたさうだ。

「連れて行つて下さいよ。わたしをその艇に乗せて下さい。こんな土地にゐたくないのです。こんなボオル紙細工の亞刺比亞のやうな、出来損ひの東洋に、もう一日もゐたくありません。機關車が出来、乗合馬車が走る、といふ譯で、わたしのやうな、瘤が一つの駱駝は流行遅れになりました。さあ連れて行つて下さい。あなたは最後の土耳其人で、わたしは最後の駱駝です……お互ひに離れてはいけません。ねえ、さうでせう、タルタランさん……」

船長が訊ねるには、  
「あれはあんたの駱駝かね」

「どう致しまして、とんでもない」

とタルタランさんは答へたが、こんな妙な動物を連れて、タラスコン入りをするのかと、思へば思ふほど、ぞつとしたからだ。艱難辛苦を共にした、あれ程の親友を、薄情にも他人だと言つてから、アルヂエリアの土を足で蹴つて、艇をついと沖へ出した……駱駝は水を嗅いだ。頸を長くした。關節をがく／＼言はせた。艇を追つて、ざんぶとばかり、海の中へ飛び込んで、ズアアブ號指して、泳ぎ始めた。水面から出てゐるのは、瓢箪のやうに見えるその瘤と、希臘羅馬時代の三層櫓船の船首のやうな、その長い頸だけであつた。

艇と駱駝は、飛脚船の船腹へ、同時に着いた。

マルバツスウ船長は、大いに感動して、

「やれ／＼、可哀さうな駱駝だなあ。こいつは、船に乗せて行つて遣らう。マルセイユに着いたなら、動物園に寄附しよう」

捲揚機と綱の助けを借りて、駱駝を甲板へ引揚げたが、水に濡れて重いので、中々大變であつた。やがて、ズアアブ號は出帆した。

二日間の航海中、タルタランさんは、大抵ひとりで船室に閉籠つた。海が荒れた譯ではない。土耳其古帽も大して惱んだ譯ではない。ところが、駱駝の畜生め、御主人が甲板に現はれると、いそ／＼傍



へ寄つて来て、いやらしく體を擦りつける……タルタランさんとの好い仲を、世間に吹聴したがつて……

船室の窓に鼻を押し付け、タルタランさんは時々アルヂエリアの空の青い色を眺めたが、一時間間に、その青い色は褪めてきた。やがて、或る朝、銀色の霧を通して聞えたのは、嬉しやマルセイユの寺々の鐘だ。港に入つた……ズアアア號は錨を下した。

わが英雄は、お荷物一つない身軽さで、何にも言はずに船を降り、マルセイユ市中を大急ぎに歩いたが、いつも心に懸つたのは、駱駝が後から跟いてくることであつた。タルタランの列車の、三等室にお坐りになると、其處で始めて、安堵の吐息を洩らしたものだ……その安心も束の間で、マルセイユから二里ぐらゐの處で、車中の人が窓から首を突出して、大聲擧げて、吃驚した。タルタランさんも、何事かと思つて、ひよいと見ると、こりやどうぢや……なんと、またぞろ、例の駱駝が、線路を傳つて、ぐいぐいと大跨に、列車の跡から樂々と跟いて来る。タルタランさんは呆然自失、眼を閉ぢて、隅っこへ縮こまつた。

失敗續きのこの遠征であつたから、匿名でこつそり、歸りたかつた。ところが、こんな厄介な四足が一緒では、さういふ都合に行く筈がない。なんとといふ凱旋だらう。一文無しの、獅子無しの……駱駝連れとは……

「タルタラン……タルタラン……」

否でも應でも、降りなければならん……

これはまたどうした譯だ。わが英雄の土耳其帽が、列車の外へ出るか出ないに、わつと擧がつた喚聲は、

「タルタラン萬歳」

で、停車場の圓天井でも、硝子でも、びりく顛へた大騒ぎだ。

「タルタランさん萬歳。獅子狩の名人萬歳」

續いて起つたのは、嚙喰たる樂の音と、天地も裂けんばかりの男聲合唱……

タルタランさんは、穴があつたらもぐり込んで、死んでしまひたいと思つた。皆にからかはれてゐるのだと思つた。いやしく、さうでない。タルタランの全町民は、帽子を振りく大歓迎だ。えらい隊長さんのブラギダさんを初めとし、鐵砲屋のコストカルドさん、裁判所長さん、藥屋さん、帽子打御連中の幹部連が、ばらばらと駈寄つて、わが英雄を取巻いて、素晴らしい凱旋行列を作りつ、梯子段を降りて行つた……

これも亦、不思議なる哉、屋氣樓の仕業であつた。ブラギダさん宛に送りつけた、あの盲目の獅子の皮が、かういふ騒ぎの原因であつた。大して立派でもないこの毛皮が、俱樂部の一室に陳列される



と、タラスコンの町中は申すに及ばず、やがては南部地方の隅々に至るまで、我等の誇りだと得意になつた。「腕木信號」新聞に何遍も記事が出た。壯烈極まる狩の實況が報道された。誰言ふとなく、きまつたことは、タルタランさんが殺したのは、たつた一匹の獅子でなく、十頭、二十頭、もつと澤山の獅子で、獅子のジヤムが出来る位だ、といふことであつた。タルタランさんがマルセイユに御上陸の當時には、御自身何にも知らなかつたが、既に有名な人物となつて、誰か、早速電報を飛ばしたから、故郷の町へお着きになる二時間前、そのお歸りは町中に知れてゐたのだ。

さてしかし、町中を擧げての大歓迎は、わが英雄の跡から、奇妙な獣が埃と汗にまみれて現れ出で、停車場の階段をびよこんくと降りた時、その悦びが絶頂に達した。タラスコンの連中は、昔語りの龍のタラスクが再来したのか、と一瞬間思つた位だ。

タルタランさんは、町の連中に安心させようと、

「これは、わしの駱駝ですよ」

タラスコンの太陽は、實に美しい太陽だから、これに照らされたタルタランさんは、當意即妙の諷刺が言へるやうになつた。駱駝の單瘤を撫でながら、

「何物にも代へ難い、大事な獣ですよ……こいつは、わしが獅子どもを遣つつけるのを、始終傍で見てるました」

かう仰有つてから、ブラギダ隊長さんの腕を親しげにお取りになると、隊長さんは幸福を感じて眞赤になつた。やがて、駱駝を従へて、帽子打御連中に前後左右を守られて、老若男女の喝采を浴びて、わが英雄はしんづくと、パンヤの木のあるお宅を指して、そのお御足を運ばれたが、もうその途中で、物凄い狩の事實談を、そろそろお始めになつた。

「まあ、諸君。考へても見給へ。ある晩のこと、サハラ沙漠の眞只中……」

## 獅子狩の人終



プラアグの大學生



# ブラアグの大學生

日が暮れて、夕闇の影が、次第に這ひ寄つて來た。私はもう一度、あの古い墓地の方へ、足を運んで行つた。幾千年もたつたかと思はれる大樹の生ひ茂つてゐる、あの墓地は、軽い傾斜をした丘の上、に横たはつてゐる。私はその一番高い處まで、登つて行つたのである。其處こそ、多くの古い墓が、風雨に曝されて、読み難くなつた碑銘のまゝ、竝んでゐる處である。

その墓の文字を探りながら讀んでみたいといふ氣が、氣味悪く、まるで苦痛のやうに、私の心を誘ひ、刺戟してきたのである。遠い昔の古代ルウネ文字は、祕密の咬きとなつて、感覺を吹きめぐる永遠の息吹だ。

二本の柳が、夕風の中に囁きながら、死んだ人を護つてゐる。その柳の前の墓石の一つに、私は、風雨に曝された文字を、一字づつ探り讀んでみた。

\* \* \*

パルドイン  
の墓

ブラアグの  
大學生

最高の  
劍士

千七百九十八年生  
千八百二十年没

悪靈と争ひて、勝利を失ふ  
墓を訪ひ給はん人よ

その心を哀れみて、祈りを賜へ

\* \* \*

あゝ、ブラアグ。  
祕密に満ち、最も暗い魂の奥底から呻き上る、さ迷へる熱望に満ちた町だ。私の眼の下に、迷宮



のやうに見えて、擴がつてゐる。ひよいと掴めさうな位、すぐの近くに見える。瘦せた塔がある。寶石を鑲めたエンツエル會堂がある。堂々たるゴシック建築のファイト寺院がある。血が黒く乾いて出たのかと思はれる、ぞつとするやうな奇妙な彫刻のある、これらの異國風の建物が、入りまじつてゐる町を目蒐けて、フラドシンの山から夕靄が降りてくる。お寺の高い階段を傳つて、そろりと降り、でこぼこの敷石の中へ入り込むのである。私の眼は、貧乏人町の、ひつそりした、曲りくねつた路次を眺め、崩れた塀を見渡し、聖者「ボムクのヨハン」の石像がついてゐる、石作りのカアル橋を見る。ロココ建築の王宮は風雨に古びて、その高い石のアアチが、悲痛な落着と華かな威嚴を示しつつ、ほかの町家の古ぼけた門の竝ぶ上に、聳え立つてゐる。

\*

\*

\*

\*

夕風に乗つて雨が來た。暗い常緑木に、しづくの音がする。濕つてきた土の上で、踏みにじられた薔薇の花びらが光りだした。蝙蝠が近くのお堂のまはりを、ぱたくと飛び廻る。私は、とつぷりとした暗闇に包まれた。單調な雨の囁きが、微かに聞える。時々風が起つて、古びた墓石に雨を叩きつける。

大學生バルドインよ。お前はどんな人間であつたか。

バルドインよ。お前は、氣違ひのやうに荒々しい遍歴學生であつた。人生といふ強大な渦に巻き込まれた男だ。一文無しになつた博奕打だ。氣位の高さを、最後まで捨てなかつた莫迦者だ。お前の若い、唄を好む唇には、あれほど大勢の女が接吻したが、そのお前の口がとぎれてから、最早長い年月が経つた。お前は、平凡な善良な市民ではなかつた。——たゞの無頼漢でもなかつた。お前は、闇黒を支配する悪魔と、密約を結んだものだが、それは決して金が欲しいためではなく、人間らしい生活を樂まうといふ、己むにやまれぬ欲望からであつた。

大自然と、仁慈にまします神様とが、お前に魂を與へたのは、何のためであつたか、といふことをお前はよつく承知してゐながら、その在り來りの掟を打ち破つた。地上の人間どもは、小さな範圍の境を越えないで、毎日の義務をたゞ敬虔に、たゞ後生大事に守つて、永遠の神様の掟を破るまい、とばかり思つてゐる。ところが、お前は、境を飛び越えた。神を試みた。人生と、深奥なる秘密との間に、卸されてゐる帷を、さつと引き分けようとした。我々人間に見せまいとして、大自然が闇黒や恐怖のみで満たしてゐる、荒漠たる空間に、お前はまつしぐらに突進しようとした。だから、神は、自然は、永遠は、お前を不屈な奴だと呪つた。お前の心眼は一擧に曇つてしまつた。我々が見ることとを許されてゐない、深い底を覗かうとしたので、お前の反抗心は無殘な敗北をして、打ち碎かれてしまつたのだ。



バルドインよ、大學生、ブラアグ最高の劍士よ——

\*

\*

\*

\*

「諸君。今日は決闘日だ。勝負をしたい人は誰でもやり給へ。さあ、刀を交へたい人は、誰と誰だ」  
かう叫んだのは、茶色の髪の學生で、膝の上まで達する乗馬の長靴を穿いて、紐飾りのついた粗い羅紗服を着てゐる。これを聞いて、歡呼の聲がどつと湧いた。ブラアグの町はづれ、古い酒場のトロヤ亭の庭、千八百二十年五月の太陽が烈々と照る、鬱蒼たる菩提樹の古木の下、大學生の集まりは今やとみに活氣を呈したのである。

各々の前にある麥酒の大コップを傾けて、一滴も剩さず呑み乾して、テーブルから立つた。あの叫んだ學生のところへ、方々から學生達が歩み寄つたが、違ふ俱樂部に屬してゐるので、作法通りの無骨なお辭儀をして、手短かな挨拶を述べる。それから、決闘の世話人たる今の學生のテーブルの上へ、その内側に、各自の名前と俱樂部の名が書いてある帽子を投げ出した。

やがて、皆はぞろ／＼と、大廣間に入つた。窓はすつかり明け放してある。同じ俱樂部の學生は、故參も新入生も一團になつて、それ／＼席を占めた。皆の顔は緊張しきつて、熱にうかされたやうだ。皆の心は、あの有名な亂暴學生クレプスが、今日は誰を遣つ付けるだらう、と期待してゐるのである。

「飲んで、飲んで、飲み續ける。付合ひを知らない莫迦野郎は、お家にすつ込んでゐるが、おれ達はそんな眞似をしないぞ」

と、誰かが晴々と叫んだが、その聲のした方を見ると、其處の戸棚へ、丁度今、酒場の小僧が、ピルゼン麥酒の大樽を擔ぎ込んで、どしんと音をさせて入れたところだ。そのあたりのテーブルから、歌聲が湧いて、廣間中がそれに和して、怒濤のやうな騒ぎになつた。

食はんかな、飲まんかな、我友よ

幾代を経たるその後は——玉の杯散りて跡なし  
幾代を経たるその後は——玉の杯散りて跡なし

拍子を取りながら、舌の纏れた低音が歌を嘯鳴る間に、故參學生の眼が物凄く光つた。酒場の前



に、階段のついた大きな馬車が止つて、その中から、薔薇色の顔に髭のない、又はあつても生髭の新入生たちが、決闘の道具を出して、廣間へ運んで来た。その荷をほどくことを監督するのは、俱樂部の小使のフアックス老人で、海豹のやうな眼をして、人の好きさうな作り笑ひを顔中に浮べてゐる。テエブルに就いてゐる若い學生で、違つた俱樂部員との決闘を、先程申込んだ連中は、下つ腹をそつと擦られたやうに感じて、實に奇妙な顔をしながら、繻帶や、血のこびりついた襟卷や、胸甲や、革の籠手などが、荷物運びの新入生によつて、廣間のうちの空いた場所に並べられたり、鋭い細長い劍が、薄氣味悪い笑ひを洩らす決闘世話人の學生によつて、馬の鞭のやうにびゆん／＼振り廻され、試されるのを、おそろしく眺めてゐる。

ボツエナといふ名前の、豊かな胸の給仕女は、黒い髪のツアブレルと、金髪の、ひよろ長のフォンダアルとの、二人の學生に挟まれて、前掛けの紐をほどかせ、びつちりした天鵝絨の袖なし襦袢を掴ませて、きやつ／＼と騒いでゐる。窓の傍の壁が凹んだ小さな部屋では、今、まだ子供の新入生が繻帶を巻いてもらつて、決闘の用意をしてゐるが、眼の縁の黒ずんだ中から、瞳を輝かせて、惱ましい眼差しにこの給仕女を遠くから眺めたが、女はそんな眼差しに氣がつかない。「プロオジツト」——「健康を祝して」——「有難う」といふ若々しい叫びが廣間中に飛びかした。大コツブが打ち合はされる。煙草の煙は學生の頭の上に濛々とたちこめて、明けた窓から、青い雲となつて、春の空へ出てゆく。

「食はんかな、飲まんかな、我友よ」——と歌ひながら入つて来たのは、今日の相手がまだきまつてゐない、大男のクレプスで、その大砲のやうな長靴で、床板を踏み轟かして遣つて来た。顔附はといふと、誰かゞテエブルに載つて、麥酒のコツブを舐めさせてゐる、俱樂部の飼犬のブルドッグに、驚く位よく似てゐる。

この大男を見ると、皆の口から、

「バルドイン」

「バルドインは何處にすつ込んでゐる」

といふ叫びが突いて出た。バルドインこそ、この男の相手だ、と思つたからである。

「バルドインは庭に腰掛けて、不景氣な顔をしてゐるぞ」

と子供のやうな聲が、隅つこのテエブルから呶鳴つた。

「あいつ、この頃はいやに考へ込んでゐる」

「佛蘭西病でもしよひ込んだかな」

と言つたのは、黄色い帽子の學生で、物知り顔にくす／＼笑つた。

「さうだとも。今學期中、發展し過ぎやがつたからな」



これを聞いて、大反対を唱へたのは、のつぼのフォンダアルで、  
「莫迦なことを言ふない。あいつと來たら、頑丈一方。病氣の方がへこたれて死んでしまふぞ」  
「静かにしろ、ルベルト對ナブラチルの勝負」

あの生髭の新入生は、身支度を整へて、勝負の場所に進み出たが、あたりを見廻すと、給仕女のボツエナは何處へ消えて、自分の働きを見物してくれないので、すくなからず情なく思つた。

「さあ勝負」——「刃を合せる」——「合せたな」——「よし」——「そらつ」

するる——へん——刃は羽が飛ぶやうにぶつかつて、日光に閃いた。相戦ふ二人の周圍に、學生たちはぐるりと環になつてゐるが、興奮してゐる者もあれば、冷然と手竝を計る者もあり、つまらん勝負だと輕蔑する者もある。脇に立つてゐる一人の審判官は、鉛筆と紙きれを手にして、勝負の模様を書留め、血の出た時を記録する。

くりるるるるる——へん——すすす——。學生は大勢テーブルに就いてゐるが、こんな新入生の勝負には、大して力瘤を入れなかつた。給仕女のボツエナは、コップを澤山載せた盆を運んで戻つてきたが、嬌態をつくつて體をゆすりながら、すん／＼通り過ぎた。小さい勝負には見飽きてゐるから、戦ふ二人に眼もくれなかつた。

ぢやん、といったのは、戦ふ二人の間へ、一人の介添人が下から劍で衝き上げた音だ。「やめい」

と審判官は言つて、片手を舉げた。勝負をやめた學生が椅子に腰掛けると、顔のあたりを縛つてやり、二針三針傷を縫ふ。さうされながら、學生は、消えたパイプにまた火を點けて、平氣らしい顔で吸ひだすが、顔色は壁のやうに眞白だ。

かういふことが行はれる間、窓際にある庭のベンチに、ずつと腰掛けて、パイプをふかしながら沈みきつてゐたのは、一人の學生である。笹縁のある上衣が、傍のテーブルに置いてあり、脇にある黒い杉犬はその番をしてゐるやうだ。

傷を受けてぐつたりとなつた學生を、中年の醫者が頻りに介抱してゐると、その相手は、元氣好く笑ひながら、陶器の鉢で手を洗つたが、その間にもう、次の一組が用意をして出てきた。

庭のベンチの學生は、眼を泳がせるやうにして、ぼんやり何處かを見詰めてゐる。その眼の色は、格別なんといふ色もなく、青いとも言へるし、緑だとも言へるし、灰色だとも言へる。きりつとした眉だけが、見る人に深い印象を與へるもので、顔附を硬い感じに、なんだか薄氣味の悪いものに見せてゐる。細面の褐色の顔は、熱情的な、多少放蕩をした青年のやうに見える。良家の家庭で嚴重に育てられたが、今やあらゆる束縛から解放されて、自由な廣い世界に遊び暮した青年らしい。茶色の髪がくし／＼になつて、額に垂れてゐるが、それを時々學生は、負けず嫌ひらしく素早く頭を動かしては、うしろの方へ投げ返してゐる。



違つた審判官が現れて、席に就いた。次の勝負の二人を呼んだ。審判官の懸聲が響いた。麥酒をがぶがぶ飲む。煙がたちこめる。決闘通らしい議論が、其處此處のテエブルに起る。といふことが相變らず續いた。

「あれはバルドインだ」

と、だしぬけに叫んだのは若いツアブレルで、つと立ち上つて、窓の向うの學生に眼配せした。バルドインはベンチを離れて、廣間に入つて、ツアブレルとフォンダアルに會釋した。につと笑ふと、その美事な白い齒が、眞珠の紐飾のやうに輝いた。

\* \* \*

今度の勝負は中々手間どつた。二人とも未熟者で、長い劍を無茶苦茶に振廻してばかりゐた。介添人は同じ俱樂部員に應援して、叱るやうな聲で、

「上段だ。下段だ。ぐつと衝け。おれがちやんと教へたのに」

フォンダアルは笑ひだして、

「何を言つてやがる。あのルベルトの奴、匙なんか振り廻して、模範を示すつもりだぜ」

雙方に各々二三箇所から血が出たので、中止になつたが、危険な傷ではなかつたからまた始めた。

いくらやつても勝負がつかないで、分けになつた。二人が道具を外す間に一同は合唱した。

なつてゐないは新米の勝負

腕に覚えがあるならば

下段に構へて衝きを入れ

樽の栓をば抜いたやう

血の噴水が出来ようものを

くりつく、くりつく、くりつく、くりつく

くりつく、くりつく——くりつく

たつた今までバルドインのゐた窓に、淺黒い娘の顔がちらつと見えたかと思ふと、娘はもう廣間に跳び込んできた。眞黒な髪が渦を巻いて、低い額にかぶさつてゐる。血のやうに赤い唇には、さすちひの身の上を物ともしない不敵な魂を見せて、晴々と笑つてゐる。

「おう、ライドシユカ。ヂブシイの娘」

と叫んだのはルベルトである。



娘は野の花を盛つた籠をかへて、學生たちの間を走り廻つた。風情に乏しいその花を、學生たちは氣前よく買つて、娘と一緒に聲をたて、笑ひ、娘のために一杯飲み、娘にも飲めと勧めた。その様子で見ると、皆と仲好しのやうであつた。

「踊れ。おい、踊れ」

と囁鳴つたのが、先祖は野蠻民のグンダル族かも知れない、偉大な體格のクレブスで、いきなり娘の腰を抱いて、テエブルに載せた。すぐ、自分は壁からギタアを卸して、弾き始めた。すると、ヂブシイの娘は麥酒のコツブの間で踊りだした。學生たちは、手拍子を打つたり、コツブや劍でテエブルを叩いたりしながら、踊りに和して唄をうたつた。

バルドインだけは歌はない。その眼は、ヂブシイ娘の向うの方を見てゐる。無論、娘の若々しい美事な體は眼に入つてゐるが、そんなものを何とも思はない。心配があるので、浮かない顔だ。そのバルドインがふと見ると、大男のクレブスはギタアを抛り出して、ライドシユカがテエブルから飛び降りたところを、大手を擴げて抱きついた。

笑ひながら言ふのは、

「おれの伴奏はうまかつたらう。さあ、お禮の印に接吻一つ」

娘は猫のやうに身をくねらせて抵抗した。これも笑ひながら言ふのは、

「いけないのよ。あなたにも、だあれにも」

クレブスの血はたぎつた。抵抗されたので、いよ／＼欲しくなつて、

「接吻一つだ。おれぢやあないか」

と囁鳴つた。其處へツアブルルが取做し顔に口を出して、

「おい、放してやれよ。其奴はバルドインの跡ばかり追蒐けてゐるんだ。君も知つてゐるだらう」

クレブスはまた囁鳴つて、

「バルドインなんぞ、好加減に思ひ切れよ。こちらばかりで先知らずといふ譯だが——おまけに、その先様は、この間つからへこたれ通しぢやあないか。おれにしるよ。こんなに可愛い奴のくせに」

と言つて、大きな手で娘の體を撫で廻した。娘は離れようとしたが、どうしても駄目であつた。クレブスの荒々しい手は胸のあたりを掴み、眼は欲望に燃えてきらく／＼光つた。娘は急に屈み込んで、クレブスの腕を眞白な齒で咬んだ。この痛さには、流石の荒武者も閉口した。

「氣を付ける、こいつめ」

と叫んで、娘の肌着をびりつと破つた。

すると、この時、耳のはたでバルドインの聲がした。

「あんまりなことをするな、クレブス。放して遣れ」